

ひ想くゆげに

特234

50

著 治 文 口 浦



始



ひ想くゆげに

特234

50

著 治 文 口 浦

特234
50

浦口文治著

にげゆく想ひ (第一集)



東京
株式會社
警
醒
社



第一集目次

まへことば	III-XIII
イ、懺悔と感謝	
一、「日光の續く限りは」	一
附、早速の反響(一―十)	三三
二、葡萄樹の散髪	四〇
三、線また線	四三
四、とこよ不滅の光明遍照	六四
五、耶蘇公生涯の最初一年	六八
六、神か、己か、どつちか	八五

目次

目次

七、信仰の内壓力……………八九

八、パウロのバラカロン……………一〇三

九、天杯拜受をことぶきて……………一一四

一〇、グループメントによる聖書の読み方(其一)……………一一九

一一、グループメントによる聖書の読み方(其二)……………一三三

一二、老友のための祈り……………一四三

一三、「主よみもとに近づかん」……………一四六

附、早速の反響(十一—十三)……………一七八

あとことば……………一八三

まへことば

- 一、おことわり一つ
- 二、「にげゆく」とは
- 三、梅干入りの握飯
- 四、レイメンの一人として
- 五、希臘語の印刷に因みて
- 六、心の校正

一、おことわり一つ 本書所載の十三章は、いづれより読み始められても、少しも差支がない。各章は幸にも他の十二章に對して、多少相互共通の有機的連絡をもつてゐる。また同時に、それぞれ獨立の主張點をもつてゐる。此等を読まれるに、前後の順序立ては別段必要でない。況んやこの前ことばに於ては、尙更の事である。この序文を讀者諸君がい

まへことば

まへことは

つでも、またどの節からでも、適宜にお読みになる事を、私は希望する。もしこの前ことを巻末のあとことばとひとつどきに通讀していただければ、著者にとっては一層の仕合せである。

二、「シヂムヘ」とは、ソラウニシツの名詩 Rabbi Ben Ezra の中の一節

Thoughts hardly to be packed

Into a narrow act,

Fancies that broke thro' language and escaped:

とゞふのがある。その意味は

想ひのとても一つの狭い行爲に

束ね得られぬもの、

空想のたえづ言葉をやぶつて

逃げ去つたもの

といふのであらう。本書所載の感想は、丁度その類ひのものである。此等の感じはその本性上、何人の胸にもしばしば往來するもので、決して少數者の特有物ではない。そして、少しく氣を付けて吟味してみると、その中味に、貴い實がいつも宿つてゐる。しかも、現代人のあはたらしい生活に於ては、其等は往々忘れられがちで、私等の胸から逃げ去りやすい。此等の想ひをにがして仕舞はないで、もつともつと其等に親してみたい、また其等に親んで、そして其等の實行に進みたい、といふのが、私等の魂のこひ願ひである。もう一つ、英語に Winged Words とゞふのがある。此方の意味には、其等の言葉の傳播力の速かさばかりでなく、その中味の靈妙性は、私等凡人の日常不斷の把握に、逸しやういといふ事實もまた含まれてゐるであらう。その Winged (羽が生へてゐるので、飛んでゆき、またにげてゆきやす) とゞふのがこの小著の表題に托された意味である。

三、梅干入りの握飯 かやうなネライをもつて集められた拙稿をば、私は、イ、謙悔と感謝、ロ、慕はしい故人、ハ、山寺から、ニ、街を行きて、ホ、歌人のまねして、へ、年

まへことば

賀はがきよりの六部にしわけた。しかし印刷進行の途中その嵩が豫想外に大きくなるので、結局謙悔と感謝と題する第一部のみを茲にまづ公にして、口以下の部分を第二集にまとめる事にした。

本書所載の十三章が最初公にされた年月を便宜上巻末のあとことば中に掲げて置く。しかし本書に於て私が取つてゐるのは内容順である。年月順から云へば、此等の配列は前後いりまじりである。また此等の拙稿の用語と文體とは、本書のあとことば中に一言してある通りに、殆んど全部最新新たに訂正された。私はこれを茲に特記する。

本書の内容は私にとつては、常に新しい感想である。そこをもつと具體的に云ふならば、現在問題の夥しい我邦の社會にクリスチャンの一人として身を處してゆく間に、私等の魂に投げ附けられる謎はその數が少くない。其等に對して、拙ひながら私自身が試みた答案を集めてみたのが此集である。此等近代社會のスピリタリスティックの謎々をいさゝかでも解決するのは随分手間とひまとのかゝる仕事である。しかし同時に此等の答案が産み出してくれる感想こそ、私等にとつては心の糧である。これら梅干入りの握飯には砂糖氣が少

くて、かえつて酸味が強いであらう。しかし今なほライフの山登りに私等が殆ど毎日舌鼓打ちつゝ味うのは此等である。

四、レイメンの一人として 私に純然たるレイメンの一人である。約三十五ヶ年前、但しほんの數ヶ月の間、私もまた直接傳道の見習をした事がある。この眞似事を私にさせた動機、當時某地方で幸に占めてゐた教育者としての椅子―前途かなり有望であつた地位を辭せてまでも、私をして東北邊鄙の一講義所に赴任させた動機、當時私の身邊の境遇如何に係らず、無論内から働いて來た動機は畢竟私の自己教育にもう一段落をつけて置きたいといふ一念であつた。其頃の私の氣持を解剖すると、他人を教育しようとするにはまづ自己を教育しなければならぬ。そして自己教育の一段落としては宗教生活の経験を早晩積まねばならぬ。さて同じく不可避的の必要件であるなら、餘り遅くならぬうちにその生活経験者の一人となつてみるのがよいといふ位のものであつた。かやうにして、私は自己教育躍氣黨の一人となつた。

その後、心身ともに幾轉變の間に導かれてゆくうちに、私が漸く氣附かせられつゝあるのは自己の教育は興へられるもの、しかも長年月に亙つて、否永遠のプロセスを経てその完成に向はせられるもの、言ひ換れば信じて、仰いで、そしてお受けすべきものである、決して自分の注文通りに、また自分の努力だけで、自分が作爲すべきものではないといふ考へ方である。これを一言にして云へば、自己教育の神興觀である。この私の教育觀の進展と共に、宗教的信仰の側に於て、私がそれ以來自ら恥としなくなつたのは一人のレイマンとしての立場である。

同時に私が近來切實に自覺させられつゝあるのはレイマンの立場にもまた必然的に伴つて來るのが保羅の所謂十字架の悩みであるといふ事實である。所屬教會への日曜出席と一定會費の例月納入と其他かれこれそこに御加勢をしてゐるといふ快感を七日目毎に繰り返しつゝ、毎週のこりの六日間の生活態度——對社會の態度を取てクリスチャン的にしようとは努力しない Sunday Christians (そんな階級がもしも我邦にもあるならば)とレイマンとは別である。レイマンとは禮拜所の聖壇から興へられた教へを各々消化して、

其他の曜日にそれを銘々の社會的立場に持ち込んでゆくものであらう。貧者の一燈にせよ、あわれな寡婦のランプ一つにせよ、この社會といふ大きな神殿にそれを獻納してゆくべく召されてゐるものであらう。かやうなレイマンの一人としての私自身の謙悔と感謝とを集めたのがこの第一集である。本書の第二集もまたもとより同一の立場から集められたものである。

五、希臘語の印刷に因んで

本書の第一章に對する早速の反響第十のうちに杉浦博士がたまたま使はれたのが希臘語ファネローの原字である。その原稿はその儘印刷所に送られたが、その初校にそれが立派に印刷されて來た。それを見て私は喜びの余りに、拙稿中の處々に片假名で示して置いた希臘語を悉く希臘文字に書きかえた。

この事が種となつて、一つ思ひ出す事がある。はや十年餘り前の事、その頃毎月私は「聖書之研究」に寄稿してゐた。或時内村主筆からの手紙に、貴稿中の希臘語だけは日本語に譯してほしい、やむを得なければ、その發音を假名でかゝりたい、一方に於て、印刷所

まへことば

秀英社の方でも手数がかゝつて困ると云ふし、他方に於て、本誌を愛讀してくれる友達の間にも内村の雑誌は誇學的だ、何も極少數しかその讀者にわからぬ希臘語までもかつぎ出さなくてもよさそうなものだといふ評がある云々とおつた。それ以來、私に一つの習慣が出来て、希臘語はすべて片假名でかいてゐた。然るに今度は何等の注意をも與へないのに、本書の校正刷に、希臘原語の活字が用ひられて来た、あたかも其事があたり前であるもの様に。

もう一つ思ひ出す事がある。これは大正十二年四月末の事、その頃赤坂の溜池にあつた基督教書類會社で、かねて注文して置いた博士 A. T. Robertson の大著「希臘語新約書の文法」を受取つた節、見ればその店の本棚に希臘語關係の書籍がかなり澤山列んでゐた。好奇心から私はその賣れ先きを問ふた。店員君は云つた、「なに、牧師がた、神學生達に限りませんよ。大學程度の學生諸君やサラリメン階級にも、しかもナンクリスチャンの間にも、中々購讀者がありますよ」と。私はその時驚きかつ喜んで、時勢の進歩の意外に早い事を感じた。

X

それから丁度十年目の今日、この小冊子に希臘語がはいつてゐても、印刷工も別段に迷惑がらず、出版者も一向警戒しない程に、一般讀者の眼がこの古代文字それに見馴れて来たらしい。かやうに目立たぬながらの我邦一般の進歩は—聖書の言葉の上ばかりでなく、その中味の解釋の方に於てもまた著しくあらはれて来た進歩は私等にとつてうれしい。

六、心の校正 原稿の改正、訂正、またその校正—再校—三校と本書の印刷には私の手数と時間とが最初の豫想以外に多くかゝつた。その間に私が覺へたのは自分の心が校正されてゆく事である。私の表現はまだまだ拙いが、それでもこれだけの訂正のお蔭で、本書所述の感想そのものが一層整理され、また精鍊されて来た。それだけ私自身の魂にしみ込んで来るのが其等の中味の生命である。私等の考へ方はつきりして来るだけ、私等の感じ方が鍊れて来るし、またそれだけ私等の意志に底力がいづつて来る。文の校正が心の校正の手引をしてくれた事、これが本書の公刊に際して私に與へられた最後また最大の感謝である。

まへことば

XI

まへことば
昭和七年十月十日午後二時、うらゝかに晴渡つた秋の空、二階書齋の南窓ごしにさ
しこむ陽光をあびながら、近處の軒端に囀る小禽の聲を耳にしつゝ

東京 大森にて

著者 しろす。

にげゆく想ひ

イ、讖悔と感謝

一、日光の續くかぎりは

一 イエス途往くとき、生れながらの盲人を見給ひたれば、弟子たち問ひて言ふ
「ラビ、この人の盲目にて生れしは、誰の罪によるぞ、己のか、親のか」
イエス答へ給ふ「この人の罪にも親の罪にもあらず、ただ彼の上に神の業の顯
れん爲なり。我を遣し給ひし者の業を我ら晝の間になさざる可からず。夜き
たらん、その時は誰も働くこと能はず。われ世にをる間は世の光なり」
か
く言ひて地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目にぬりて言ひ給ふ、「ゆき
てシロアム（釋けば、遣されたる者）の池にて洗へ」乃ちゆきて洗ひたれば、

一、日光の續くかぎりは

一、日光の續くかぎりは

見ゆることを得て歸れり。

(ヨハネ傳、第九章、第一一七節)

二

時間の短さと成績の小さと

この世の中で何事をするにしても、私等にとつて常に惱みのもととなる事が二つある。時間制限の切迫と成績のカサの小さい事とがそれである。この感じは私等のする仕事の精神的價値が高いほど、益々痛切になつて来る。耶蘇御自身は此等二つにいかにして打勝たれたか。あんなに短い時間を彼はどういふ風に使はれたか、またどんな精神を以て彼はあれだけ働かれたか。此等二つの問題に對して、彼御自身の信仰と、並にそこから流れ出て來た彼御自身の實行生活とは、どんな答を私等に與へてくれるか。私等お互がなるべく深く窺つて見たいのはその點であります。

手の奇蹟よりも心のそれ

ヨハネ傳第九章の初めに、諸君のよく御存じの通り、イエス途行く時、生れながらの盲人を

見て、その眼を開き給ふた事の記事がある。これはイエスの奇蹟の一つで、私等現在の智力によつては、それを學問的に説明する事が出來ない。假に眼科醫の知識を借りて來て、この奇蹟の解釋を企て、みても、私等基督者の信仰生活にとつて、その試みは何の役にも立たない。さやうな好奇心の満足を求めるとも、寧ろこの奇蹟が行はれた當時のイエス自身のお心持を少しでも窺つて見たい。もしその事が出來れば、その方が私等にとつてよりよい教へとなり、またより大きい力となりませう。その中味の不思議さから云へば、この盲人の目が開いて來た經過を想像するよりも、これを開かれた時の耶蘇自身のお心の動きかたの方が、私等にとつて、より大きい奇蹟である。あの「地に唾し、唾にて泥をつくり、之を盲人の目に」ぬられたのは彼の手の奇蹟である。が、しかし其前に彼の弟子達に答へられた彼のお言葉にこもつてゐるのが彼の心の奇蹟である。お互に窺つてみたいのは其方であります。こゝに「途行く時、生れながらの盲人を見」とあるが、かやうな事實は猶太亞の昔ばかりでなく、世界中到る所に、耶蘇以前にも、また以後にも、しかも現在我々の社會にも、その數に限りがない。生れながらの重病人や、生れながらの貧乏人はこの世に目に餘る程に多い。

一、日光の續くかぎりは

三

更に一步を進めて、肉體の上ばかりでなく、心のうちの其等をも加へるならば、その數は逆も何人にも數へ切れずまい。かやうに無數な、しかも悲惨至極な社會現象の一つに、この時イエスはその弟子等と共に出會された。

然るにこの事實に直面した時の態度に於て、イエスと弟子等との間に大きな相違がある。弟子等がその時直ちに始めたのは、此事實の原因調べ——その責任所在の詮索である。その詮索に行き詰つて、彼等はイエスに尋ねた、「ラビ、この人の盲目にて生れしは誰の罪によるぞ。おのれのか、または親のか」と。これはいかにも人間らしい質問です。私等がもし當時彼等の間にゐたならば、きつと起したのがこれと相似た疑ひでせう。其頃の猶太人には人事百般を宗教的の側面から見るといふ習慣があつて、弟子等もまたそれに捕へられてゐた。その結果として、この「生れながらの目しひ」といふ事實の由來をば直ちに罪惡にもつて行つた。そこでこの人のこの不幸の出處である罪惡は親からの遺傳か、または己れ自らの特發かと尋ねた。然るに弟子等の見方は大いに違つてゐたのがイエス御自身のそれである。

この人間的の不具、しかも生れながらのそれといふ事實に直面して、深くそゝられたの

が彼の同情である。この事實の痛ましさに對する彼の感じ方は痛切であつた。がしかし、彼は此事實の原因を、——その責任を、弟子等のやうに、罪惡觀にもつて行かれない。當時の猶太人の間に一般に行はれてゐた時代思潮の淺はかさは彼を囚へ得なかつた。この不具が遺傳であるとか、または特發であるとかいふのは、いかにも足もとだけは科學者式に細いが、しかしそれから一寸先は皆目闇である。さやうな淺薄な考へ方を彼はせられなかつた。彼は即座に答へられた「この人の罪にもあらず、親の罪にもあらず、たゞ神の業の彼の身上に顯はれんためである」と。茲の記事を讀む毎に、私等が驚かされるのはイエスのお考へが、いかに自由奔放であつたか、いかに當時の時代思潮に超越してゐたか、またいかに大局達觀的であつたかといふ點である。

耶蘇の著眼點はかやうにずば抜けて、その周圍のレベルを超越してゐた。それと同時に、彼のお考へがまた極めて徹底してゐる。その徹底さの一例をあげれば、この盲人の身に——生れ乍らの不具者の身の上に神の業があらはれると答へられたが、その顯はれるといふ原語フアネローセエは英語改正譯に於て、be made manifestとなつてゐる。然るに James Moffatt

博士の新譯には、be illustrated 即ち、圖解される、繪解される、またはその手本として示されるとなつてゐる。なるほど顯はれるとか、顯現とか云へば、その言葉の大きい割合に、その中味が掴みにくい。圖解、繪解、または手本として見せるといふ方が平たく砕けてゐて、それだけ私等に分りやすい。神の方から見ると、この奇蹟もまたその業の顯現であるが、人間の方から申せば、イエスの醫療はその神の業の顯はれの illustration (圖解、繪解) の一つであります。

二つの繪解

さればとて、私はイエスを眼の鋭い、また考への深い思想家としてのみ見上げるのではない。凡そ物の見方や考へ方はそれが健全に働く場合に於ては、私等の實行生活の上に直ちにまた大いに影響して来る。世間に知れ渡つてゐる通りに、茲の記事は世界のクリスチャンスにとつて、今日までにどれだけ多く更生の福音となつたか、その實例が數へきれない程にあるでせう。茲にほんの一二を擧げるならば、諸君は既に御存知でせう、私は最近に聞き及

びましたが、あの關西學院の教授、岩橋武夫氏が青年時代に失明して、大煩悶・大悲觀に陥られた當時、この意外の不幸をあきらめさせるために、その周囲の人々は色々と思へられたが、彼は却つてそこに大きな蹟を覺えられたさうです。そのうち偶々この一段の記事を思ひ出して、彼の精神が漸く乗越えさせられたのは自分の失明に對する原因解釋や責任自覺で、同時に氣附かせられたのがこの大不幸もまた神の業の我が身の上に顯れんがためであるといふ點であつたさうです。それ以來始まつたのが彼の心機の一轉、心境の一進——もし聖書の用語で云へば、メタノイアで、その結果が即ち彼の美しい性格の展開とあの力ある活動の繼續とであるさうです。これはいかにも尤もな次第であります。

もしもう一つ私の家庭内にあつた事柄を述べさせていただくならば、私の妻が四年前丁度この頃、かなり大きな手術をうけました。それが全然意外な大患であつたので、本人自らは勿論の事、その周囲の者までもこの重病の出来来た原因は遺傳か、その責任の所在は何處かと思ひ惱まされました。そして昔の猶太人式に、またこの頃の多くの宗教者風に、その原因を家系とか自己の罪惡とかにもつて行つた。その結果の煩悶が随分久しかつた。そ

の折から彼女が幸にも説き聞かされたのがこの一段の物語で、また漸く氣附かせられたのが結局この重患を通じて己が身が神の業の圖解に用ひられてゐる——自分が世間に數多い同病者—自らそれがために絶望してゐるばかりでなく、周圍からも絶望されてゐる一般の重症患者のために、神の榮の挿畫の役目をさせられてゐるといふ事であつた。それ以來随分長い療養生活の間にも、またその次に加つた別の重病の間にも、心長閑にその回復をまつ事が出来た。當時お世話になつた醫伯がたもその落着いた精神状態が常に血液の循環を敏活にし、また患部の恢復を促進したと喜んでくれました。

晝、夜、日中

さて神御自身がその榮の manifest 顯現者で、耶穌基督がその illustrator 圖解者で、私等皆々がそこに用ひられる illustrations 挿畫であるといふのは確に味ひの深い一面の眞理である。が、しかし今茲に御同様特に注目したいのは耶穌基督御自身がこの圖解者として立たれた時のお心持である。日本語譯の聖書では、文句の順序が前後してゐる。しかし原文で

は、その順序が正しく出てゐる。随つてその意味がまた明快にわかる。イエスは進んで云はれた、我々にとつて必要なのは神の業にこそしむ事で、但しそれは晝の間の事である。この時間制限の While it is day「晝の間」を Moffat 博士は改譯して While daylight lasts「日光のつゞく限りは」とされてゐる。私の表題もこの新譯から取つたのですが、神の業にこそしむ事をもつて我々の本分とするといふ抽象的の分限論と共に、茲に明かに示されてゐるのは時間の具體的制限といふ彼の自覺である。彼の考へ方はかやうに著實であつた。彼は更に進んで言はれた「夜來らん、その時は何人も働く事あたはず」と。また一歩すすめて、彼は加へられた「我世にをる間は、世界のために光なり」と。こゝに並べられてゐるのが三つの時間である。その第一が「日光のつゞく限りは」で、その第二が「夜來る時」で、その第三が「我世にある間は」である。此等三つの時間制限を一々正確に自覺し乍ら、彼は其等三つの一々に正當な比例を興へて、それぞれの調節を整へてゐられる。かやうに都合のとれた時間觀念は、今日我々の間に甚だ保ちにくい。否、私等現代人ばかりでなく、古來多くの傑れた人々までも、屢々躓いてゐるのがこの時間觀念の調節に於てである。

カアライルの聖書読みあやまり

今その實例の一つを擧げるならば、あのトマス・カアライルが聖書読み損ねの一人である。この文豪が世にのこしてゐるのは多くの偉い考へと優れた文章とである。しかし彼を讀むには常に利益と害毒とがあるとあの内村鑑三先生も早く言つてゐられる。日本の名士で云へば、カアライルに最も多く親まれた一人は此人でせう。それだけまたよく彼に知られてゐたのがカアライルの弱味でせう。さて彼の所謂害とはカアライルの書物を通じて私等の胸にそゝられやすい不平心・いらつき心即ち社會の現状に對して自ら何とかせねばならぬといふ焦り氣分でせう。この焦躁氣分は、その實、カアライル自身がつねに懷いてゐた精神状態である。

その證據の一つが彼の名文中にある。そこに屢々引用されてゐる聖書の句として、私等の目に立つのが即ち茲のイエスのお言葉の眞中の一節「夜來らん、その時は何人も働くこと能はず」である。彼の最も雄辯な時、彼の屈指の傑作中に、幾度も引用されてゐるのがこの一

句である。耶蘇基督御自身が折角念入りに練り合はされた晝、夜、日中といふ時間觀念の中から彼が抜き出してゐるのはたゞ夜の部分のみである。其あと先の晝が彼の引用句中に抜けてゐる。漢語に拔萃といふ熟語があるが、彼が茲に耶蘇のお言葉の萃より抜いてゐるのはそのまん中ばかりである。それは決して我々日本人の所謂拔萃ではない。その影響として、カアライルの文章に見出し得られないのがイエスのお言葉に満ちてゐる程の釣合と朗かさである。否、そればかりでなく、彼の名文を讀むうちに私等がやゝもすれば咬られやすいのが日暮れんとして途遠しの感じである。

然るにこのカアライル氣分は、勿論彼一人のものでなくて、私等現代人一同に共通の心持である。社會の表面にあらはれて來る種々の不吉事、日々の新聞に傳へられる雑多の不祥事、しかもその動機が屢々美しいのに拘らず、その結果が甚だ嘆かましい事件の由つて來るところは、大抵の場合に、この「夜來る」といふ切迫感にあるでせう。茲に私がこの文豪を持出したのは決して名家批評のためではない。寧ろ私等普通人の間に潜んでゐる精神上的弱味、しかも聖書讀みの聖書知らずと評されやすい弱點、云ひ換れば、私等自身にありが

な時間觀念の不釣合を省みて自ら戒めたいからであります。カアライルの読み方ばかりではない。一般に古人先輩の言葉を味ふ時に、その裏おもてをかやうに見わけるのが即ち活書活讀の一法であります。

耶蘇にとつての午後、夕暮

ところが著眼一轉、カアライルの薄暗い側から耶蘇の明るい側を仰ぐと、そこに驚くべき光りが出て来る。イエス御自身もまた實は、「夜来る、その時には」といふ自覺を痛切に持つてゐられた。その自覺は彼の生れ附きの素質の致す處ではなく、また彼の疲れた神經の作用でもなく、一の客觀的に差し迫つた、しかも極めて確かな事實であつた。察するに、この一段の記事の始めにある「途行く時」の途とは多分エルサレム城内の途であらう。その證據となるのが第七節に指定されたシロアムの池である。耶蘇のこのエルサレムへの上京はあの宮潔めの祭(參照ヨハネ傳十章第二十二節)の際の事か、どうか。それはまだ斷言し得られない。但しどう見ても、それはあのペリヤ教役以前の事であつた筈がない。このペリヤ

教役とは御存知の通り、イエスがあのガリラヤ教役を終つて、ヨルダン河の向ふ側に渡られた頃から、最後のエルサレム上りをせられた迄の事である。この最後のエルサレム上りとは、曆で云へば紀元三十年四月二日の事で、そこに彼を待ち受けてゐたのがあのカルバリ山上の十字架である。この豫想は彼にとつて決して空想でも、早合點でもなく、その根據は明々白々の事實・確實至極の事實があつた。その事實の見透しがハッキリとついたらこそ、彼はガリラヤの地を再び踏むまい、またペリヤの村々を廻るのも今度が最後だと覺悟しつゝ、この地方をめぐつて行かれた。そしてこの奇蹟の行はれた時は、早くても紀元二十九年の十一月頃で、遅くてもその十二月の下旬、冬至の頃(ヨハネ傳十章第二十二節)であつた。この時の測定はとにかくとして、此事より向ふ半年以内には彼の身の上にも夜が來るといふ自覺はハッキリしてゐた。

彼の生涯を、もし一日にたとへるならば、彼が既に踏込んでゐたのはその一生の午後である。彼にとつての夕暮は既に近づきつゝあつた。向ふ數ヶ月のうちには十字架上の夜が來るといふのは彼にとつてどうしても否まれない豫想であつた。もし大森驛で上野行き

車に乗れば、半時間以内にそこにつく事が確かである通りに、彼の歩みは今や一定の速度で一定の軌道を辿りつゝあつた、その軌道の終點が即ちゴルゴタの丘であつた。隨つて彼の午後の太陽はやがて没して、そのあとにすぐ夜が来る、その時は彼もまた當然働く事が出来ない、彼の働きは一時中止せられるといふ自覺は彼にとつて聊も病的でなかつた。それは彼にとつて、極めて痛切な但し當り前至極の事實であつた。

一個の敏感な天才として、カアライルにもし「夜來る、その時は」といふ引用句を振りかざす権利があつたとすれば、イエス御自身はその幾十倍かこの文句に捕へられやすい途を辿り行かれつゝあつた。ところがその「夜來る」といふ自覺の前に彼が出されたのは「日光のつゞく限りは」といふ觀念である。そしてまたその「夜來る」のあとに加へられたのが「我世にある間は、世界のために光なり」といふ信仰である。丁度昨日氣がついた事ですが、英語の Familiar Quotations と云ふ熟語辭典の中に「この夜來らん、その時は」云々の一句が掲げられてゐるのに拘らず、そのあと先の「日光のつゞく限りは」と「世界の爲に光である」とは一切載つてゐない。この一つの小さな事柄によつても判斷し得られるが、世界の文學が隨つ

て世界の人々がこの真中の一句に動かされつゝある割合に、その前後にあらはれてゐるイエスの眼の鋭さと胸の深さとは、私共の間にまだく測り盡されてゐない。

かやうに底深く練られた時間觀念の産物として、いかにも自然に行はれたのがこの奇蹟である。彼が途ゆく時この目しひをいやされた處を外側より見れば、その様子には子供等が夕方その家への歸り道に、道草を拾ひ取るやうな處がある。彼の素振りのいづこにも、この神通力の demonstration (演出) に自己満足を求めるといふやうな芝居氣は一切ない。却つてこれが自分にとつて、或は最後の開眼であらうかと自覺し乍ら、その自覺を胸の中にたゞみ込んで、その思想感情の調節を少しもはづさないで、「日光のつゞく限り、……我は世界の爲に光である」といふ見方と信仰とを以て行はれたのがこの奇蹟である。あの耶蘇の唾液と途上の泥土とシロアムの池水との成分はどうか、また其等が調合されてどんな作用をおこすかといふ不思議よりも、私等にとつて、更に大きな奇蹟は耶蘇御自身の考へ方と信仰との中味そのものである。そこに潜んでゐる彼の心の動き方こそ、私等現代人一人一人の目よりその鱗片を落してくる大きな奇蹟であります。

信仰の大と實行の小と

ところが更に驚くべき事がまだその先にある。イエスは言はれた「我この世にある限り、我はこの世界の爲に光なり」と。抑も世界の光明であるとか、この世の爲に光になるとか、いふのはすばらしい大きな言葉である。この言葉に感激して、昔から幾多の青年が身を挺して當つたのが世界傳道の大業である。否、青年ばかりではない、年長者にとつても、この言葉は絶えざるインスピレーションの源である。これは思想として高遠雄大で、言葉としてまた痛快至極である。

聖書學者のうちでも、Westcott 博士の考へによれば、茲の光りといふ言葉の緣起はあの宮潔めの祭——俗に所謂光りの祭に際して、エルサレム神殿内に點ぜられた御神燈煌々たる處にあつたらうと。さもありさうな事である。しかしその緣起と metaphor とはとにかくとして、我は世界のための光なりといふのは一寸大言壯語と聞こえやすい。然るにこの言葉を吐かれた耶蘇御自身の實行は果してどうであつたか。こゝにまた私等にとつて意外千萬

な事實があらはれて来る。世界のために光りなりと廣言されたイエス御自身の所行如何を考察するために、最も適切な一例がこゝにあがつてゐる。それは途行く時、たまたま見當つた目しひを一人いやしたといふ事である。彼の想ひは高く、彼の言葉は大で、しかも彼の行はいかにも小さい。そこに私等が覺へさせられるのは一種の開きである。矛盾である、否、喰ひ違ひである。

その開きとその矛盾とを覺えるからこそ、社會現制度の革命主張論者は云ふ「宗教は阿片だ」と。彼等の立場から言へば、これは至極尤もな批評であらう。現在やみに蔽はれてゐる世界のために光りとなるには、熾烈な光線を社會の隅々までも導き入れて、そこに横たはつてゐる諸々の不正・不義・不合理を根絶させる事が急要だ。それを敢てし得なかつた過去の宗教は畢竟一種のつけ膏藥・一時まに合せの鎮痛劑・しかも社會神經の敏感性の癩痺化を能事とする阿片劑である。加ふるにこれまでの慈善事業は結局二階からの目薬に過ぎない。そんな宗教や慈善を頼みとしては、社會といふ大機關其物は舊態依然として、毛頭改善せられない。その中に寄生してゐる憐れむべき階級は益々その慘状を加へるのみで、これと同

時にこの大機關の内側に巢をくつてゐる利己心と罪惡とは益々その毒手を逞ふして來るではないか。この非常時に際して所謂宗教が此處の目しひ一人をいやしたり、彼處の足なへ一人を歩かせたりして、そして自ら得意でゐる處を察すれば、その宗教それ自身がとりも直さず一種の阿片だ。と云ふ風に社會改造論者が思ひ迫るのはまた無理もない事であらう。

ヨハネの疑問 — 信仰阿片論

ところがかやうな宗教阿片論は今にはじめぬ昔話で、イエス御在世の當時にもかなりに勢力をふるつてゐた。イエスにとつては一の先輩であつたあのバプテスマのヨハネがやはり國家改造の直接行動派であつた。猶太亞の社會といふ大木に腐敗が這入つてゐると見れば、それは大斧の一と揮ひで即座に切り倒さるべきものと思ひ込んだ。あの王宮の奥に不義が、不潔が、行はれてゐると見ると、彼は挺身率先、勵聲疾呼、王へロデの罪惡を咎めた。直情徑行の人、血氣壯烈の革命家、バプテスマのヨハネは自己の一言一動よく社會の不正と宮中の腐敗とを一掃し去り得るものと信じた。その信念をば彼は直ちに己が行動に移し

た。彼の國家改造論の短兵急な實行努力はその反動を喚び起した。その結果として、彼は禁錮の身となつた。

時に紀元二十七年の十二月、彼の活動開始より約一ヶ年半の頃で、耶穌御自身の方で云へば、あのガリラヤ教役開幕の當時であつた。かやうにその活動の自由を奪はれてしまつたと約半年の後、彼はその牢屋より弟子二人を遣して、イエスに問はせた。「國事日々に非にして、民は塗炭の苦しみに陥り、人心險惡にして、農村の事急を告ぐる今日、あなたは何をしておられますか。我々がその來臨を期待すべきメシヤは果してあなたでせうか。または他に待ち受くべきでせうか」と。この質問はまさしくヨハネの氣質と性格とから出で來つたものである。あの馬太傳第十一章始めの記事を讀んで、私等は彼に對して甚だ同情に堪えない。彼のやうな性質の人、彼のやうな事業家がこのやうな立場に閉ぢ込められると、誰しもの胸に襲ふて來るのはかやうな疑問であらう。

「我が爲に躓かぬもの」の祝福

然るにこの間に對して與へられたイエスのお答が一見甚だ不思議である。曰く「汝等歸りて自ら見聞きする儘をヨハネに告げよ、目しひは見、足なへは歩み、癩病者はきよまり、耳しひは聞き、貧しき民は福音化せらる」と。此等の事實はバプテスマのヨハネが約二ケ年間たえず見聞いた處である、また氣にしてゐたことである。あの舊約以來豫言されてゐるメシヤとは果してかやうな小事にあくせくして大事を忘れるものであらうかといふ疑ひは彼の入獄以後に初めて懷かれたのではない。それが彼の胸中に往來したのは彼自身のさかな活動期中に既に然りであつた。ヨハネ式の社會改造案——表面的大規模の、但し一氣呵成的の革命と、ナザレのイエスの神國來といふ主張、否、茲の目しひをいやし、かしの貧者を福音化すといふ位の實行との間にはその形に於て、甚だしい相違があつた。我はこの世界のために光だといふ耶蘇の言葉は大きい、しかしその日々の實行は小さい。その形式上の大小の相違をいかに調節さすべきかといふ宿題に對する解決をばヨハネ自身は未だ與へ

得なかつた。それはこのバプテスト一人に限られた解決難ではなかつた。古來世界の勞作者一般に通じての悩みである。壯士最後のつまづき、高士最後のわづらひ、仙者最大のなやみ、聖者最深のなげき、要するに其等の歸する處は皆この一題であらう。ヨハネのこの問ひに接して、苟も人心あるもの誰か己が胸を打たれないものがあらうか。それのみではない。私は敢て申したい、イエス御自身にとつてもまたかなりに煩はしい宿題はこの地上の小をいかにして天上の大に連結さすべかであつたらしい。上記の「目しひは見……貧民は福音化させられる」といふ事實をあげてヨハネの弟子等に答へられた後、耶蘇は更に一節を加へられた。「凡そ我がために躓かぬものは幸ひなり」がそれである。茲に he whosoever 「凡そ誰にてもあれ」といふ概括的首辭を掲げて、それに續けて「我がために更に躓かぬ」と云はれたのは抑もどんな意味であらうか。「誰にてもあれ」といふ以上はヨハネとその弟子等に限られてゐない事は確かである。また更に躓かぬものは幸ひだといふ以上はその裏に誰でも實際上躓きがちだといふ觀察がこもつてゐる事もまた確かである。私は茲にもまた敢て申したい、イエス御自身もまた屢々その躓きを覺えられたであら

う。己が仰ぐ處の高さと歩む處の低さ、己が願ふところの重さと許される處の輕さ、己が信仰の大と實行の小、此二つの間に存する開き——懸隔といふ自覺に對して、彼もまた自ら躓かんとするといふ經驗を幾度かお持ちになつたであらうと。

彼のお言葉で、他人に與へられたものゝ大部分はまづ御自身の宿題に對して——疑問に對して、答へられた處であるらしい。例へばパウロの場合に於て、それが殆んどすべて然りであつたと云ひ得られよう。されば耶蘇のみがその例外であつたとは誰が云ひ得られようか。私等のうちに何人もさやうな證據も權利ももつてゐるものはない。耶蘇はひとり自ら高しとして、ヨハネの躓きを見下すといふたちのお方では斷然なかつた。ヨハネのこの問ひに接して、彼が自ら覺へられたのはその胸の傷痕のうづきであらう。それを覺えられそうなのが私等の信頼したまふ敬愛する耶蘇であられる。またその傷といふのも決して古傷ではなくて、その實まだほんの新しい生傷であつた。ヨハネの入牢以來、約二ケ年間、彼自身にとつてもいたくしい問題が茲にあつた。ヨハネの入牢が耶蘇御自身に與へた衝動は實にはげしかつた。彼が決然蹶起して、そのガリラヤ教役に踏込まれたのも、その最近の動

因は茲にあつたらしい。隨つて彼にとつてヨハネの入牢は對岸の火事どころではない、實は隣家の出火同然であつた。バプテスマのヨハネとナザレのイエスはその社會進出の仕方に於てこそ違つてゐたが、その同胞愛の精神に於ては、まさしく意氣相許し肝膽相照すの間柄であつた。されば甲の宿題は即ち乙の疑問であつて、兩者の間にはたゞその解決の遅い速いの區別があつただけである。否、現存材料の範圍内で言へば、ヨハネはその解決難に躓いたのに、耶蘇はその徹底的解決に安立せられただけである。

隨つてヨハネに對する耶蘇御自身の態度と言葉とにたえず漂うてゐるのは底深い理解と温い同情とである。その理解と同情とより割り出された耶蘇のこの答が當時ヨハネの胸に傳へたのは果して何事であつたか、また今日現在私等銘々に傳ふる所は何事であらうか。私等の仕事の成績のカサが餘りに小であるといふ自覺に對して、耶蘇が答へてくれられる所は果して何事であらうか。耶蘇御自身の過去二ケ年間における言行は盡くヨハネ等の見聞した所であつた。耶蘇のあのお答へのうちには新事實が一つもなかつた。新聞價値より云へば、一より十まで其等は陳腐であつた。その陳腐な事實、誰にも知れ渡つてゐて、隨つ

て相手方にも知れ切つてゐた事柄を、茲に再び列べたてられた耶蘇の眞意は、果してどこにあつたか。事實は知れてゐる、しかし意味はまだ味はれてゐない。その意味を味はぬ者は誰にせよ當然我が爲に——我が仕事に、否、我が精神に——躓くであらう。我自身ですら幾度かそれに躓きかけた。その度毎に我自身が深めたのはその意味の味ひ方である。その意味を早く味つてほしい、それが我に躓かぬ唯一の途だ。といふのが耶蘇のこの答へに於けるネライであつたらしい。あの福音書中に與へられた材料に立脚して、私は只今かやうに信じてゐます。

耶蘇の神秘的兄弟觀

さてさやうなネライをもつて、耶蘇が此答に於て傳へようと思はれた中心觀念は何であつたか。私は茲に手短かに申したい、それは父子も一、大小無差別といふ耶蘇の神秘的信仰であつたと。かやうな信仰は私等平凡人の目には甚だ見分けにくい神秘的のものである。現に唯物的の歴史觀と功利的の經濟思想とに囚へられてゐる現代人の立場より見れば、

この信念もまた畢竟一の迷信にすぎないであらう。が、しかし眞理は必ずしも一般人にわかりやすい方と眼前の實利に直接交渉のある事とに限られてはゐない。耶蘇御自身の著眼は寧ろかやうな神秘的のものであつたやうである。それが彼の行爲の原動力となつてゐた事は云ふ迄もないとして、彼の言葉と教訓との中心點がまた確かにそこにあつたらしい。

その例證は數多いが、耶蘇御自身に於けるこの意識の最も強い、また明らかな表現がある。その羊と山羊との組別けといふバラブル(馬太傳二五、三一以下の)にあるであらう。人之子のその榮光の位に坐する時、その御前に集り来る諸の國民は國籍無差別に二分されて、羊は右に、山羊は左におかれよう。そしてこの榮光の王は右側の者等に云はれよう、「來れ、汝等、わが父に祝福された者よ、來りて世界の定礎以來、汝等の爲に傳へられたる國を嗣げ……汝等は我が飢えた時に食はせ、渴いた時に飲ませ、旅びした時に宿らせ、裸であつた時にきせ、病んだ時に見舞ひ、獄にあつた時に訪ふたではないか」と。その羊共は不審がつて、「主よ、いつ其等の事がありましたか」と尋ねるであらう。その時主はそれに答へて云はれよう「まことに汝等に告ぐ、我が兄弟なる此等のいと小さいものゝ一人に爲したるは即ち

我自らになしたのである」と。また左側の群に彼は云はれよう、「去れ、汝等呪はれたる者等よ、汝等は永遠の火に入れ、……汝等は我飢えた時に食はせず、渴いた時に飲ませず、旅びした時に宿らせず、病みまたは獄にある時に見舞はないではないか」と。其時彼等また怪んで、問ふであらう「主よ、それはいつの事でありませんか」と。その時の答へもまた同じであらう。「誠に汝等に告ぐ、此等いと小さい者等の一人にしないのは即ち我にしないのである」と。イエスは實に大きな神秘的信仰者であつた。其頃、別な處で父と我とは一つであるといはれた通りに、その神秘的一體關係を押し擴げて、彼自身とその小さい兄弟等の一人一人とがまた一つであると言はれた。あの父子もとい、大小本来無差別といふのは彼に於て決して修辭的の表現ではなかつた。それは寧ろ眞實また眞劍な信仰告白、そして彼にとつては當り前な信仰告白であつた。それは私等の平素の心持と遠くはなれてゐる。それだけ高いのが彼の方で、また低いのが私等の方である。かやうな信仰生活に於て私等はまだまだ未熟者である。

但しかやうな神秘的信仰に對して、私等は決して失望するに及ばない。我國民一般の過去に於ける宗教的經歷が指し示してくれるのは私等將來の發達餘裕である。たしか我邦奈良朝の佛教興隆に與つて大いに力のあつた聖武天皇のきさき、所謂光明皇后の御事であつたと記憶するが、元來佛教の篤信家で、その personal religion の實行に於てまたすぐれてゐた彼女が、ある時汚い姿の乞食を憐んで、その御殿に入れて湯をつかはせて、自らその體を潔めてやられた。其時この乞食の身體から淨光燦爛たる佛の後光がさして來たといふ話がある。この物語は或は印度、または支那からの傳説であるかも知れない。たゞ私等の事實が果して我邦の歴史にあつたか、どうか、私は今それを問題としてゐない。たゞ私等の意を強うするにたるのはこの物語の中心觀念——例へば乞食のうちにも佛がいました給ふといふ神佛内在觀、即ち一種の神秘的信仰が我邦の上下一般に尊信されてゐたといふ事實である。佛教が我邦へ初めて傳來した一千二百十二年以來、一百五十年餘を経て、我が國土に落附

てきたのがこの神秘的佛教の信念である。
これこそ私等にとつてよい手引である。外面から見ての乞食もその内在から見れば佛である通りに、外面から見ての目しひ、耳しひ、手なへ、足なへ、癩病人または貧乏人な

ど、その外観價値のいと小さい者一人一人がその内在の實質に於ては我である、即ち彼等になされる事は我になされる事であると耶蘇は信じてゐられた。この神秘的兄弟主義、神秘的共存同榮主義、あの科學的智力によつては到底解剖の出来ない父子一體觀、即ち神人一體觀や、あの唯物史觀によつては勿論檢討も辯證も出来る筈の絶無な大小無差別觀に透徹してゐられたればこそ耶蘇の十字架への歩みはあれ程に足もと確かであつた。

かやうな神秘的信念に徹底し得なかつたればこそ、バプテスマのヨハネは彼に躓いた。イエスの最後のお言葉「凡そ我がために躓かざるものは幸なり」が二千年後の今日、私等現代人になほ傳へてゐるのはその底深い響きである。特に我が社會の各方面に漲つてゐる一種陰慘な風潮が私等を捕へて現在日々にくりかへさせつゝあるのはあのバプテスマのヨハネ同様の躓きであります。

新首相の舊主張

先頃、新聞紙に出てゐたので御覽になつた方々も多いでせう。あの齋藤首相が誰やらに書

いて與へられた書に「修徳須於至微之事、施恩宜於不報之人」といふのがあつた。第一行の須於と第二行の宜於とが果してこの通りであつたか、私の記憶は不確であるが、しかしとにかくこの一聯の意味は誤解されやうがない。さきに至誠の人、濱口總理が倒れて、次に智謀の人、犬養首相が倒された、その後、この徳操の高い齋藤子爵を迎へて、政府の首班にいただく事は國家非常時の今日、最善無二の計であらう。また彼を會長として仰いでゐる中央教化團體聯合會が「自力更生」といふ旗印の下に、國民教化の徹底を叫んでゐるのもまた不得已次第であらう。

しかしもし一步進んで冷靜に考へると、あの書に示された齋藤首相の着眼とこのモットーに含まれてゐる主張とは、果してよく我邦今日の青年多數を動かして行くであらうか。我同胞の大多數を現在動かしてゐるのは果して何であるか。至微の事どころか、小事には頓着するな、大事をやれ、何か大事をやらねばならぬぞといふのが其氣分であらう。もし社會の形勢切迫といふ一面觀に捕へられるならば、國家の大事と思込んでやるその行動に前後の思慮が乏しくなりがちであるもまた無理ならぬ勢であらう。かりにも恩を施すとせば、とにかく

報ひざる人にするのは駄目だ、何事をなすにもなるべく報酬の多い方を選べ、なに不報の人に施恩するなどは氣樂な隠居の道楽だ、働き盛りの銘々にとつてそれは時勢遅れの至りだ、といふのが今日社會人の大多數を支配してゐる考へであらう。もし金錢萬能の經濟學と唯物的の社會觀とを奉ずるならば、報酬第一主義が國民を囚にしつゝある事は決して怪むに足らぬであらう。

申す迄もなく、齋藤首相は人格者として稀有の優越者であられませう。しかし彼の徳性も要するに現代の産物ではない。淺薄な現代思潮と流行物式の道徳修養とは決してあれ程の個性を生み出す力をもつてゐない。彼の人格は勿論見事に相違ありませんが、しかしそれは我邦でもはや過去の産物・但し一つの世にも極少數しか見出されぬ産物でありませう。私は失禮ながら懸念します、彼のあの麗しい文句も書も結局床の間の掛物として拜見せられるに止りはしないかと。あの至微とか、不報とかいふのはこれをイエスの信仰、實行、並にその實行にあらはれてゐる神秘的の一體觀によつて生かされなければ、今日の世界ではもはや死語でありませう。それが死語になつてしまつてゐればこそ、聞けばあの井上日召

氏一派の血盟團とか、帝都暗黒化の農民決死隊とかいふのが茨城縣其他から飛び出して來るのでありませう。また國家の干城、秩序の護衛者といはれた陸海軍士官の中からあの寒心すべき暴行連中を出したのも、詮じ詰めて見れば、同じく神秘的信念消滅の結果ではありますまいか。あれ等の人々は多分、その動機に於ては純で、その感情に於ては壯でありませう。が、しかしその行動の影響と結果とに於て、我が社會全體が強ひられたのは大混亂と大逆轉とではありませんか。

説教宣傳よりも懺悔感謝

社會の此等最近の實狀を考へ合す時に、私等クリスチャンはもとよりその數に於て少く、その資力に於て乏しく、またその事業に於て微々で、到底社會改造論者の算盤にのりませない。さればとて私等は果して社會周圍の風潮に引きづり込まれて、その微勢力を、その無資力を、歎息すべきでありませうか。私等の歎息すべきはそこではなくて、ほかにありません。私等自身がヨハネ式の躓きを今なほ繰返しつゝある事がそれでありませう。

午後の日光のつゞく限りに、途に見當る目しひをいやし、足なへを立たせ、いたる所に目に餘る貧乏人——物か、心か、いづれかに於て、またはその双方に於て、貧しいその同胞兄弟を福音化せられたイエスの神秘的信仰の銘々みづからの體驗に怠りがちであることがそれでありませう。その怠りがちは私等をして一面に於ては聖書よみの聖書知らずとならせてしまひ、他面に於ては口にイエスの名を呼びながら、胸にイエスのお心の何分の一をも分ち得ないものとならせてゐるのでありませう。

私自身にはもとより高い教壇から諸君に向つて説教や宣傳をする資格がありません。茲にこのお話を聞いていたゞくのはたゞ同じ教徒の一人の懺悔と感謝との告白としてであります。

本稿に對する早速の反響——本稿所載の福音新報並に大森組合教會月報を

見てくれた諸君より到着順その儘に轉載

一、某牧師より

貴稿中の「説教よりも懺悔感謝」は近頃私自身痛切に感じてゐる處です。人間の言があまりに多すぎます。神の言を今もつと多く、聞くやうにならなければ、と思ひます。いのりの不足です。さげの乏しさです。神の言をしつかり聞いて、人の魂に向ひたいと願つて居ります。

二、某女學校長 某女史より

御説興味を以て拜讀致し、今更の如く大なる教訓を與へられ候。有難く御禮申上候。

三、某醫伯より

先生、あなたの「日光の續くかぎり」は幾度か繰返し拜讀いたしました。「この人の罪にもあらず、親の罪にもあらず、たゞ神の業の彼の身の上に顯はれんためである」といふエスの御言葉を常任坐臥、我等が忘れずに居るならば、確かに心長閑に待つ心が湧いて來る事を痛感いたします。今や正

一、日光の續くかぎりは

一、日光の續くかぎりは

しく説教宣傳よりも懺悔感謝の時である事をしみる、思はせられます。

四、福音新報主筆 佐波牧師より

毎々御筆勞下さる 貴下の文章に對して、その都度、さまざまの方面から、うれしい反響を耳にします。私たちが陥り易い、所謂講壇風の臭味がなく、新鮮味ゆたかなので、多くの讀者を、強くひきつけるのでせうか。最近御寄稿の「日光の續くかぎりは」の如き、とくに、焦燥焦慮、自暴自棄になり勝ちな今日、少からず慰められ、かつ勵まされたと申された方々も居られます。

五、第一外國語學校長 村井知至先生より

「日光の續く限りは」の大論文、大説教、實に敬服しました。思想の綿密に加へ、文章の立派なる、また貴兄が聖書の知識に深き、かつまた固き信仰に立脚して、社會の出來事を裁決して行かれるところ 實に痛快。殊に 神人一體觀・大小無差別觀といふ神秘的信仰は、小生のかねて抱懐する所と一致して、うれしき限りに存じました。何卒この種の論文を續々世に發表されん事を祈ります。先は右貴稿 御惠送の御禮まで 敬具。

六、富士製紙會社專務取締役 高橋貞三郎君より

福音新報へ御寄稿の 貴論文「日光の續くかぎりは」は早速拜見しました。通讀してゆく間に、小生の敬服させられた點が二つあります。

第一あの奇蹟談を讀む時、大抵の人々がこれまで囚へられがちなのはあの生れながらの痼疾がいやされたといふ側面であらうと思はれます。然るに貴兄の著眼點はそれとは違つて、あの不具をいやした耶穌のあの當時の胸中を解剖せられた處に一種の獨創味があると考へられました。

第二は「説教宣傳よりも懺悔感謝」といふあの文最後の告白にこもつてゐる貴兄の御精神であります。あの節の中味を此頃の小生に云はせれば、「まづ黙想、次に告白」となりますが、自分の過去、六十年餘の 達達閱歷を顧みて、今更ながら共鳴させられる處が少くありません。

先日久方振で 舊知某君より 通信をうけました。同君は實業界にあること二十五ヶ年。先頃見切りをつけて、三井より退社、その後世界回遊の旅や、パレスチナ聖地の巡禮を終へて 近頃毎日神田の青年會館へ出かけて、我邦のネクスト・ゼネレーションに對する 宗教的指導に全力を注ぎつゝ、希望満々で 働いてゐられる由、敬服に堪へません。それで 貴兄よりのあの新報を送つて、同君にも 御一讀を乞ふて置きました。この畏友ばかりでなく、小生のやうに 多年實業界にあつて、その實情を知つてゐる

一、日光の續くかぎりは

一、日光の續くかぎりは

と同時に、我邦社會の前途に對して衷心禁じ難い懸念をもつてゐる人々は多分、貴兄の言に同感せられる事と信じます。先は右迄、匆々。

七、地方銀行在勤のナンクリスチャン某君より

「日光の續くかぎり」の御講演筆記を繰返し繰返し拜讀致しました。先生のお顔や口調を想ひ起しながら、しみじみ味つた事でした。ありがたう存じます。

そして何よりも心にピンと來ましたのは時間觀念の整理であります。いかに生くべきかの問題の中で時間切迫による焦燥感に否み得ぬ事實であります。日暮れて途遠しの憾みに心急ぐものカアライルのみでは御座いませぬ。私共はキリストの如く「我世にある限り、世の光なり」の信念と自負とを持つ事が出來ませぬ。が、しかし「日光のつゞく限り、働かん」といふ信念こそ持ち得べきものであり、持ち度いものであり、また持つ事に依つてのみ一つの救ひに到達するのであらうと考へます。この三者の御明示はさだめし聴衆諸君に多大の感銘を御與へになつた事と存じます。あの月報を通じて、私もありがたく拜聴致しました。

次の問題は理想と實行の開きに對する悩みに對しての御暗示であります。「父子も一」「大小無差別」の神秘的信仰は私にもわかる氣が致します。それで一面から申しますれば、プロセスもまた目的

であるといふ信條を味得すればよいと思ひます。それは、理想を持ち自ら信じて活動して居るものにとつて、決定的の救ひとなりませう。しかし、近代人の大部分が悩んでゐるのは、實に「何をすればよいのか」が答へられぬ爲でありますまいか。「何が何やら解らぬのよ」といふ流行唄はあの氣持をよく擱んでゐる句だと思ひます。「今のまゝでよいのか」といふ問ひをたえず自分自身に投げてゐなければならぬ現代インテリ人の焦燥こそ、恐らくキリスト自身も想像されなかつた事ではな

いでせうか。

餘りにも目標を失つた人々の多い今の社會！隨つて氣力を喪失し、また生の悦びを味ひ得ない今日の世相を見渡して、私共は悩んでゐます。少くとも家庭人としては圓滿であり、職業人としては忠實であり、そして社會人としては消極的ながら他人に對して迷惑をかけず、讀書やスポーツを愛好して、其日を送つてゐるサラリーマン我自身の生活はこれでよいのでせうか。現代人ありの儘の生活は「大小無差別」の神秘的論理では割り切れぬやうに感じます。何とぞ御教示ください。(以下省略)

八、某大學學寮寮母某老女史より

強い嵐の混亂中に、今年もはや秋となりました。御惠送被下しました尊い讀みもの、一字もおろそか

一、日光の續くかぎりは

にせず、拜讀致しました。私も七十路をすぎまして八十路の方へ追々近くなりつゝありますので、御奉公の年はもうとうに過ぎ去つたやうに覺へますが、あの大森月報を通じていただきました御教の内容は眞にありがたく學びつゝあります。また自分一人ばかりでなく、機會に接する毎に、それを廣く分ちたいと願つてゐます。

九、東京千駄木基督教會牧師 吉田清太郎君より

私は大兄の論文を読んでその細かなる觀察の筆致に感服しました。これは多年英文學に親しまれてゐる結果かと最初は思ひましたが、その實、取扱はれてゐる問題に大兄が自己の心血を注いで研究せられた結果である事に氣附きました。

加ふるに、その聖書研究の精密さには一層深く感服しました。またこの論文の中心問題に對して人情の機微を穿つと同時にイエス自身の御解決に宿つてゐる朗なる氣持を最もうはしく描き出されたのには感謝仕りました。實にイエスこそはいつでも全世界の光なりと存じます。

更に一步を進めてイエスの立脚地が「我と父とは一なり」といふ信念にあつた事の消息をも看破し給ふて、我等もまたその境地に立つべき事をほのめかし給ふ處を讀んで、うれしく存じました。私共凡人もイエスと同じく「我と父とは一なり」との確信を有する者となりて、始めてイエスと同じ

く超越したる生活に入り得るのです。私共の爲めにイエスもまたこれを祈つてゐられます。此點につき、他日大兄の精密なる論文を見る時あるべしと存じます。

十、立教大學學長 「神學研究」主筆 杉浦貞二郎博士より

福音新報所載の雄文「日光の續くかぎり」を拜讀致し、さすがシエクスピリアン・コメンテーターだけあつて、聖書のコメントにも全く専門家ソコフケの觀あるに敬服致候。諸方の教會にてよくエキスポジトリ・サーモンを聽聞すること有之候が、小生は此文のごとき尤なるものを數年來聞きたること無之候。なほその釋義の精神に於て、君が近世主義を發揮し居られるのは大に我意を得たるものにて嬉しく存じ候。また君が示された意味に於ける宗教阿片論に對しても、至極御同感に御座候。たゞかの希臘語「ファネロオー」(φανερω—φανω)の解釋に於ては、博士モファツトの學的權威に敬意を表しつゝも、小生はやはり「顯現」から一轉した「例示」—内に含まれてゐる眞理を何か具體的の實例によつて明示するといふその意味を強く表したく存じ候。敬具

二、葡萄樹の散髪

「バチツ バチツ」と木鋏の音、その牙えた響きが私の家の庭の片隅から聞える。近處の植木屋の老主人が手先器用に葡萄の樹に手入れしてくれる處である。折角青葉の茂りかけた、その小枝のいくつかを平氣で鋏み切つてゆくのは素人眼には残酷であるやうに見える。葡萄の樹にとつても、この手入れは随分苦痛であらうなどいふ獨り合點さへこちらの胸にわいて來る。「君そんなに切り取らんといかんかね、惜しいじゃないか」と聲をかけると、この老植木師はその赤黒い顔を一寸こちらへ向けて、だみ聲で「但し元氣な口調で答へる。「なに、素人がたはそんな事をよく云ひますがね。鋏を入れてやらねば、葡萄はだめですよ。むだな枝や葉を蔓延こらせると、實が一向なりませんや。枝を刈り込むほど、樹の養ひ分がよく全體にまはります。かうして時節相當に散髪してやると、うまい實が多くなりますよ……。」

それから數日後の一夜、私はたまたま所屬教會の祈禱會に出席した。その始めに司會者が讀まれたのがあの約翰傳第十五章第一節以下數節「我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。おほよそ我にありて果を結ばぬ枝は父これを除き、實を結ぶものはいよいよ實を結ばせんために之を潔め給ふ」云々の處であつた。この第二節の「除き」と「潔め」といふ言葉に私の注意は引附けられた。

まづ「除く」とは博士 Moffatt の適切な新譯に於ては、cuts away となつてゐる。その意味は疑もなく、鋏で切り去る事である。次に「潔め」とはもとより、この樹の枝葉の塵や埃を水で洗ふてやる事ではない。それは木鋏を入れてむだな枝葉を切落したあとのすがすがしい姿をさしてゐるに相違ない。この原語がさしてゐるのはあの植木屋老人の所謂散髪後のサツバリした姿であらう。この言葉が英語の舊譯（欽定譯）では、purseth となつてゐて、それから起つて來るのは何だか下劑でもかけられるやうな聯想である。そこを嫌つてか、改正譯の方には cleanseth としてある。だが、残念ながら双方ともにかゆい處に手が届いてゐなす。希臘語 καθαιρω 「カサイロー」の實際の意味はむだ枝の手入れ (prune) であるそ

うである。

さてお互ひの生活経験に於ても、まためづらしくないのはバチツバチツと木鋏の手入れが鋭くはいる事である。そして茲に教へられてゐるのがその老練な耕作者・親切な手入れぬしは其名を「わが父」と呼ばれてゐ給ふ事である。その思切つた鋏の入れ方に接して、我の方が胸をひやす事も度々あらうし、折角芽の出かゝつた處をバチツとやられて事實上おびるこむ場合も、お互に屢々あるであらう。あの樹液の經濟とか、美果の増收とかに、我の眼が中届かない事は云ふ迄もないとして、散髪後のサツバリした氣分をさへ當分自ら味ひ得ぬ事もあるであらう。しかし耶蘇御自身の體驗上、「わが父」はこんな事には最も老練な、しかも最後の收穫に對して見通しのよくきく玄人葡萄作りである。これは我々の身上にも時々見出される事實で、我々の現在生活に於て眞にありがたい體驗である。但しそれをお互ひが味ひ得るのは神の御手の鋭い木鋏によつて、我々銘々のむだな枝葉が切り拂はれたり、切り落されたりしてゆく間に於ての事でありませう。

三、線 また 線

その日に於て 榮の冠のかはりとして、また美の冕のかはりとして、萬軍のエホバは 民の遺りにのぞみ給はん。またさばきの雲のかはりとしてさばきの席に坐るものに 臨み、また力のかはりとして 戦ひを木戸より追ひかえす者等に 臨み給はん。然るに 彼等をしてまた千鳥足とならせるは 酒にして、よろめかせるは 強き酒なり、祭司をも 預言者をも 千鳥足とならせるは 強き酒にして、彼等をして 醉はされたる儘に、脇道にそらせるは 強き酒なり。そはすべて の卓にみちたるは 嘔吐と汚穢とにして、ために 一の場處として 清きはなし。誰に彼は 智慧を教ふべきか、また誰に彼は この音信を悟らせんとするか、 乳ばなれさせられ、また 懐より引はなされたる者等ならんか。そは 誠に誠めを、誠に誠めを加へ、線に線を加へ、茲に少しく、彼處に少しく

にあらずや。否、しかし奇異なる唇と他國の舌とによつて、彼はこの民に語り給はん。彼等にかつて云ひ給はく「茲に安息あり、汝等安息を披れたるものに與へよ、また茲に心氣一新あり」と、されど彼等は聞くを欲せざりき。

この故にエホバの言葉の彼等にいたるは誠に誠めを、誠に誠めを加へ、線に線を、線に線を加へ、茲に少しく、彼處に少しくなるべし、ために彼等は行きて、後向きに仆れ骨を折られ、唇にかかり、また捕へらるべし。

かるが故に開けエホバの言葉を、汝等横柄にして、エルサレムの此民を治むる者等よ、汝等云はずや我等が聯盟の相手は死なり、冥府を相手に我等の協約は成れり、天誣の溢れ漲らん時、そは我等に至らざるべし、蓋し我等は嘘を我等の避場となし、虚偽の下にわれらの身をかくしたりと。この故に神エホバかく語り給ふ「見よ、我シオンに一つの基ひとして据えるは一つの石、試み済みの石、基礎確實なる 貴き隅石なり、凡て信ずるものはいそがじ」と。

(イザヤ書第二十八章第五—十六節 著者試譯)

イザヤの赤坊相手式

神の王國の地上建設に參加させていたゞくのが我々基督者最後の 大目標であらう。しかしこれを祈り求めるものゝ眼のまへに、足もとに、押しよせて來る 問題が多い。この事實は我々の個人としての 私的生活に於ても、また社會人としての 團體生活に於ても、同様であらう。さて 此等の問題を いさゝかでも 解決しようとする時、現代人の 心意氣を 支配しやすい 大きな原則が 二つある。大量生産主義と 速成即賣主義とが それである。これら近代産業社會の 二大方針が その持前の區域から 出しや張つて、我々の 精神生活をも 支配しつゝある事は 實際上すでに 久しい。宗教者の間にさへ 屢々唱へられる 悩みとか悶えとかも、事實上その大部分は 仕事のカサに於ける 不如意と テムポーに於ける ノロサの恨みとにすぎないであらう。この産業家根性の 脱落が 屢々我々の たましひ復活の 始りとなるであらう。數日前のこと、ある英語の意味を 字引でしらべてゐた時、たまくその頁に見當つたのは 一つの引用句である。それは「誠に誠めを、誠に誠めを加へ、線に線を、線に線を加

へ、茲にも少しく、彼處にも少しくである』といふのであつた。この言ひまわしの味ひに引付けられてなほよくみると、その出處はイザヤ書第二十八章の十節であつた。其日たゞちに此章を一通り讀んでみたが、なるほどこの大預言者に至極似合つた言葉で、その聲が二千六百年後の今日なほ我々の胸に響いて來る。

この節の譯し方について、注意すべき點が一つある。その中頃に英語で云へば、Line upon line, line upon line といふのである。そこを日本語譯の聖書には「度にのりを加へ、度にのりを加へ」と譯してある。しかし茲の譯はやはり文字通りに、「線に線を、線に線を加へ」とする方がよからう。茲に出てゐる line の原語は一方に於て rule とも取れるので、その rule にあてはめられた日本語が『のり』であらう。しかし私は line の筋をたどつて、この英語を『線』と譯したい。或はこれを『行』と翻へすことも出來やう。とにかくイザヤの胸中に當時往來したのは政治家式の節度でなく、または統治の大方針でもなく、事業家流資力運轉の大計畫でもなく、むしろ初等教育者風な反覆丁寧さの根氣であつたらしい。手習始めの兒童に線の引きかたを教へる時のやうに、線の上に線をひき直してやり、

線の上に線をかき加へてやるといふ寺小屋先生の流儀であつたらしい。この一段に於てイザヤの著眼は赤坊相手式であつた。この事實は第九節後半の中味によつて明らかである。ヘブライ預言者中の大人格者として、またイサエル國土中の傑出者として、當時のユダヤ國民並に其後の人類一般に重大な感化を及ぼした斯人の赤心の一面が茲に率直に吐露されてゐるらしい。一の愛國者また憂國者として、エホバの天命を奉じつゝ、當時の祭司、預言者、其他の指導階級に對して、鬱勃たる憤慨の念を胸にたゞえながら、彼が心をくだき、力を盡したのは國運の進歩と民心の改善とであつた。そしてその間に彼が用ゐた方式は無論大量生産主義でもなく、また速成即賣主義でもなく、むしろ誠めまた誠め、線また線、こゝに少しく、彼處に少しくであつた。彼一代の事業の決算報告書筆始めの一ヶ條が茲にあるとも言ひ得られやう。

もし世間通常の流儀と比較してみるならば、この仕方は眞にとりとめのない、組織のたゞぬ、算盤にのらない、至極まだるつこいものである。かやうな流儀を彼は果して何處から學んで來たか。この章の第五節に明言されてゐる通りに、彼にこれを教へたのはかの『萬軍の

主』であつた。但し彼のエホバは勿論直接行動派の革命主義者でもなく、武力萬能宗の軍閥政治家でもなく、むしろ赤ん坊相手の好々爺—子供等に甘い香氣なとうさんかと思えるほどに大度寛容、懇切丁寧、誠めの上に誠めを、線の上にまた線を、茲に少しかしこに少しくといふ寺小屋先生流儀のエホバであつた。かの出埃及當時のイスラエル人がその久しい沙漠旅行の閱歴を經ながら、なほ習ひそこねた *long-suffering* マクロスミアの大きな親心をうかがはせられたと同時に、イザヤが仰がせられたのはかやうな教育者流のメソッドであつた。茲にもまたあらはれてゐるのがイスラエルの一大先覺者・イザヤ其人の奥床しい一側面であらう。

遺りの者への主力傾注

その活動振りに於てかやうに地味な流儀をエホバより投げられたと同時に、イザヤの主力傾注點がまた今や極めて際立つて來た。あの大風呂敷をひろげて國民總員を包みこみ、これを打つて一丸となし云々といふやうな血氣滿々の、但し目標空漠な大學運動の計畫はも

はや彼の顧みない處となつた。彼が今や相手としてねらつたのは同胞中の一部分であつた。その數の少い事と性格の一種類なる事とに於て、きつぱりと限定された一部分であつた。第五節に所謂神民中の遺りのものがそれである。察するに、イザヤもまたその若き日以来、當然の勢として、或はアッシリヤの武斷的大王テグラテ・ビレセル三世の四隣侵略政策が自國に波及するのを防がうとし、或はアラムと北バレステナとの連衡同盟を憂ひてこれを破らうとし、或は新王セナケリブのエルサレム攻め落しを喰ひ止めやうとして、終に戦地に於ける疫病の猖獗といふふしぎな天佑がかの孤城を落日の危きより救ひ出すに至るまで、よしや人目には迂遠至極な間接手段であつたにせよ、彼自身の見解に於ては根本的な國礎の擁護に著眼して、彼が重ねた苦心は一方ならずであつたらう。然るに此等多年の體験の結論として、彼が今や目がけたのはイスラエルの卸賣的改造の事ではなくて、小出し式の、否、エホバ流儀の『遺りの者』相手であつた。この一句が彼にとつては其後半生の motto であつたらしい。その内憂外患の續發に屈托しないで、己が同胞の前途に對して當時なほ深い望を囑したのも、この『遺りのもの』がその眼中にあつたからである。終生一貫

根氣よくも彼がその信仰を捧持し得た一面の理由はまたこの『遺りのもの』といふ著眼のおかげであつたらしい。

彼には二人の息子があつた。その長男の名はシャル・ヤシユブで、その意味は『遺民歸來』即ち遺りは歸り來らんであつた。この命名とその意味とにあらはれてゐるのはとりもなほさずイスラエルの民に對する彼自身の宿望と方針とであらう。同胞遺民のエホバへの歸來、これが渾身の力を傾注して來た彼の大業であつた。事もし自身一代で成就しなければ、自分の跡繼をしてまた受繼がせやうとした大事はこれであつた。この著眼より湧いて來たのが彼の苦心並に希望であつた。

己が國家の前途に對して彼に與へられた希望はかやうに隆々であつたにも係らず、この愛國者も一たび周圍の現實に直面すると、覺へず一の憂國者とならせられた。見よ、其身さばきの位にあつて國法と正義とを司どるべきさばき人等と自ら軍門を守つて國威を守護すべきいくさ人等（六節）、並に祭司職と預言者團體（七節）を。彼等の多くはこれ醜穢卑陋で、國をあげて清き處なし（八節）といふ社會の現状を見せつけられて、群疑滿腹、彼が茲に自ら提

出せざるを得なかつたのは一の問題である。『誰にエホバは果して智慧をあたへんとするか、誰にその音信を悟らせんとするか』といふのがそれである。この自問に對する彼の自答に曰く『乳離れしたものと懷よりはなれたものである』と。この第九節に入つて、かやうに一層具體的に意識されて來たのが第五節の所謂『遺りの者』である。この答へによれば、萬軍のエホバすら相手とし給ふのはイスラエルの中の漸く乳ばなれしたものの、母の懷より離されたもの、幼きもの、若き人々、新人等であつた。一般國民に對する望みをすでに失はせられた彼が今新しく著眼させられたのは當時の同胞の中になほ含まれてゐた『遺りの者』であつた。しかもそれらは舊來の傳説と當時の俗風との風化作用の故に、わるく固まつた成長人ではなくて、まだく俗化作用をかうむる事の少い、極めてウブな階級であると彼は見込ませられたらしい。

外來思想の宣傳者

一方に於てイザヤの主力傾注點が かやうに深く徹底してゆくと同時に、漸次に廣がつて行

つたらしいのが彼の眼界である。その結果として、彼がまた同胞の覺醒、民心の一新といふ目的に對して善用しやうと思ひ立つたらしいのが外來思潮の感化である。その第十一、十二節の越旨は即ちあだし唇と異なる舌と即ち外國の言語と文書とをもつてエホバはこの民に語り給はん、安息と慰安とがそれらのうちにある、國內の現狀にうみ疲れたものは宜しく著眼一轉、心の憩ひを外來文化のうちに求めよといふのである。然るに當時のエルサレム人は上下を通じて疲弊してゐた。東北のアッシリヤと西南の埃及と、此等二大文明の間にはさまつてゐながら、彼等は此等外國語の解釋とその奇異な表現形式の消化とをなし得なかつた。此等の理解と消化とが出来れば、小からざるヅキータミンが此等より擷取し得らるべく、随つて彼等の生命力がそれだけ回復し得らるべきであつた。惜しむべし、彼等にはそれだけの餘裕がなかつた。イザヤ自身の日常生活はエホバの御眼の直下に整へられてゐたればこそ、その智力の聰明と徳性の健康とが保たれ、また進められて來た。随つて此等外國の言葉と文書とを通じて、彼の魂に與へられたのがその疲れをいやすべき良薬とその元氣を養ふべき醍醐味とであつた。しかし彼の同胞の大多數、とくにエルサレムの大衆はその趣味性と

外來思潮の鑑賞力とに於て、到底彼に及ばなかつた。随つて彼等にとつて、此等は豚にあたへられた眞珠、即ち不消化至極の石ころであつた。一犬にあたへられた聖物、即ち一種不可解な品物であつた。

かやうにしてまた失敗に歸したのが彼の第二期の筋書である。その同胞の間に國家心を喚び起さうとしてこの愛國者がその第一期の筋書に於て指し示したのはイスラエル民族がたどつて來た過去の歴史的段階に於てエホバがその選民に與へられた御導きのあとかたであつた。この國史教育の業に於て、彼が間もなく取らせられたのはかの寺小屋先生の態度、即ち誠めに誠めを、線に線を加へゆくといふメソッドであつた。然るにこの第一期運動の成績は彼の意の如くならなかつた。加ふるに其方の効果よりも手取早く追つて來たのがその正反對の亡國的形勢であつた。この事實を見せつけられて、彼の銳氣が一轉して進入したのは彼の第二期計畫であつた。同胞國民指導の業に於ける彼の指先きは今や過去より轉じて現在に移つた、内國より出で、外國に向つた。ユダ王國の國際問題紛糾の間に苦心焦慮させられるに伴つて、彼の眼は漸く外に向つて開かれた。その結果の一つとして、彼が自ら經驗した

のは種々の滋養が外來の奇異千萬な言葉と文書とに存してゐる事であつた。この體驗に立脚して、これまたエホバの命であるとして、彼が新たに立てたのが第二期のプログラムである。その新活動に於て、すでに疲れはてた同胞、とりわけエルサレム人のために、大聲疾呼しつゝ、彼が指ざしたのは外國の言語文章に含まれてゐた安息と慰安とである。かやうにして彼は今や正しく外來思潮の宣傳者となつた。しかし「彼等は聞くを欲しなかつた」(十二節)。

この時エホバの言葉がふたゝび彼等にあたへられた、否その同胞の大先達として、まづ彼にあたへられた。その大みことよりは前回同様、「誠めの上に誠めを、線の上に線を」、また「茲に少しく、彼處に少しく」であつた(十三節前半)。さきに自國民の國史教育に於て、小屋流儀を強ひられた彼が今や外來思潮の紹介といふ思想家式の活動に於て、また否でも應でも用ゐさせられたのは初等教育者式のメソッドである。萬軍の主、エホバの流儀は其時なほ以前のごとく依前として、「線また線、茲に彼處に少しづゝ」式であつた。エホバのマクロスマアを見習ふべき僕民の先達として、實地の事業上、彼に於てふたゝび徹底的に斥ぞけられたのは近代式産業家流の大量生産主義と速成即賣主義とである。かやうにして二度ま

でも、イザヤの耳をつんざいたエホバの聲が今日なほ、いな自來二千六百年の間に、しかも世界歴史の展開を通じて——萬國萬民盛衰興亡のあとを通じて、その轟きを益々高めつゝ、我の耳・胸・魂を震ひつゝあるではないか。

エホバ式に對する反動

イザヤはエホバの聲を聞くに柔順であつた。この柔順さが彼をして無事に、否目出度く、前後二回の大危機を通らせた。此等二回の記事はイザヤ書第二十八章第十——十三節に於て何事もなかつたものゝやうにさらさらと片附けてある。が、しかし此等四節の申味の性質より判斷するならば、その出來事が同じ時のひと續きのものであつたとは思はれない。そこに含まれてゐるのが幾年かの経過であらう。その年數計算はしばらく別として、イザヤの危機脱出の秘訣として、此等四節のうち二回までも繰返へされてゐるのが「線また線、茲に少しく、彼處に少しく」である。しかもこのエホバ式主張の第一回と第二回との間にはかなりの年數がはさまつてゐるであらう。私はかやうに推定する。

この推定には、大小二つの根據がある。其の一は細かい方で、第十一節冒頭の「一轉語がそれである。我々の日本語譯舊約聖書に於て、茲にはめてあるのは「このゆえに」である。察するに、それは英語欽定譯に於ける For の誤譯であらう。この英譯によれば、第十節の意味が一の主張で、それに對する理由らしいものを掲げてゐるのが第十一節である。然るにこの因果關係を逆に出してゐるのが邦譯の「このゆえに」である。これでは第十節の主張が原因となつて、十一節の意味がその結果となるではないか。要するに欽定譯の For も邦譯の「このゆえに」も共にその意義が甚だあいまいである。更に一方英譯の方——その最もすぐれたものの二つを比較してみると、欽定譯に於ける For の場處に The Revised Version (改訂譯) が用ひてゐるのは Nay, but である。さて一般に認められてゐる處によれば、本文の意義の正確さに於ては勿論この新譯の方に信用が多い。私もまた信じてゐる、此等二節のつながりの代表として、For よりも Nay, but の方が精密であると。このネイ・バットの一轉語は當時のイザヤをして第十節に低回せしめないで、そこより一步を進めて第十一節に進入させてゐる。茲に舊より新への過渡がある。その過渡が即ち年月の隔たりを意味して

ゐる。と私は判斷する。

第二の大きい方の根據をあげるならば、總體的に云つて、舊約書の描寫法は縱觀式である。即ち事件の展開が神の眼より見おろされた儘に描かれてゐる。然るに普通の歴史は横觀式である。即ち事件の進行が人間の眼に映じてゆく儘に記してある。此等二つの式の間にはあらはれて來るのが一の大きな對比である。そしてその對比の最も著しくあらはれてゐるのが即ち時の扱ひ方に於てである。神にとつては一日も千年の如く、また千年も一日の如し（ペテロ後書三の八）と云はれてゐるが、さやうなタイム超越の眼で見られた事件の展開録としての前者に於て、年月などの細かい事が時々眼中になくなるのは怪むに足らない。それは反對に一日一日の creatures である我々人間の眼に映じた事件の進行記としての後者に於ては、屢々歴史の大勢が見落されるばかりでなく、中々やかましくなつて來るのが年月の差別である。此等表裏長短の兩面を調節してこそ、云ひかへれば、この縱觀横觀兩式の併觀を試みてこそ、初めて私等の觀察がそれぞれの事件の真相に近づいて來るであらう。かやうな立場よりしてタイム要素を茲の記事に注入しつゝ、あのネイ・バットの意味を引伸し

て、私がそこに立てるのは第一期、第二期の段落別である。イザヤのエホバ式主張に於ける年數間隔説はこの範圍内に於て、決して架空の臆測ではない。

かやうな詮鑿はこれくらゐにして置いて、本題にもどるならば、一方のイザヤにとつてとにかく救の音づれであつたエホバの御聲は、他方當時のイスラエル大衆にとつてはかへつてその亡びの機縁であつた。聞け第十三節後半の傳ふる處を——「ために彼等はゆきて、うしろ向きに仆れ、骨を折られ、良にかゝり、そして捕へらるべし」と。「線また線、茲に少しく、彼處に少しく」といふイザヤ式、否エホバ式は當時のユダ國民の大多數にとつて、實に自烈たい・辛氣くさい・前途の見込が立たぬ・一向頼りにならぬ仕方であつた。彼等はこれに堪へ得なかつた。この勢ひを察したイザヤの預言は決してまと外れではなかつた。その意味を少しく布衍するならば、非産業的のエホバ式は今の同胞國民の多數に到底理解し得られないであらう、随つて尙更のことそれは實行されないであらう。故に彼等はゆきて、この式より離れるであらう。しかも去るに際して驚きあきれて仆れるであらう。この不覺なうしろ向きの仆れ方に於て、彼等は、その骨を挫かれるであらう。あまつさへ見す／＼敵の良に引掛

つて捕へられるであらうといふのである。この一文のうちに聞えるのは彼の長大息である。茲にイザヤとその民との間に行はれたのが最後の精神的乖離作用である。この目前に迫つて来た顯象が彼をしてのみほさせたのは苦液の一と杯である。その退引ならぬ役目が彼をして茲に預言させたのは所謂「遺りの者」以外の大多數即ち同胞の大衆に對する前途の絶望観である。これは彼にとつて、其身自らほろぼされる以上に斷腸の思ひであつた。エホバの御聲に隨ひゆく事の半面に常にはらまれてゐるのは一の大きな精神的疎隔作用 (spiritual alienation) である。古來いづこの先覺者も必然的に味はせられてゐるのがこの苦痛である。彼の場合に於ける此苦痛の深さ果して如何、それは現在の我々に推測し難いであらう。

おちつきの礎

今一つイザヤの真相として我々が明かに見きはむべき事がある。彼がかやうにエホバの聲を聞きかつ守り得た最後の秘密は果して何であつたか。かやうな力を示し得た彼に存してゐた一物は何であつたか——かやうな力を示し得なかつたイスラエルの民衆に存してゐ

なかつた一物とは何であつたか。世間の所謂偉人の一人として、彼が自ら誇りつゝ我々に示してゐるのはその意志力の強さと固さであらうか。英雄待望の血氣者をしてシーザア、ナポレオン等の豪傑列傳を讀みふけらせよ。我等のイザアは遙に人間味の深い一人格であつた。同胞救済の原動力としてイスラエル歴史の過去追懐と南北兩隣の優等文化の感化力とに絶望させられて、その精神生活の第三期に於て、彼が自ら進入させられたのはメシヤの望みである。この信仰が彼にとつては最後の頼みであつた。それが國の礎であると同時に、彼自身の魂の土臺であつた。この事實の大膽至極な告白が此章の第十六節に掲げてある。この告白、即ち試めし濟みの石・確かな國礎の隅石・いな大磐石として一人のメシヤが据えらるべしといふ彼の信仰は勿論一夜の思ひつきでもなく、また一時のあこがれでもなかつた。この信仰告白は彼にとつては公明正大な、但し底深い論理の結論であつた。しかも彼がこの節の後半に於て語る處を聞け。「凡そ信するものは急がじ」。かやうにイザアにとつての最後の秘訣は過去に對する見識でもなく、現在に對する消化力でもなく、むしろその信仰のうちより出て來た落ち着きであつた。彼の落ち着きといふのは組織、制度、または團體の力に對する

あこがれではなくて、其實メシヤ來といふ彼の信仰と希望との産物であつた。この落ち着き——凡そ信するものは急がじといふ落ち着きを己が胸に湛へてゐたればこそ、幾多の危機を通りぬけてゆく間に、彼が維持し得たのはあの有終的の信仰力である。

これに反して當時のイスラエル人中に於てイザアの所謂「遺りのもの」以外の大多數がその團體的生活に於て探がし求めたのはその成績のカサ高さとその利益配當率の大きさを特徴とする大量生産式の社會改善であつた。その個人的生活に於て彼等がまた希ひ願つたのは仕上げと片附けとに於ける速力をもつてその長所とした速成即賣式の生活改善であつた。故に「線また線・線また線」のメソッドは彼等にとつて餘りに手ぬるかつた。「茲に少しく、彼處に少しく」式が彼等をして屢々發せしめたのは「日暮れて途遠し。無理に仕事を急ぐとも、今や既に及びがたし。況んや急がざるに於てをや」といふ嘆息であつた。事業成功の大量生産と速成即賣といふ二つの偶像はすでに彼等をとりにこにして、その魂をエホバ禮拜より遠ざけつゝあつた。アシエラーや太陽神の前に彼等がその膝を屈した前に、すでに様々の金牛はその胸中にたてられつゝあつた。カナン定住以來イスラエルのほこりであつた獨一

神への奉仕をすて、彼等は事實に於て多神的偶像教徒となつてゐた。要するに彼等はもはやエホバ崇拜者ではなくて、寧ろ自己崇拜者であつた。彼等が念入りの儀式をもつて崇拜した處を解剖すれば、畢竟偶像化された人間の性情中の様々低級な欲望であつた。故に彼等がやがて自ら仆れて、骨を挫かれ、良にかゝり、かつ捕へらるべき事はイザヤの眼に於て明瞭であつた。彼等と彼自身との對照はかやうなものであつた。彼が今日なほ我々に呼びかけつゝある最後の一ヶ條はこの「凡そ信するものは急がじ」であらう。

もとよりイザヤ當時の社會状態と我々今日の社會環境との間に存する相違は大であらう。その細目に於ては兩者の一致がとてもし得られないであらう。しかし神の王國の地上建設といふ我々の社會生活に於ける終局の大目標を目ざして進みゆく間に、我々銘々の精神生活を指導すべき筈の原則は今も昔の通りに「凡そ信するものは急がじ、線また線、茲に少しく、彼處に少しく」であらう。イザヤのいにしえに對する上述の理解がまた今日の社會人としての立場に於て、我々をして尊重させるのはこのエホバ式のメソッドである。顧みれば、彼の一代は多事多難であつた。その感化もまた偉大であつた。しかしそれら

は半ば以上、或は後世人の臆測であるかも知れない。彼自身の意識に於て彼が最後に最も得意としたのは想ふにこの結句の一言「凡て信するものは急がじ」であつたらう。もしこの結句に照して、彼のメソッド、即ち線の上に線を、線の上に線を加へ、茲に少しく彼處に少しくといふメソッドを味はうならば、彼に對する敬愛——彼の魂の底から手の先きに至るまで、彼の人間味の全體に對する我々追慕の心持が初めてその本筋にはいるであらう。

フランス語の諺に

Petit à petit

L'oiseau fait son nid

Et l'enfant s'instruit.

といふのがある。その意味は「チョットまたチョット、小鳥はその巢をつくり、幼な兒はその教へを習ふ」である。その第一行の發音——ブテイアア・ブテイ——に美しくあらはれてゐるのは小鳥が藁すべ、或は草葉の切れなどを一つ一つ啄み來つて、それらを寄せ集めて、組み合せて、その雛のために巢をつくる處である。イザヤの所謂線また線を佛蘭西人式

に言つたのがプテイタ・プテイであらう。我々がまだ遠い將來の神の王國の地上建設に着眼しつゝ、銘々手近な社會周圍の現状改善にレプター一つ一つをさゝげてゆく間に、小鳥は我々の軒端にプテイタ・プテイと囀つてくれ、古人は我々の心の耳に「線また線、茲に少しく、彼處に少しく」とさゝやいてくれるではないか。我々にとつて今日の感謝がまた茲にあるであらう。

四、とこよ不滅の光明遍照

「風よ吹け雲よとさせよ、その上に とこよ不滅の光明遍照」とは 或人の 某年末の述懐である。押し詰つた年の暮、なやみの多いこの世の子等の一人として、彼もまたそはそはした氣分に襲はれながら、其身を 市内電車に托して あちこち運ばれてゆく途中、其日たまたま 天氣晴朗の青空を 仰ぎつゝ、端なく想ひ起したのはブラウニングの心である。地上數間以

内の空氣には 世事匆忙の濁りと雑音とが 充ち満ちてゐる。しかしそれより上方には 寂光満々、靜慧具足の光明界がある。その光明に照してみれば、自他の運命は 決して行き詰らない。この葛藤紛争の世相も 終には 和順清明の域にはいつて、人生現在の謎が一々見事に解決されると 希望し得られるであらう。これが 我々の信仰である。この心をばブラウニングは繰返して その詩に歌つてゐる。この心を通じて 觀る時に、はじめて 我々の眼に映じて來るのが 雲霧の排されたそのさきの 人生の眞實相であらう。かういふ感想が わきあがつて來てやがて一首の口づさみとなつて、筆者の胸より 漏れて來たのが 上に掲げた歌である。

年は改まり、正月はすでに過ぎて、世事の動きは例によつて例の如く、その間に交はつて來る 不吉事と不祥事とは その數すでに少くない。そして正月氣分が うすれゆくと俱に 世事の進行が 我々に興へやすいのは むしろ不快感である。それにも係らず、この歌を口吟みて 私等はその中味の心に對して一種のありがたみを覺える。察するに、今年もまた過去同様に、様々の風が 我々の身の上にも 吹いて來るであらう。それでもよい。また暗雲漠々、我が社會の空の殆んど全部を 閉ざす事もあらう。それでも構はない。「風よふけ、雲よとさせよ、

その上に「とこよ不滅の光明遍照」である。

風雲の上に漲る光明遍照といつても、其意味は俗事の不快さに僻易する逃避主義者となつて、人生の現状をうるさがりつゝ、雲の上なる無風帯の空に憧られるのでは断じてない。かへつて、日々に己が身を慌しい交通機關に托して、巷の塵にまみれながら、此世の俗事と雑務とに出入しつゝ、なほ己が眼に「とこよ不滅の光明遍照」を仰ぎながら、其光を公私一切の人事に取入れようとする心である。この主観的工夫を客観的に表現しやうとしてゐるのがこの歌である。この心事を以て人事と世相との動きを見れば、現在當面の紛雜も混亂も俱に我々の心を取りこにしてしまはない。かへつて信仰の眼をもつて所謂大處高處より萬事の歸趨に着眼しつゝ、銘々日々の着手と着歩とをもつともつと堅實にする事が出来やう。

漢語に閑雲野鶴といふ熟語がある。これは其身を浮世の塵より遠く離して、其心を俗事の累ひに超越させやうとする詩人の氣分を喻へた文句であらう。この氣分とブラウニングの心とは勿論別である。彼の歌心は此世の戦のたけなわな中心點に自ら突き入つて敵に

後を見せないで、人の子一人前の役目と誘惑とに敢て自ら當りながら、目前の成敗利鈍に囚へられないで、人生は寧ろ戰鬥の連続であると覺悟しつゝ、ひた押しに押してゆく勇者の心である。戦ひに臨んで敵の人数や陣立が凡よそわかつて来るのは場數なれた老兵の事であるといふ。丁度それと同じやうに、上よりの光りに照らされて見れば、昨日まで氣附かなかつた汚れと亂れ——一身一家の上より國家と世界の事に至るまでの汚れと亂れとかありありとそこに現はれて来るであらう。それと同時に此等の汚れと亂れとがまた同じ上よりの光りに照らされて、徐々にせよ淨化と整理との途に向ひつゝあるといふ事實が示されて来るであらう。我々の靈魂が益々覺醒させられ、同時に我々の信仰的氣力が追々若やがされてゆくのに肝要なのはかやうにしてたえず上よりの光りに照される事である。それを我々の側から云へば、その光の「とこよ不滅性」と天上遍照性とを信する事である。よしや暗雲が時々我々の頭上をとざしても、その絶間よりもれ出る月の影の牙やけさを仰ぐ心が肝要である。この光りの牙けさを仰いでゆくうちに、我々が信じさせられるのはやがて消ゆべき雲幕のかなたに光明燦爛たる存在者がいまし給ふといふ事實である。この光明界中心の常住

的儼存者と その大慈悲心とを 信じつゝ、とにかくこの下界の生を 日々に勇ましくいとなんで行かうとするのが 即ち我々銘々の 宗教的生活であらう。

五、耶蘇公生涯の 最初一年

一三 斯てユダヤ人の過越の祭ちかづきたれば、イエス、エルサレムに上り給ふ。
 一四 宮の内に牛・羊・鳩を賣るもの、兩替する者の坐するを見て、
 一五 繩を鞭につくり、羊をも牛をもみな宮より逐ひ出し、兩替する者の金を散し、その臺を倒し、
 一六 鳩をうる者に言ひ給ふ「これらの物を此處より取り去れ、わが父の家を商賣の家とすな」
 一七 弟子たち「なんぢの家をおもふ熱心われを食はん」と録されたるを憶ひ出せり。
 一八 ここにユダヤ人こたへてイエスに言ふ「なんぢ此等の事をなすからには、我らに何の徴を示すか」
 一九 答へて言ひ給ふ「なんぢら此の宮をこぼて、われ三日の間に之を起さん」
 二〇 ユダヤ人いふ「この宮を建つるには四十六年

を經たり、なんぢは三日のうちに之を起すか」
 二一 これはイエス己が體の宮をさして言ひ給へるなり。
 二二 然れば死人の中より甦へり給ひしのうち、弟子たち斯く言ひ給ひしことを憶ひ出して聖書とイエスの言ひ給ひし言とを信じたり。

二三 過越のまつりの間、イエス、エルサレムに在すほどに、多くの人々その爲し給へる徴を見て御名を信じたり。
 二四 然れどイエス己を彼らに任せ給はざりき。それは凡ての人を知り、
 二五 また人の衷にある事を知りたまへば、人に就きて證する者を要せざる故なり。
 (ヨハネ傳 第二章 第十三—二十五節)

一 この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給ふ。
 二 エルサレムにある羊門のほとりにへブル語にてベテスダといふ池あり、之にそひて五つの廊あり。
 三 その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰へたる者ども夥多しく臥しゐたり。(水の動くを待てるなり。
 四 それは御使のをりをり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は如何なる病にても癒ゆる故なり)
 五 爰に三十八年、病になやむ人ありしが、
 六 イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に「なんぢ癒えんことを願ふか」と言ひ給へば、
 七 病める者こたふ「主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほど

に他の人、さきだち下るなり」^{一〇} イエス言ひ給ふ「起きよ、床を取りあげて歩め」^{一〇} この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に當りたれば、ユダヤ人、醫されたる人にいふ「安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず」^{一一} 答ふ「われを醫ししその人「床を取りあげて歩め」と云へり」^{一二} かれら問ふ「取りあげて歩め」と言ひし人は誰なるか」^{一三} されど醫されし者は、その誰なるを知らざりき、そこに群衆ゐたればイエス退き給ひしに因る。^{一四} この後イエス宮にて彼に遇ひて言ひたまふ「視よ、なんぢ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起らん」^{一五} この人ゆきてユダヤ人に、おのれを醫したる者のイエスなるを告ぐ。^{一六} ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、^{一七} イエス答へ給ふ「わが父は今にいたるまで働き給ふ、我もまた働くなり」^{一八} 此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思ふ。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といひて己を神と等しき者になし給ひし故なり。

(ヨハネ傳 第五章 第一—十八節)

猶ヨハネの弟子たち、凡て此等のことを告げられたれば、^{一九} ヨハネ兩三人の弟子を呼び、主に遣して言はしむ「来るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」

二〇 彼ら御許に到りて言ふ、「バプテスマのヨハネ、我らを遣して言はしむ「来るべき者は汝なるか、或は他に待つべきか」^{二一} この時イエス多くの者の病・疾患を醫し、悪しき靈を逐ひだし、又おほくの盲人に見ることを得しめ給ひしが、^{二二} 答へて言ひたまふ「往きて汝らが見聞せし所をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はきき、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。^{二三} おほよそ我に預かぬ者は幸福なり」

(ルカ傳 第七章 第十八—二十三節)

直接行動派 宗教革新者の一人

耶穌の御生涯は通俗の言ひ傳へによれば、その初め三十年が一人としてのナザレ生活で、後の三ヶ年が彼の公人的教役のそれである。此等の年號とその區切り方との正確さ如何は今暫く別問題として、耶穌公生涯の最初一年に於て、私等にとつて見逃すことの出来ない事實が一つある。それは彼の公生涯の動きがたえず彼の私生活に於ける經驗によつて強く裏附けせられてゐたといふ事實である。彼の公生涯の表にあらはれてゐる活動はつ

ねにその刺激と營養とを彼のパーソナルな宗教的生活よりうけてゐたといふ事實である。耶蘇の御一生に對する私等の追慕に於て、意味の深い考察の一題目が茲にある。我々お互に今少しく窺つてみたいのは彼の公生涯の最初一年に於ける表裏両面の交渉である。

耶蘇が公人的教役へ踏出されたのは、その年月より云へば、紀元廿七年四月過越の大祭に際してのエルサレム上りからである。またそれを彼自身の活動より見れば、上掲の際に於ける彼の神殿潔めからである。約翰傳第二章十三——廿五節の記事によるに、この青年宗教者の目に映じた側面に於て、エルサレムの宮は俗臭紛々たる小商人等の營業場となつてゐた。そこはもはや彼の父の家ではなくて、商賣の家であつた。かやうな醜態を黙過し得ないで、彼はまづその邊にありあわせた荒繩をひねつて笞を造つた。それを勢よく振廻しつゝ、彼は小商人等に退却を命じて、その牛、羊、さては鴿を追ひ出し、また兩替用の小貨幣を散らかした。かやうに銳氣潑刺たる彼の様子を驚きつゝ見守つて、彼の弟子等が思ひ出したのは、舊約書詩篇の一句（六十九の九）「なんぢの家をおもふ熱心われを食へり」である。この思ひ切つた廓清運動にむかつかせられたエルサレムの都人士等が彼の權威の證據を求め

た時、彼は言下に答へた「三日以内に我この宮殿を再建せん」と。この一段の記事を読んで、何人にも禁じがたいのは耶蘇自身の當時の言動の範圍内で云へば、彼もまた其頃の所謂ゼエローテ式熱血黨（使徒行傳一の十四）の一人であつたといふ印象である。もし後世の用語を以て彼の行動の表面を評するならば、それは所謂直接行動派宗教改革者の行動であつたと云ひ得られるであらう。

もし當時に於ける革新運動者中、耶蘇自身の所作に近い別の實例を求めるならば、何人の記憶にも直ちに浮んで來るのはあのバプテスマのヨハネの行動であらう。このヨハネがユダヤの野原に於てなしつゝあつた所を耶蘇は今やエルサレム城内に於てせられつゝあつた。「斧ははや樹の根に置かる」とか、「箕は手にあり禾場はきよめられ、麥殻は消ぬ火にて焼きつくされん」とか大聲疾呼して、ヨハネがその銳鋒を向けつゝあつたのは政治宗教兩面の當局者に對してである。それと相似た勢を示してゐるのが耶蘇御自身の宮潔め運動である。この所謂荒野に呼ばはる正義の聲・バプテスマのヨハネに對して、青年耶蘇が久しく懐いてゐられたのは一種敬慕の念である。その熱誠のあらはれとして、彼は躬自らガリラヤよ

リヨルダン河畔に來つて、彼のバプテスマを請ひ受けた。耶蘇の公生涯最初の一年を通じて、彼の胸中に往來したのはこのヨハネの言葉と意氣とであつたらしい。

ヨハネの門より 自家獨創の堂へ

しかし彼もまたヨハネ派の門を出でて、漸次に自家獨創の堂に上られたやうである。約翰傳第五章第一節に「この後ユダヤ人の祭ありて、耶蘇エルサレムに上り給ふ」と特筆してある。この祭は逾越節、即ち紀元二十八年四月の大祭であつたと私は推定する。第四福音書に於けるこの一段前後の記事を参考してみれば、これが耶蘇の公生涯第二一年目の始めに於けるエルサレム入りであつたらしい。もしこの推察が當つてゐるとすれば、この入城はあの宮潔め以來、滿一ヶ年目の事である。然るに今度の上京に於て、彼の眼をひいたのは神殿輪奐の美でもなく、祭典儀式の莊嚴さでもなく、さりとしてまた第一回入城の時のやうに、殿内俗化の醜態でもなかつた。其等が舊態依然であつたにもかゝはらず、今度彼の注意をひきつけたのは全然別な光景である。

エルサレム神殿の北、羊門のほとり、ベテスダ間歇泉のめぐり、五つの廻廊の中に、おびただしく臥してゐたのが病人、盲人、跛者、衰弱者等である。丁度一年前にあの至聖所周囲の現状打破、神殿内部の淨化刷新の必要感に熱した耶蘇のハアトは今や此等人間苦の展開に直面して、彼の兩眼をうるほさせた。さきにはこの神殿をイスラエル民族全體の心臓と見做してその痲痺状態を促がしつゝある毒素に對して、彼が敢て自ら施さんと着手したのが一種の外科手術である。今やそれとは違つて、彼の胸にわき出たのは此等病める人々、苦しめる民衆、惱める同胞の疾苦をいやしたいといふ一念であつた。十二ヶ月前の神殿廓清者は茲に一轉して人間苦の醫療者となつた。この悩み久しき病人群中の一人を見て、彼は命ぜられた「起きよ、床をとりあげて歩め」と。この一人に對する彼の心持と動きとは即ち當時の同胞全體の人間苦に對する彼の心持と動きとであつた。

對民衆の用心より 敵中での丸腰へ

そればかりではない、一般民衆に對する彼の態度がまた前後著しく一變してゐるやうで

ある。第一回 上京の際に於ける彼の活動があれ程に華々しかつたにも係らず、彼は世人一般に對して極めて用心深かつた。云ふ迄もなくパリサイ派の長老ニデモとの閑談中、彼が打解けた話し振で、打明けられたのは御自身の信仰要領である。が、しかしそれは第一回入京中に於て殆んどたゞ一つの場合であつたらしい。この例外は暫く別として、彼はこの過越の大祭中、固く自己を守りつゝ、一般世人に對しては警戒の態度を示された。この事實を私等に傳へてくれる一句がある。「耶蘇已を彼等に任せ給はざりき」がそれである。その時「エルサレムにいます程に、多くの人々、そのなし給へる徴を見て御名を信じた」にも係らず、彼の警戒は弟子等の目に立つ程であつた。約翰傳第二章二二―二五に明記されてゐるのがその事である。加ふるにかやうな自己防禦の由來はこの傳記者によるに、一種の人間學、特に人心の反覆・人情の表裏に對する彼自身の見解にあつたらしい。この短いながらに含蓄の深い記事によつて察するに、社會進出初心者の一人として、彼は當時自己周囲の形勢判斷にかなり氣をくばり、また心を用ひられたらしい。

然るに自來滿一ヶ年の後、あの羊門のほとりに於ける彼の様子を窺ふに、その周囲の云々

に對して、彼はもはや別段に氣を勞する事なく、その目に餘つた病者と弱者との慰めと救ひとに一向専念されたやうである。この時すでに彼の評判はかなりに擴がつて、彼の主張と仕事とはその徹底振をまして來た。それと俱に彼の目にもありありと映じて來たのは彼に對するユダヤ人等の形勢險惡、彼をなきものにしようといふ殺氣滿々の實情であつた。この渦卷の眞中に立ちながら、それを一向知らぬものやうに、彼が餘念なく勤められたのは病者と弱者とを相手としての仕事である。しかも相手の當人等が彼の御名さえ知らないにもかゝらず、彼は全然それに無頓着であつた。加ふるにその日が丁度安息日——彼自身身行動が當時一般に行はれた宗教思潮上直に物議をかもし易い安息日である事を熟知してゐながら、彼の態度はあたかもかやうな面倒を全く忘れてしまつたものやうであつた。その時彼がその全幅の氣力を集注しつゝあつた一點は眼前の人間苦救濟のそれである。彼の態度は今やいはゞ傍若無人である。無論よい意味に於てではあるが、周圍の社會的形勢に對して彼が發揮してゐられるのは思切つた超然主義である。あの一年前の警戒振りに比すれば、彼は今や全くの丸腰である。

ヨハネ派の疑問提出

さて何が彼をしてかやうに足早やにまた徹底的にその態度を一變させたか。その外的事情として色々想像し得べき事柄があるであらう。そのうちにて、福音書の記事に立脚した最も確實なものの一つをあげれば、それが即ちバプテスマのヨハネの経歴から来た感化である。かねてヘロデ黨の憎しみを受けてゐたのでこのヨハネが遂に獄に入れられたのは紀元二十七年の冬十二月の事である。この禁錮中に、彼もまたさまざまの疑問と煩悶とに襲はれた。この血性漢・活動家・實行主義者の性質より判斷して、私等にもたやすく推察し得られまた同情し得られるのがこの事實である。翌、廿八年の夏頃、彼はその弟子を耶蘇の許に送つて特に問はせた「来るべき者は汝なるか、または我等他にまつべきか」と。この疑問は云ふ迄もなく、ヨハネの弟子等が一時思ひつきの質問ではなかつた。耶蘇の仕事振りを耳にしつゝ、彼自身がこの半ケ年以上その胸中にとつおいつ繰返した宿題、しかも未だ自ら解決し得なかつた、否寧ろその解決難の嵩が益々まして来た宿題であつた。

あのヨルダン河畔に於けるバプテスマ施し以來、耶蘇の公人的進出にいたる迄の間、このヨハネは彼を目してメシヤであると信じてゐた。彼の最初の解釋によれば、メシヤとは即ち悪木きり倒しの斧として自分よりも大きいもの、麥殻ふきわけの箕として自分以上に力強いもの、自分のと違つて火のバプテスマをばユダヤ國民上下一般に施すものであつたらしい。然るに耶蘇の第一回上京以來、半ケ年餘にわたつての言動を傳へ聞くにつれて、彼のゆく道筋が自分のそれとは別な方面に向ひつゝあることを知つた。同時に彼の胸中に萌して来たのが果してこれが正しいメシヤか否かといふ疑ひであつた。特にその禁錮以來彼の胸中にやうやく深まつて来たのは耶蘇が個々の人間苦に囚えられるに過ぎて、あえて大規模なしかもてきばきした改革運動を起さないのは即ち彼がメシヤではない證據ではあるまいかといふ惑ひであつた。かやうに思ひ餘つて、ヨハネが今や直接耶蘇其人に求めたのはこの疑ひと惑ひとの解決である。

「苟も我に躓かざるものは幸ひなり」

かゝる間に一方耶蘇御自身も亦たえずヨハネの噂を耳にして、この義人の經歷のあとを一段一段と考察しつゝあつた。同時に彼の胸中にまた一種の問題が出て來た。ヨハネ式の運動が果して神の王國の建設に對して最上のプログラムであらうか、自分の取るべき道筋は別にあるのではあるまいかといふのがそれであつた。この疑ひは蓋し勢の當然、もつとも至極な事である。それを一層具體的にいふならば、病人、盲人、跛者、また衰弱者等を相手に其時其時の最上の處置をほどこそ事が神の王國の建設と密接なまた本質的な因縁ありやといふ問題であつた。但しこの問題に對する解決は彼自身の胸中には早くも出來てゐた。さればこそヨハネの使者に對して彼は答へられた。「汝等歸りて、自ら見聞する處をヨハネに告げよ、盲人は見、跛者は歩み、癩病者は潔まり、聾者は聞き、死人は復活し、貧者は福音を聞かせらる。苟も我に躓かざる者は幸なり」と。

この答に反映されてゐるのがヨハネ等の提出した疑問の内容であると同時に、また耶蘇自身の解決された問題の中味であらう。「苟も我に躓かざる者は幸なり」といふ彼の言葉が私等に仄めかしてくるのは耶蘇御自身の理解と同情とである——この宿題の解決難にヨハネ自身が躓きつゝあるといふ事實に對する耶蘇の理解と同情とである——否、一步遡つて云ふならば、耶蘇御自身がまたその解決難にこれまで幾度か行惱みを覺へたといふ自覺中よりわきあがつて來た理解と同情とである。彼の答の調子には毛頭譴責の口調がない。しかもその氣分に充ちてゐるのは深切な思ひやりである。その理解と同情との由來はとりもなほさずヨハネにとつての疑惑がかなり久しい間彼自身にとつてまた一の疑問であつたからである。ヨハネに先んじて、彼は早くもそれを解決されたが、その解決の結果、かへつて彼の胸中にまして來たのがヨハネ一派に對する理解の深さと同情の強さである。この場合に於てもまた、あらゆる場合に於けると同様に、彼の答へには一種の力があつた。しかもその力の出處は中心問題に對する彼御自身の一步先驅しての解決にあつた。

内より外への神國建築

この問答より前、およそ二三ヶ月目に當つてゐるのが、耶蘇第二回の上京である。その際に於けるベテスタダ池畔のかの事件が、私等に證明してくれるのは、とりもなほさずこの問題が彼の胸中に解決済になつてゐた事である。ヨハネ一派の質問提出をまつ迄もなく、彼の答案はまづ御自身の魂に於て立派に整理されてゐた。その整理済のものに對して呼び出し役をしたのがヨハネの弟子等である。かやうに整理されてゆく途中に、彼の信仰がその結晶を言葉の中よりも先づ實行の上に示した一例がこの永年の覺を立所に立たせた一件である。勿論それは偶然のアクシデントではなかつた。寧ろ彼の内面生活の充實がその周圍環境の呼び出しに對應して噴出させた清水の迸しりである。この事實はその外形に於てこそかさ高ではないがその中味に於ては極めて奥深い。その公私兩面の生活を通して、耶蘇が日々貯わえつゝあつたのはかやうに奥深い體驗である。此等の資料が彼の魂に於てたえず整理せられ、また組織立てられた結果として、彼の意識が明確に握つたのは神の王國の

進展はまづ個人より、否その靈魂より始まるといふ眞理である。神の王國の建設は社會制度の形式的變革よりも寧ろその基礎としての個人的疾苦の治療——その心身兩面に於ける疾苦の除却とそれに代るべき健康力の復活とより始まるといふ信仰である。もとより健全な信仰の復活がその内面的要求の故に、やがて必然的に促がして來るのは社會的制度的革新である。が、しかし私等の見方に於ては、内的革新が先で、それに隨つて來るのが外的改造である。この内より外への展開は外から内への仕事に比して甚だまたるつこい。それにも係らず、あらゆる根本的の革新はその本質上、まづ内よりの展開、次で外への展開である。このまだるつこさに、耶蘇御自身もまた幾度か自ら躓きかけられたらしい。しかしその度毎に彼は自ら阿呼の踏しめをした。さればこそその魂に於て益々強められたのがこの一見極めてまだるつこい神國の建築法に對する彼自身の確信である。この確信が言葉を通じて表現された一つがこのヨハネへの答へで、同じ信仰が行爲の上に結晶した其一つがこの三十八ヶ年の膝部運動障礙者に對する彼の醫療である。しかもこの醫療は畢竟彼自身が近來日夜に鍊りあげ得た信仰の流露である。

その公生涯、最初の一年に於ける耶蘇進展の一面は、かやうなものであつたらしい。凡ての新人がその社會進出の際に通過させられるのは、想ふに大體これと相似た経過であらう。古きはあのモーセがイスラエルの民を埃及より救ひ出さんとした當年の経験より、新しきは近年我邦社會の耳目を聳動して、お互の胸をいたましめつゝある改造運動者中、まじめな一派の熱あつてしかも信の乏しい言動に至るまで、古今の改造努力者に共通の要素となつてゐるのは、かやうな心的進展のあとであらう。たゞその進み方の早さに於て、耶蘇御自身の場合は、僅に前後一ケ年の経過であつたが、我々に於ては十年、二十年、三十年、または此世に於ける一代を通じて、なほかつ、かほどの進みを示し得ない事が多いであらう。その経過の速度に於て、私等は必ずしも彼に眞似する必要がない。またよしやそれを試みたとして、必ずしもそれを許されるものでもない。その進行の遅速は、とにかくとして、私等銘々が一種のバアンナルレリヂオンを提げて、公人的社會生活に直面する時、私等の靈魂を直ちに襲うて来るのは、またあのヨハネ式の疑問「來るべきは、汝か、または我等他に待つべきか」であらう。同時に、かへり見れば、外に於ては、爾來約二千年の世界歴史を通じて、また内に於て

は個人個人の内的經歷を経て、日々に新味と力強さをもつて、私等の魂の耳に與へられるのは、ヨハネに答へられた耶蘇最後の一言、即ち神の王國地上建設の奉仕的勤勞に於て、「苟も我に躓かざる者は幸ひなり」であらう。

六、神か、己か、どつちか

東京郊外の或る町通りのあちこちに一の掲示が出てゐる。その文に曰く「神社の前を通る時は敬禮しませう、神を敬するは自らを正しうする所以であります」と。誠に殊勝な仕方である。或る日の夕方、その通りの或る四つ角に三四人の中學生が立ち止つて、その中の一二人が右手の横筋の奥にある某神社の社殿に向つて一寸敬禮した。現に通りがけに、私はそこを見た。こんな美しい風が我邦にまだ遺つてゐるのは、人意を強うするに足るといふ見方には、誰しも異議がないであらう。

あのラフカディオ・ハアンが出雲の田舎で屢々目撃したのは同地方の少年等が神社佛閣に参つて、または死者の靈に對して、ぬかづく時の恭々しい姿である。その光景に彼が心酔した記事がその著述 (Some Thoughts about Ancestor-Worship) 中にある。彼によれば、十九世紀の文化——あの淺薄低級な西洋文明がその憐むべき没落を歐米に示しつゝあるのに、東洋の日本になほ遺つてゐるのがこの美風——此等少年の禮拜の本體が何であらうと、とにかく自己以上の存在者に對してかやうに心から低頭するといふ精神美——である。近代科學の跋扈と物質崇拜の弊風とにまだ中毒してしまつてゐない質實な美風である。彼のこの觀察に共鳴するものが私等の間にも少くない。否、近來の世相が益々深まらせるのはこの感慨であらう。

しかし同時に私は思はせられる、この揭示文の中味にある實踐倫理の側面はまづよいとして、宗教的思想の側面には一の疑問がのこつてゐる。神を敬するのは果して自己を正しうする所以であらうか、または自らを正しうするのが即ち神を敬する所以であらうか、神を敬するのと己を正しうするのと、どちらが目的で、どちらが手段であるか。

私等は考へる、神を敬するのが主たる目的で、それに対する一の手段が即ち己を正しうする事であらうと。あの揭示の第二文はこれを書き直して、自らを正しうするのは神を敬する所以でありますとすべきであらう。よしや通りすがりにせよ、神佛禮拜堂の前でまじめに敬意を表するのは即ち自己の態度を正しく整へる所以である、そして自己を整へてこそ神を敬ふ事が出来るであらう。

あの儘では私等に與へられやすいのは神を敬ふ事が手段で、そして己を正しうする事がその目的であるといふ考へ方である。それでは折角の敬神も自己崇拜の手段として利用されてしまふであらう。それは本末顛倒である。そこに底深く潜んでゐるのが我々現代人の宗教思想に於ける二つの弱味である。否、その實、この弱味の因となつて來たのが古今東西の人類全體である。また現に我々の日常生活の表面に露出して、様々の醜體を示してゐるのがこの弱味の餘弊であらう。我々の宗教生活を曇らせやすい利己第一主義とまた直ちに其根より芽生へして來る我々の實行生活上の不合理と矛盾の諸相とはともに詮じ詰めて見れば、その最後の病因はこの神か、己か、どつちか第一かといふ詮議の不足、並にその

結果としてあらはれて来る本末顛倒にあるであらう。

もとよりあの揭示の文案者諸君がそこまで考へ到られたとは思はれない。しかし無意識的にせよ、この本末顛倒は決して冷眼に看過すべきではない。事は一揭示文中の小事にとゞまらない。神か、己か、どつちが先づ第一か。そこに提出されてゐるのはあらゆる言行にわたつて、我々銘々が毎日に三度省みさせらるべき大きな宿題である。馬可傳第十二章第二十九節によれば、一人の學者が進み出でて耶蘇に問ふた「すべての誠のうちでどれが第一か」と。耶蘇の即座の答に曰く「第一とはこれなり——聞けイスラエルよ、主たる我等の神はたゞ一つの主なり。汝等が主たる汝等の神を愛するに、必ず傾くべきは汝等の全心・全靈・全智力・全體力なり」と。茲に指摘されてゐるのが昔のイスラエル民族にとつてばかりでなく、我々現代人にとつてもまた、第一最大の誠命である。我々が現に物質文明・制度文明・機械文明の世界的崩壊に直面させられて、またもつともつと永存的の價値ある新文明の公私両面に於ける建設といふ大任を負はせられつゝ、毎日に益々痛感させられるのは此事である。

七、信仰の内壓力

なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ來る。祭司長、民の長老らより遣されたる大なる群衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ。イエスを賣るもの預じめ合圖を示して言ふ「わが接吻する者はそれなり、之を捕へよ」。かくて直ちにイエスに近づき「ラビ、安かれ」といひて接吻したれば、イエス言ひたまふ「友よ何とて來る」。このとき人々すすみてイエスに手をかけて捕ふ。視よ、イエスと偕にありし者のひとり手をのべ、劍を抜きて大祭司の僕をうちて、その耳を切り落せり。ここにイエス彼に言ひ給ふ「なんぢの劍をもとに收めよ、すべて劍をとる者は劍にて亡ぶるなり。我わが父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるること能はずと思ふか。もし然せば斯くあるべく録したる聖書はいかで成就すべき」。この時イエス群衆に言ひ給ふ「なんぢら強盜に向ふごとく、劍と棒とをもち、我を捕へんとて出で來るか。我は日々

宮に坐して教へたりしに、汝ら我を捕へざりき。されど斯の如くなるは、みな預言者たちの書の成就せん爲なり」爰に弟子たち皆イエスを棄てて逃げさりぬ。(マタイ傳二六の四七―五六)

此等のことを言ひ終へて、イエス弟子たちと偕にケデロンの小川の彼方に出でたまふ。彼處に闇あり、イエス弟子等とともども入り給ふ。ここは弟子たちと屢々あつまり給ふ處なれば、イエスを賣るユダもこの處を知れり。斯てユダは「一組の兵隊と祭司長、パリサイ人等よりの下役どもを受けて、炬火、燈火、武器を携へて此處にきたる。イエス己に臨まんとする事をことごとく知り、進みいでて彼らに言ひたまふ『誰を尋ぬるか』。答ふ『ナザレのイエスを』。イエス言ひたまふ『我はそれなり』。イエスを賣るユダも彼らと共に立てり。『我はそれなり』と言ひ給ひし時、かれら後退して地に倒れたり。爰に再び『たれを尋ぬるか』と問ひ給へば『ナザレのイエスを』と言ふ。イエス答へ給ふ『われは夫なりと既に告げたり、我を尋ぬるならば此の人々の去るを容せ』。これ曩に『なんぢの我に賜ひし者の中より我一人をも失はず』と言ひ給

ひし言の成就せん爲なり。シモン・ペテロ劍をもちたるが、之を抜き大祭司の僕を撃ちてその右の耳を斬り落す、僕の名はマルコスと云ふ。イエス・ペテロに言ひたまふ『劍を鞘に收めよ、父の我に賜ひたる酒杯は、われ飲まざらんや』(ヨハネ傳一八の一―二)

劍と棒・松明と燈火

右に掲げた二段落の記事は、耶蘇の御一生最後大詰のそれである。此等二ヶ處を讀んで、我々もまた深く共鳴させられるその理由の一つは、思ふに、社會行詰りの聲が現在我々の周圍にしきりに聞へるからであらう。しかもその共鳴の出所は、耶蘇の最後と我々の現狀との間に一種の共通點があるからである。とはいへ、もし着眼一轉、彼の心意氣と我々現在の精神狀態とを比較してみれば、同時にそこにあらはれて來るのが、大きな隔りであらう。

あの祭司長の下役や、パリサイ派の手下等を引連れて、イスカリオテースのユダが、耶蘇の召捕りに來た處を叙して、馬太は曰く、彼等は劍や棒をもつて來たと。また約翰傳記者は

云ふ、松明や燈火をかゝけて來たと。かやうな形勢の切迫を看て取ると俱に、腰の一刀を引き抜いて、まづ目の前に來合せた祭司長の僕の一人の耳に切り付けたのがシモン・ペテロである。彼のかやうな武者振ひは、全く耶蘇の御身を守りたいといふ一念からであつた。この行爲の出處は、即ち耶蘇はメシヤである、—メシヤが捕へられては、折角建設されかゝつたその王國がそこに大頓挫する——何はともあれ、彼を守護せなければならぬといふ耶蘇愛、言ひ換れば、彼等の愛國心であつた。もしその場に我々自身が居合せたならば、我々もまた心の底から共鳴したのが、ペテロのこの振舞であらう。

かやうな共鳴の由來を探つてみると、それは主として周圍環境の壓迫にあると思はれる。今日社會の實狀が我々基督者に與へつゝあるのは、一種精神的の壓迫で、それは丁度耶蘇身邊の形勢不穩が、ペテロ以下の弟子等をうるたへさせたのと相似てゐる。我々自身もまた今や世間並の焦ら立ちに驅りたてられつゝ、現在目に餘る劍や棒・松明や燈火におどかされて、腰の一刀でも抜き放ちたくなり、眼前の敵の片割にでも切付けたくなつて來るではないか。風聲鶴唳といふのは支那の故事ばかりでない、「富士川の水禽」はペテロ等同様

に今日の我々をしてまた周章狼狽させつゝあるではないか。

あの際に於ける耶蘇御自身の言葉、行ひ、並にお心持を味うてみると、彼とペテロとの間にあつた隔りは大きい。丁度そのやうに、當時の耶蘇の心意氣と今日の我々のそれとの間に、また見出し得られるのが、甚しい懸け違ひであらう。ペテロをかへりみて、耶蘇は言はれた「おさめよ、汝の劍を、もとの處に」。汝の一劍よく天下の大勢を切り崩し得べしと思ふや。血氣の輕擧かへつて、無告の民を傷め、かつ神の國の大事をあやまつ事を知すや。「なに、汝思ふや、我無能力なるが故に、われ我が父に訴ふる事あたはず、また今なほ我に十二軍團餘の御使を添えられる事あたはずと」。さてこの十二軍團以上の天使を今なほ添えられるといふのは、どんな意味であらうか。このお言葉の内容は、それ自身の本質上、科學的にそれを解剖する事も出来ないし、また合理的にそれを説明する事も當然出来ない。しかしそれとは別に、茲に明々白々なのは、一種の信仰が—確信が彼の胸中にあつた事である。かりにそれをXと名付けて、そのX信仰を我々の考察に入れると、そこに始めて我々にも理解し得られるのがこの際に於ける耶蘇とペテロとの相違である。

十二軍團餘の天兵後援と舊約預言の具體的應現

この時、ペテロの眼一杯になつてしまつたのは、耶蘇身邊の劍と棒・松明と燈火・裏切者ユダとその引卒人數との影である。此等に對する認識の明かさと確さに於て、耶蘇はもとよりペテロ以上であつた。しかし同時に彼が見通されたのは、此等の物と人との動きのその先にある別種の力である。即ち十二軍團餘の天兵が既にその出征準備をととのへて、今はたゞその出發命令の一下を待つてゐるといふ事實である。ペテロの見たのは、周圍直接の形勢切迫のみで、それに對する應急手段として、彼が決行したのは、彼が獨力よくなし得べしと自ら思ひ込んだ最善の處置である。しかしもしそれを更に一段高い所より見たならば、彼の最善は當時の時局に對する最拙劣な所行であつた。「そは凡そ劍を取るものは劍にて亡ぶべし」。よしや祭司側の僕の一人の耳の端を切り落したとて、事件展開の大勢を善導し得べき効力は寸毫もない。そればかりでなく、かへつて形勢の悪化を招くであらう。耶蘇が茲に見通されたのは、其事である。そして彼にとつて、その見通しの餘裕の出處は畢

竟あの十二軍團餘の天兵が今でも彼に添えられるといふ信念であつた。もしこのX信仰がなかつたならば、察するに耶蘇の態度もまた必ずやペテロのそれと同一様になつたであらう。勿論大ざつばな一面的の等式ではあるが、耶蘇マイナスXが彼得で、彼得プラスXが耶蘇であつたとも云ひ得られやう。

約翰傳によれば、耶蘇のお言葉の最後の一節に「この杯、即ち父が我に與へられたるをば我吞まざらんや」とある。これが耶蘇のX信仰に對する約翰傳式の云ひ表し方である。それによれば、耶蘇は自分の立場を杯にたとへて、それは父が我に賜ひたるものなるが故に、よしやそこに盛られてゐるのが苦き汁であらうとも、自分はそれを一氣に吞みほすべきであると思つてゐられた。馬太傳記者が同じX信仰の圖解として用ひてゐるのは、天兵十二軍團餘の後援的派遣といふ比喻である。其表現の仕方は兎に角として、眼前の物の動と人の動とに囚へられたのがペテロである。然るに周圍境遇の外歴力に壓倒されないで、其背後に展開して行く大きな勢力に目をつけつゝ、その着眼中に生じてくる内歴力を胸一杯に溢えられたのが耶蘇である。一方に於て物と人との動きといふ外歴力にペテロの腰が

押しつぶされた時、他方に於て外壓力の増大に伴つて倍加して來た其内壓力の故に、強い彈力を示しつゝ、耶蘇の足が歩武堂々、登つて行つたのはかのカルバリの丘である。

耶蘇の X 信仰の別の一面をさして、馬太傳記者はまた預言の成就といつてゐる。舊約書時代に於ける古預言者達宣言の具體的應現が、今や眼前に展開されつゝあるといふ見方を掲げてゐるのがこの第一福音書記者の筆である。これを云ひ換へると、舊約以來古今一貫の眞理・エホーバー攝理の大勢、その具體化・その實現が茲にあるといふのであらう。あのペテロをして憤激させたのは自分の相弟子の一人、ユダがその師匠を賣渡さうとした事である。耶蘇はしかし一イスカリオテース人の所業に躓かされなかつた。否、彼に對して個人的に示されたのは奥深い理解と同情とである。彼の眼に於て、このユダは一身の利慾に囚へられてゐるのではなくて、むしろ新舊思想衝突の大鳴門にまきこまれた犠牲者の一人であつた。かりにこのユダが我を渡さずとも、そこに必ずや別のユダが出て來るに相違ない。かやうに成り行くのは世運進展の當然の勢ひである。天父の恵と眞と力とが人類の世界に現はれてゆく道筋に於て、必ずや打建てらるべきは人柱である。その形より見て、

之に附けた名が即ち十字架である。この人柱を待たないでは、斷じて期し得られないのが神の王國のこの地上に於ける建設である。といふのが耶蘇御自身の信仰であつたらしい。この信仰の故に、彼はユダに寄するに大なる理解と深い同情とをもつてせられた。彼の眼に於て、ユダは實にこの十字架に躓いた一人であつた。それと同じ心意氣よりして耶蘇は祭司の部下に對してまた憐れみを示された。ペテロの刀に傷付けられた僕は、耶蘇の御手によつて、直にその耳の切傷をいやされた。かやうにユダを理解せられ、また祭司の僕をあられたれた餘裕が耶蘇の御眼にありくと反映させて來たのが舊約的預言の具體的應現即ちイスラエル民族歴史の大勢觀である。かやうな大勢觀のペテロに向つて言明されたのが上掲の馬太傳第五十四節の中味即ち『我もし今にして天軍後援の威力をからんには、歴史の大勢、かくあるべしと記録されたる聖書の預言はいかで成就すべきぞや』である。そして同じ X 信仰を群衆に向つて告られたのが上掲五十六節の『されど斯の如くなるはみな預言者たちの書の成就せんためなり』である。

耶蘇が日々に自ら仰がれたのは天父、また事々に相手とせられたのは神。かやうにして

彼の胸中に愈々覺醒させられたのが彼の靈眼である。その靈眼を通じて、彼がその身邊に重なり来る形勢の間に達觀されたのはこの苦い杯が彼の父によつて彼の面前に提供されてゐる事であつた。同時に同じ大局達觀の靈眼をもつて看破されたのはその父がタイムの世に於てまた必ずや古來の預言を成就させられる事である。その具體的實現の一大段落が今や近く彼の身の上に迫つて來た。されど着眼一轉、天空高く仰ぎ見れば、そこに十二軍團餘の御使が彼を後援せんとしてゐる。といふのが即ち馬太傳と約翰傳と此等二福音書の記者が左右相應して、今日の我々に指し示してくれるX信仰の中味であらう。當時耶蘇の胸中にみちみちてゐた内壓力は大體上かやうなものであつたらしい。ペテロの立場に現在共鳴させられるだけ、尙更の事我々お互に跪きつゝ仰がせられるのが耶蘇のかやうなX信仰に對してである。

現代人にとつての内壓力

今更云ふ迄もなく、我々の社會的環境は日々に愈々切迫しつゝある。舊きものゝ崩れゆ

く物音は益々耳に滿ち來るも、新しきものゝ築きあげられる姿はまだまだ見出しにくい。我々の身邊に現在續發しつゝあるのは多くの舊組織・舊制度・並に舊思想の崩壊作用である。しかもその物凄さに囚へられがちの我々は目前の事と足下の件との應接に忙殺されやすい。随つて我々銘々が失ひがちなのはこの崩壊作用のその先にやがて來るべき新天新地の建設に對して各々レプターツをさゝげ得べき用意である。我々の前後左右にひらめく劍影・棒ちぎれ・松明・かんでらなどに目驚かされ、また胸痛ませられるのはまだしもの事として、更に一段と切迫してゐるのが我々の精神的現狀である。此等外物の動きに動かされて、我々銘々の魂はその信仰をすら奪ひ去られつゝあるではないか。

明治年間の我邦に於て、逸速く新社會來の聲をあげたのは宗教家の側面であつた。その頃この階級以外の同胞はまだかやうな陰氣臭い悲觀説——當時の社會思想に於ける最左翼とも稱し得べき一派の慷慨談をきらつた。そしてマア・マア・ヨイ・ヨイ主義のその日暮しをやつて來た。しかるに今や局面急轉、最右翼黨とも名附け得べき實業家方面までが露骨に吐き出しつゝあるのは我社會の行詰りといふ悲鳴の聲である。元來景氣の煽り立て

を工夫して、縁起のよい話ばかりを口にしまふ、その間の利益獲得に努力して来た商業者階級にすらも、今や強ひられつゝあるのは我社會の現狀に對する悲觀說である。日々の新聞記事や人々の雑談が概ね帯びてゐるのは消極的の調子である。その間にはさまつて、萬一ペテロ式の着眼、即ち眼前方寸の形勢觀測に捕えられてしまふならば、我々自身が最善と思込んでなす所も豈に圖らんやその實或は狼狽沙汰であるかもしれない。基督教會までもが今ではその實びく／＼ものだといふのが世間の通評である、かやうな批評が由つて来る處の原因の一つは或は耶蘇式の X 信仰が我々銘々に乏しいからであらう。馬太の用語によつて云へば、預言の成就といふやうな神の眞理の古今一貫性、エホーバーの論理の必至性に對する着眼を一刻にても失ふならば、とても我々に期しがたいのは各々自ら耶蘇の心をもつて心とする事であらう。社會の現狀に通ずる事は無論必要である。わが同胞を否我々自身を現在憫ましつゝある失業問題、生活餘裕の窮乏、人心の悪化、世相の危険化等の實狀に對して一段の關心をもつべき事は今更云ふまでもない。しかし此等は畢竟ペテロに迫つた劍と棒・松明と燈火・祭司の僕等と羅馬の兵卒共であらう。此等行詰の形勢に直

面する時、我々がたえず仰ぎたいのは耶蘇最後の御勇姿である。勿論自ら及びがたいとはいへ、なほ少くとも見習ひたいのは彼の意氣の壯烈さである。上なる御手の導きによつて、我々もまた常にわかち與へられたいのは彼の魂ひに満ちてゐた信仰の内壓力である。所謂社會改造主義者のもたぬ信仰・世間一般の慈善事業家に缺けてゐる内壓力・銘々の前に置かれに苦杯を天杯としてぐつと飲みほす意氣・各々の身にわりつけられた負擔を預言の成就即ち天地大經綸の一部分として背負ひゆく抱負・十二軍團餘の御使我に味方すと信じつゝなほかつ録された通りの大道に各々進み行かんとする其志である。資本主義的文明の一產物にすぎない近代生活様式への妥協ではなくて、神の王國の地上建設といふ大望を目かけての十字架奉戴の其心である。

二年前の夏の一日淺野總一郎氏の高輪邸内に、一の歡迎茶話會が催された。招待されたのはその頃米國より來てゐた Editors' Party で、この一行を招待したのは米國諸大學に學んだ事のある日本人百數十名である。その席で來賓の一人 Forum 社の Adler 氏が述べた答辭の一節に「我々が從來東洋に對して興味を持つてゐたのはその風俗習慣、その歴史、

その藝術、その風景に對する觀察である。然るに此等の觀察だけでは、とてもわからないのが東洋諸國民の真相である。風俗の表口や歴史の玄關より進んで、さぐり求むべきは東洋諸國民の Mentality である、——支那人、日本人の Psychology である。今度の旅行に於て極東諸國の社會に自らはいつて見て、我々が各々幾分か收穫し得たのは諸君の心的生活である——心理學である。これが我々現在の喜びであり、また本國民へのよい土産である」といふ言葉があつた。これは確に一つのすぐれた見方であらう。この言葉を移して今茲に我々と耶蘇との間柄にあてはめてみたい。パレスチナの地理歴史、ユダヤ人の風俗習慣、ヘブライ民族の社會的變遷並に宗教的發達、此等の觀察と考究とはもとより有用である。しかし同時に、否それら以上に、今日現在その必要が我々銘々に迫つてゐるのは耶蘇基督のメンタリチ、否マインドに親しむ事であらう。我々の生活中、社會に即した側面に於てもまた、天よりの重荷を負された勞働者として、敢て世間ばなれをしない弟子の團體として、上下左右兩面の壓力にはさまれて、しかもその調節のとれた、否まづ内壓力を以て外壓力を制御させられる基督者として、各々益々仰ぎかつ信じたいのは耶蘇の御心である。

八、パウロのパラカローン

讃むべき哉、われらの主イエス・キリストの父なる神、即ちもろもろの慈悲の父、一切の慰安の神、彼は凡ての患難のうちにわれらを慰め、また自ら神に慰めらるる慰安をもて、我等をして諸般の患難に居る者を慰むることを得しめ給ふ。

(コリント後書第一章三、四節)

茲にパウロが與へてゐる神の定義に二ヶ條ある。その第一はイエス・キリストにとつての父、その第二は我々にとつての慈悲と慰めとの神である。さてパウロの茲に所謂慰めとはその實何であらうか。

これまで一般的の用法に於て、慰めといふ言葉は弱々しい意味に使はれてゐる。しかしパウロがこの書翰に用ひてゐるこの言葉の意味はそれとは正反對で、我々クリスチャンの

信仰にふさはしく極めて力強い。

日本語のなぐさめを解剖すると、それは「なぐ」プラス「さめ」で、その意味は人の心をなぐやうにする——なぐやかにする——平和にするといふのであらう。漢語「慰」の由来を聞くと、慰の尉は陸海軍尉官の尉で、その意味は上より下をおさへることであるといふ。そこで慰とは心を上よりおさへるの意味で、我々の胸中にうかんで来る思想感情のうち、落ち着いたものをもつて亂れたものをおさへ、整ふたものをもつて和かならぬものをおさへる事であるらしい。尉の下に火を加へると、それが火熨寸となる。鐵の重みと火または電氣の熱と更に水の濕氣とを兼ね具へた蒸氣ゴテは火熨寸のうち最も有効なものとして、衣類のシワや織物のクセをなほすために用ひられてゐる。なぐさめといふ日本語に含まれてゐるなぐやかさといふのは慰といふ漢語に照らしてみると、その意味が心におさへを加へてそのシワを伸ばし、そのクセをなほす事となるであらう。この日本語がさしてゐるのは慰めの結果で、漢語の方が示してゐるのは慰めの手段としての壓力であると言ひ得られやう。此等二つの言葉の解剖の結果、我々にのこされてゐるのはこの慰めといふ壓力の

本質は何か、またその由て来る處は何處かといふ問題であらう。

英語の Comfort は Com「一緒に」プラス fort「力づけ」である。前に掲げた二つに比較して云へば、言葉の成立が外的より内的へ、物理的より心理的へ、または心靈的へ進んでゐるやうである。またその範圍より云へば、前の二つが何れも個人的であるのに、英語の方の見方——一緒になつての力づけはその Com——一緒に——といふ處に於て遙かに社会的であり、團體的である。しかしこの英語に比して、一層段違ひに意味の深いのがパウロの用語である。

パウロがこの第三節につかつてゐる希臘語——慰めの原語は *παροχαλιω*「バラカロン」である。この言葉の第一音節 *παρ* = Para「バラ」は平行線(バラレル・ライン)のそれと同じで、その意味は「ソバ」または「ワキ」である。そしてその第二音節 *χαλιω*「カロン」の意味は呼ぶことである。即ちパウロの慰めとは外物をもつて氣まぎらしをする事ではなく、外壓力をもつておさへつける事でもなく、神が我々をそのおそばへ召してイエス・キリストの父として、即ちもろもろの慈悲の本源なる父として、その氣高い御意を説き聞

かせ、その奥深い御旨をさとし示される事である。そのお呼び寄せの間に我々の心のシワは自然に伸ばされ、クセはおのづとなほされつゝ、思ひと感じとが正しく調節されて、我々の衷から靈妙不可思議の力がわいて来る——かやうな慰めを意味してゐるのがパウロのバラカロンである。

内村鑑三先生初期の著述中、最も廣く讀まれたのはあの「基督信徒のなぐさめ」であらう。あれが當時あんなに多くの人々に愛讀されたのはそのうちに述べてある慰めの解に、乾度比較的新味または深味があつたからであらうと私は今も信じてゐる。然るにクリスチヤンの慰めは今日すでに過去の名物、言ひかえれば現代の社會にもはや味ひ得られぬものであると見放されたり、または一種の阿片としてその効用は一時の鎮痛と催眠とにすぎないものと屢々見做されやすいではないか。我々のクリスチヤンライフに於て目下急要の一つは慰めの解を推しあげて、日本語のそれより、漢語のそれより、また英語のそれより、パウロのバラカロンにまで向上させる事であらう。

はや八九年前のこと、郊外散歩の途中に、私等は世田ヶ谷の豪徳寺に立寄つて、たまたま

井伊掃部頭の舊跡を訪ふた。その時私の興味を引いたのは我邦開國のこの大恩人のために建てられたかなり大きい墓碑ではなくて、寧ろ此寺の本堂の傍の一つの小さい禪堂である。聞けば、江戸在府中、彼は屢々この堂にはいつて、茲に結跏趺座、座禪の三昧に入つたさうである。彼が悟道の如何は私等門外漢には窺ひにくい、察するに彼の活動——その期間がかなり短かつたに係らず、特にその幕府大老としての在職が僅に三年餘りであつたに係らずその開國政策の影響が我國民全體のために極めて重大であつた——彼の活動につて、その泉の一つはあの薄暗い堂の中の彼のバラカロンにあつたのではあるまいか。否々、あの彦根城内に於ける彼の長々しい部屋住ひの當時、彼の所謂埋木の舎の奥より始まつたバラカロンにあつたのではあるまいか。彼自身の雅號や彼の詩歌を通じて、彼の着眼點を察すれば、私等にもまた幾分か窺ひ得られるのが彼の一代を通じての心境の消息であらう。あの世田ヶ谷の閑村にも近來すでに郊外電車が縦横に貫通してゐるが、その車窓よりあの巨木老樹のこんもりと立茂つた豪徳寺の森を見る時、私の想が屢々飛んでゆくのはあの晝なほ暗い木立の奥の禪堂のあたりである。

この井伊大老の禪的工夫に比すれば、我々基督教徒にとつて思想的にもまた經驗的にも推察しやすく感じられるのがルーテルの心事であらう。その修養期に於て、彼がかなり深く吸込んだのは John of Staupitz や Johann Tauler の神祕的精神である。かやうな素養の故に、その一代を通して彼はその半面に於て、パウロ式バラカロンの人であつたらしい。その證據材料は彼の行爲と言葉とに於て數限りなくあるであらう。そのうちでも彼の讚美歌として世に名高き Ein feste Burg ist unser Gott の如きは、何人も直に屈指するものゝ一つであらう。しかもそれが作られたのは彼の四十四歳の時、即ちあのウオルムス市の大會議後六年目の事であつた。この事實を参考して、益々明になつて来るのは彼が常に豊かに味つてゐた神のバラカロンが彼の對社會的戰鬥力の源として、その最も奥深いものであつた事であらう。

茲に此等世間によく知られてゐる歴史上の事實をあげるのは、たゞ慰めに對するパウロの見解の圖解としてである。井伊直弼や、マルチン・ルーテルに似た偉性が我々にありやなしやは私等にとつて全然問題外のことである。さやうな閑問題よりも、遙に肝要な關心事

を卒直に告白するならば、我等銘々が衷心に希ふ處は自らまた此等先進の足跡をたどつて少しづつにてもパウロ式バラカロンに近づき得ん事である。かやうな慰め——我々をそのそばに呼び寄せて、その深い御旨を説きさとしつゝ、我々に力づけをしてくれるバラカロンのなぐさめを我々に與へ給ふのが即ちイエス・キリストの父なる神である。「あらゆるなぐさめの神」といふ第二條をコリント後書劈頭の神觀に加へてゐるのはパウロの宗教的意識がこの手紙のしたゞめられた當時に美しく圓熟して來た結果の一つではあるまいか。著者その人の人間味を最もよく披瀝してゐるといはれるこの書翰を読む毎に、私等がまづ第一に欽仰敬慕させられるのは彼の心の奥深さに對してである。

参照——其一 井伊直弼の歌

井伊鐵三郎彦根城内に部屋住みの頃、自分の住んでゐた處を「埋木の舎」となづけた。この歌はその頃の詠と思はれる。彼の當時の心事がよくあらはれてゐる。

八、パウロのパラカローン

110

世の中を よそに見つゝも 埋木の
うもれて居らむ 心なき身は

彼が平素の心事はまた左の一首を通じて 窺ひ得られる。但し察するに、これはあの埋木の舎時代以後の事であらう。

春浅み 野中の清水 凍りゐて

その心を 汲む人ぞなき

安政五年四月、井伊掃部頭、幕府の大老職に就くと同時に（或は云ふ安政七年、即ち萬延元年、一月に）畫工狩野縫殿助をして、四位中將の冠服を著た自畫像を彫らせ、この自詠の和歌をその上に書いて、井伊家代々の菩提所たる彦根の清涼寺と江戸の郊外、世田ヶ谷の豪徳寺とに納めた。大老の決意のすべてを物語つてゐるのがこれである。

近江の海 磯打つ波の 幾度も

御世に心を 碎きぬるかな

参照 — 其二 — Ein feste Burg ist unser Gott. — Martin Luther

1. Ein feste Burg ist unser Gott,

Ein gute Wehr und Waffen;

Er hilft und frei aus aller Noth,

Die uns jetzt hat betroffen;

Der alt böse Feind

Mit Ernst er's jetzt meint;

Gross Macht und viel List

Sein grausam Rüstung ist.

Auf Erd ist nicht seins Gleichen.

2. Mit unsrer Macht ist nichts gethan,

Wir sind gar bald verloren;

Es streit't für uns der rechte Mann,

八、パウロのパラカローン

111

Den Gott hat selbst erkoren.
Fragst du, wer der ist ?
Er heisst Jesus Christ,
Der Herr Zebaoth,
Und ist kein andrer Gott ;
Das Feld muss er behalten !

3. Und wenn die Welt voll Teufel wär
Und wollt uns gar verschlingen,
So fürchten wir uns nicht so sehr ;
Es soll uns doch gelingen !
Der Fürst dieser Welt,
Wie saur er sich stellt,
Thut er uns doch nichts ;

Das macht, er ist gericht' t ;
Ein Wörtlein kann ihn fällen.

4. Das Wort sie sollen lassen stahn
Und kein'n Dank dazu haben !
Er ist bei uns wohl auf den Plan
Mit seinem Geist und Gaben.
Nehm'n sie uns den Leih,
Gut, Ehr, Kind und Weib,
Lass fahren dahin ;
Sie habens kein'n Gewinn !
Das Reich muss uns doch bleiben !

九、天杯拜受をことぶきて —— 古市静子さんへ

丁度二年前にいたゞいた短冊のお歌に因んで、私等も古市老夫人が「いつしかと八十路の坂を越え」て來られたのを心からお祝ひ申上げた。その後相馬牧師始めお親しい方々の御盡力の下に出版された御一代物語を今日もまた改めて拜見してゐるうちに、その八十年の長い旅の途中に通り越された度々の上り下りや、引續いての折れ曲りのあとが多少うかゞはれた。加ふるに今度はまた天皇陛下御即位式のお祝に際して我々國民の代表として、とりわけ年高き長命者の一人として、天杯をお受けになつたのは誠にめでたい。

我々東洋人の間によく知られてゐる諺に「命ながければ耻多し」とか、「長生は苦勞のもと」とか云ふのがある。しかしこれは人間一生の片側ばかりを見たいひとでせう。その反對で、元氣のよいアメリカ人の中には思ひきつた樂天的な言ひ放しをする人もある。

その一例をあげれば、Mr. Joseph H. Choate がニューヨークで演説中に云つた事がある、「誰も異議の唱へやうがない事だが、人生最良の時期は七十歳と八十歳との間の時期だ。それで僕は諸君御一同にお勧めする、大急ぎで、出来る限り早くそこへ達し給へ」と。先刻横濱から見えた一人の友人のたま〜のお話のうちに、淺野總一郎氏、安田善次郎氏などの得意のお歌

四十五は鼻たれ小僧

七十八が働き盛り

ができました。この米國式の樂天觀や安田氏流儀の鼻歌にもまた一面の味ひがある。陽氣、快活、何事にも屈せず、いつも挫けずといふ氣分がそれである。

さて私等クリスチャンはどつちの見方をとるべきでせうか。古市老人の御生涯の實歴と時にふれ折にふれてお讀みになつた和歌によつて、私等が教へられるのは丁度よい道、即ちまんなかの道であらうと思はれる。人間一生の片側ばかり見て陰氣な氣分に沈んだり、またその反對の一面ばかりを眺めて色々と付け元氣をしても駄目です。丁度古市さん御

自身が通つてこられたやうに、絶えず生かしてゆくべきは向上発展の心掛けでせう。この心掛けがあればこそ、私等の身の上に乗せて来るのが様々の艱難辛苦でせう。苦勞は強い人々のみ背負はされる十字架です。この重荷を厭はないで、あえぎつゝも目を頂にかけて一足一足山坂をよじ登らせられるのが私共クリスチャンです。またそれが人間としてほんとうの道です。

もし十八歳の娘頃の静子さんがあの種ヶ島を抜けださずに成行きのままの生活をあの大隅海峡の向ふの離れ島に送られたならば、勿論苦勞もそれほど重ねられず、信仰もそれほど練られず、和歌も此集に集められたほどに出て来ず、同じく天杯を受けられるにしても、今夜のこの祝ひほどに意味深くはなかつたでせう。同じ八十二歳の祝ひをせられても、それを今夜のやうにクリスチャンとして感謝せられる事は出来なかつたかも知れない。そのお歌のあちこちに見へるやうに、古市さんが今もなほ望んでおられるのは榮えの冠でせう。しかしもしあの小島ばかりに暮して来られたならば同じ強い希望が今日果して御老人の胸にもえたつたでせうか。苦勞が少ければ、涙も少かつたでせう。もがきの経験

が乏しければ、「神のめぐみの杖にひかれて」と歌つておられる感謝の念も浅かつたでせう。御生涯の大体より推察して、あなたが通り越して来られた悩みは一通りでなかつたでせう。それはお察し申上げるに餘りがあります。が、しかしそれと同時に私等がしみぐと感じさせられるのは、その苦勞が一通りでなかつたればこそ、あなたがお受けになつた御恵がまた一色でなかつたといふ事實です。

どこの庭の立ち樹を見ても、今日この頃の秋の暮れには、その葉を木枯しに吹き散らされ、または霜枯れにふり落されて段々はだか坊主にせられる樹が数多い。が、しかし春夏に繁つた青葉がなくなつて、却つてあらはれて来るのがその樹自身の命の強さであります。丁度これと同じやうに、人間の一生涯も年月を重ねるにつれて加はつて来るのが思ひ設けぬ苦勞でせう。誰の身の上にしても、銘々最初の志と望とが思ひ存分にまつすぐにまた直ちになしとげられないで、見えざる御手の様々の導きによつて決して折れてしまはずに、まがり乍らにせよ矢張り伸びて行くのが私等銘々に與へられてゐる人間としての値打と力と命とであります。すでに八十二年の登坂をのぼつて来て、こゝ峠のひと休みと

いふ今日この頃、夢にも思ひ設けられなかつた天杯をお受けになつたあなたのお喜びは定めし胸一杯であられませう。その喜びを私等も茲に分けていただきます。かへりみれば、今から二十一年まへの大森お引越以前は申すまでもなく、それ以後に於ても、お出會ひになつた秋の試みと冬の惱みとはとても口や筆にはあらはしきれないでせう。我々の庭樹の多くがその葉を一枚一枚はがれてゆくように、あなたの長い御一生涯に於てあなたの身の上から、イヤ魂から、その皮が一つ一つはがれて来て、あなたの人間としての味ひが益々軟らげられもし、また強められもせられた事でせう。それをお察し申上げる餘り、私等が茲に申上げたいのはクリスチャンとしてのお祝ひです。あなたのあとから後れつゝ同じ向上發展の山坂、同じ信仰の道を辿り行く私等にとつて、あなたの今日のお喜びは、大きな勵みです。あなたを茲まで導いてこられたのと、同じ神の恵の手にひかれて、私等もまた進んでゆきたいのはこの真中の道です。まだ仕残しの御用があなたにもいくらもありません。私等にもまだ〳〵登り盡さぬ坂道がいくつもあります。同じ旅路の道づれとしてあとになつたり先きになつたりし乍ら神の國への同行として、茲にあなたのお喜びをお祝ひ申しま

す。(昭和三年秋)

一〇、グループメソッドによる聖書の読み方

(其一)

その精神

私は純然たるレイメン(Laymen)の一人である。随つて私が聖書をよむのは全然教へられるものとしてである。勿論自ら授けられた教への餘瀝を他の方々におわけすることもある。亦さやうな必要上、或る箇所をかなり立入つてしらべる事も屢々ある。しかしかやうな時にも、いつも私の着眼からはなれないのは自分自身が現に教へられつゝあるといふ一點である。聖書をよむ時の禁物は卒業者といふ氣位であらう。教ゆるのは自分、教へらるるのは相手の人々と見なす時に、私にとつて殆んどいたづらな讀物となつてしまふのは

この書物である。この書を読むに欠く事の出来ない要件は、自らが先づ教へられるもの、否
 な教へられる必要を痛切にもつてゐるものであるといふ自覚であらう。その時に初めて
 私自身にとつて日毎の糧となり、またわが魂の渴をいやしてくれる清水の泉となるのが
 この書物である。あの中世に於て珍重された The Elixir Vitae (生命のイリクサア) 即ちこ
 の世で生命の若がへりを出かす延命剤の靈験を二十世紀の今日、事實上にあらはしてくる
 のはこれである。

例へば日曜學校教師の一人として立つ時でも、自分の呼びかける相手が素人であれば
 ある程、しかも年少者であれば尙更の事、益々切要になつて来るのが聖書の教の大綱領を
 かなり徹底的に自得する事であらう。親しい仲間同志の話し合ひには、一種の合詞を用
 ひても差支がない。しかし他宗教者や、無宗教者や、信仰未熟または初心の人々を相手
 にする時に、出て来る困難は丁度外國人に對して日本語で話しかけても、ナマリや略語が
 通じないやうなものであらう。かやうにして愈々必要になつて来るのは自身の着眼が事件
 のまたは思想の枝葉に煩はされないで、この書の教への大根幹を握つてゆく事である。

素人や初心者を相手にするからとて、自分に味ひもせず、また研究もしない事を口にしな
 がら、よい加減にすましておくのは畢竟自ら教へられる事を忘れはて、他を教ゆる事
 ばかりに氣急しい時に發しやすい大誘惑である。相手を輕蔑してかゝつて之に語るに別段
 の用意をしないばかりでなく、なに研究してかゝつたとて、彼等には逆もわからぬよと早合
 點するのは今なほ私等の衷に種のつきないバリサイ根性であらう。「この律法を知らぬ群民
 は誣はれたるかな」といふ言葉がよしや口の外へ出ないとしても、もしさやうな氣分が
 微塵でも私等の胸にあるならば、事實上誣はれてゐるのは私等自身である。聖書は先づ自
 分のために讀むべき書物である。

第一例

一般の外國文をよむ場合、または外來思想を解する場合と同様に、私が聖書をよむ時の
 方式はまたグループメソッドである。随つて茲にあげたいのは聖書のみ方に應用され
 たこのメソッドの一例である。しかも此式を通じてそのありがたい教へが最近私の腸に

しみ込むやうに覚えられる一例である。

もし卒直に述べさせていたゞくならば、我邦クリスチャン諸君全體の自覺を促がしたいのは邦語聖書改正譯の必要切迫の事實である。現在の儘の聖書が事實上大多數のクリスチヤンスにとつて別段のしたしみを持つてゐないのは無理ならぬ事である。あのやうな不得要領な譯し方は、逆も一般平信徒の理解に適しない。随つて多くの場合に於て、私等レイメンはその教への内容を味ひ得ないであらう。私自身も現在の邦語譯聖書を目して實際に上あたりがたくないとする一人である。簡潔、明快、また可得要領の日本文に聖書を改譯するの必要が現に切迫してゐる。その事實の一例を茲にあげるならば、哥林多前書第十章第十二、十三節の譯として現在私等に與へられてゐる處に曰く、

「さらば自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに心せよ。汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし、神は眞實なれば汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試煉に遭はせ給はず。

汝らが試煉を耐へ忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。」

僅かに此等二節にすら、その改譯の望ましい處が數ヶ處ある。特に茲は基督教的なぐさめ

の代表的一節として、古來屢々引用される處である。随つてその改譯の必要は一層重大である。茲の原文(英語または希臘語の)をグループメント式に讀みまた解して、私が試みた譯稿は左の通りである。

「さらば凡そ立てりと思ふ者は心せよ、倒れぬやうに。試みが汝等をとらへ居るのは皆人間的のもの、誠實なるかな神、汝等が試みられるにまかせ給ふべき範圍は汝等が堪へ得る以内なり、しかもその試みと共に彼がまた作り給ふべきはその出口にして、之によつて汝等が堪へ得るのはその負擔なり。」

いま假に何かの試みにかゝつて居るものがあつて、之を慰めるために引用されたのが上に掲げた邦語現在の儘の二節であつたとするならば、保羅のこの述懐は果してどんな効果をもたらすであらうか。その友人をしてこの一段を引用させた動力・即ち友情は一時的になぐさめをその相手に與ふるであらう。が、しかしこの引用句は果して彼の腸にしみこんで、そこに活ける泉をわき出させるであらうか。かやうに濁つた小溝を通じては、折角男らしい保羅の信仰もとても相手の胸をうるほし得ないであらう。

私の譯文に於て何人も直に看取されるのはそこに守られて居るグループの順序であらう。その第十二節に於て「心せよ」といふグループの位置は一讀明瞭、何等の註解をも要しない。次ぎの節に入つて、このメソッドは直に無量の味ひを示して居る。まづその第一句より吟味するならば、現在の邦譯は試煉を以て過去の事(遭ひし)として居る。しかし希臘語原文は勿論のこと、英譯に至るまで、これを現在の事もつと精密に云へば「とらへ居る」といふ現在完了の事として居る。茲に發揮されて居るのが保羅の魂のめざめと精神の緊張とである。彼の見方に於て、哥林多教會の基督教徒は試みにとらへられて居る。但しそれは哥林多市の教會員ばかりではない。もし保羅式の精巧なレンズを通じて見るならば、現在日毎に何かの試みにとらへられて居るのが一切のクリスチャン生活皆然りである。問題はたゞその自覺が私等銘々にありやなしやである。事實その物には毛頭疑のあり得べき筈がない。この事實に對する自覺が私等の大多數にとつて、曖昧朦朧であるのは單に私等自身の魂がめざめてゐないからである。かやうにして私等の日常生活の現状を屢々赤はだかにさらしてくれるのがこの「試みが汝等をとらへて居る」といふ一句である。

更に一步を進めてこの現状の真相を私等のために示してくれるのはその後半句即ち希臘文の *ei ty dypnotos* 「アイメーアンスローピノス」である。之に對する邦譯現在の「一人の常ならぬはなし」はその力に於て甚しく上記の原文に劣つて居る。その口調が思ひ出させやすいのはあの「儘にならぬが浮世の常」といふ薄べらな俗語である。随つてそれによつては表現されにくいのが保羅式基督教的の特徴である。然るにこの原文を譯して上に掲げたグループ式のやうに「皆人間的のもの」とするならば、そこに直に一轉させられるのが私等讀者の着眼點である。そして茲に鮮かに現はれて來るのがあの保羅式の徹底した人生觀即ち私等銘々が元來人間なればこそ、うけ得るのが試みである——私等を一層人間的に仕上げんとてこそ、試みが我等を捕へてゐるのだといふ見方である。この原文に對する英語の欽定譯 *Such as is common to man* も、あの改正譯の *Such as man can bear* も、ともに淺薄不徹底である。不幸にもそこに現れてゐないのが「皆人間的のもの」といふ程の深み——試煉なしには誰もほんとの人間になれない、試みは人間の本質的の要求であるといふ見方である。さて此等の二句をまとめた一文、即ち「試みが汝等を捕へ居るのは皆人間

的のものに於て、その上半に於ける試みにとらへられて居るといふ人生の現狀観よりも、更に更に大きな重要さを示して居るのはそれが皆人間的なものだといふ試煉の真相観である。かやうにして茲に明らかにされてゐるのは試みがもとより悪魔のしかけではなくて、皆これ人間性固有の要求であるといふ眞剣な事實観である。

次にその着想平凡、またその表現に引縮りの乏しいのが此節の中段に對する現在の譯し方である。原文に於ける順序通りにそのグループスを寫し出さんとした試みの結果が即ち上に掲げた試譯である。現在試みにかゝつて居る者等に「汝等を試煉に遭はせ給はず」と云ひ聞かせたとて、その効能は畢竟眠術ほどにもないであらう。それだけでは基督教的の正しい思想と感情とが相手の胸中に永續すべしとは思はれない。保羅が茲に腹一杯の力を注ぎ込んでゐるのは最後のグループである。即ち神汝等が試みられるにまかせ給ふべき範圍は汝等が自ら堪へ得る以内の事であるといふ處である。私等を試みにまかせられるのは神の無情無慈悲の致す處ではない。さやうの早合點は屢々無用の煩悶を私等に與へる。保羅自身はさやうに不徹底な考へ方をすばやく切り抜けてゐる。天晴れ健氣に

も彼がこひ願つてゐるのは試煉といふ外壓力の軽減される事ではなくて、寧ろ自らその負擔にたへ得ることであつた。また事實上、この負擔に彼がたへ得たのは畢竟信仰の内壓力膨脹の結果であつた。

かやうな内壓力の膨脹區域を私等のために指し示して居るのが此段最後のグループ、即ち汝等が堪へ得る以内の事であるといふ處である。彼の見方によれば、我等に與へられる試みの輕重は神が我等の負擔能力に對して示し給ふ信任の大小に比例してゐる。即ち試みの大小輕重は私等の負擔力量に準じて神の定め給ふ處である。わが隣人に來る試みが例へば六十であるのに、我が身にふりかゝるのが八十であると計量し得られる場合に、保羅は男らしくも考へた隣人の負擔力は六十迄と見積られてゐるのに、神はわが能力を八十と計算してくれられたからであると。我神を信仰すと口に唱へつゝなほ心に落着を得がたい私等の現世生活に於て、茲により大きな聲が保羅の口を通じて我々の頭上に響いて來る「神が我々を信用してゐられるのだ」と。

第三に、非グループ式の現在譯に對してもう一つ慨嘆にたへぬ事がある。それは現代式

逃避病的の宗教感が露骨千萬にも此節の下端にあらわれて居る事である。といふのは「汝等が試煉を耐へ忍ぶことを得んために、之と共に遁るべき道を備へ給はん」である。保羅式の見方によれば、試みは私等銘々の負擔能力に對する神の御信任の公表である——證明である。故にこれはもとより私等が斷じて逃避すべきものではない、随つて神がゆめにも備へ給はないのはその通路即ちに出し路である。私等の聖書の読み方は往々逃避病的である。否、一層痛嘆にたへないのはその現在の逃避病的な譯し方である。ためにその譯者も讀者も相俱にまぬがれがたいのは論語讀みの論語知らずといふ古い非難である。試みは私等に對する神の賜物である。しかも之と俱に、また彼が作り給ふのはその出口、*Exhauri* 「チーン エクバシン」である。私等銘々の人間性の大成・玉成・完成のために與へられる試みの入口が、つねに私等の前後左右に、あけてあるやうに、神がまた私等のために作つて置いてくれるのはその出口である。出口とは勿論にけ路ではない。たゞ時々折々の息つき場所である。人生ののぼり坂に於て、あちらこちらの道ばた涼しい樹蔭に、見出し得られる一休の場所である。例へば眞夏の山路に沿ふて、たばしりくだる清水の流れ

を掬しつゝ、渴をいやし得べき峠道の掛茶屋である。固より幾久しく腰おちつけて老こむべき安住の家ではない。況んや試みの苦しみよりとこしなへに遁るべき隱遁場所たるに於ておや。天父の恩愛、深きこと海の如く、幸にその入口と俱に時に隨ひ折にふれて、あたへ給ふ出口の御蔭で、私等は銘々の負擔に堪へ得させられる。と云ふのが保羅の此節に於ける主張である。腰弱わの現代に、生息する一人でありながら、かやうにすばらしい古人の意氣を私等もまた遙に仰ぎ得るのはグループメソッドを通してである。

試みとはその發音通りに、心見である。それは不仕合せな運のまわり合せではない。この手段を用ひて、神が實行し給ふのが私等一切衆生のちから試みである。この試みにとらへられて居る事に於て、基督者と非基督者とに差別のあらう筈がない。たゞこの事實に對して、正當な自覺をもつて居るべき筈であるのが基督者である。然るにそれが筈に止つて、その筈がまだ一轉して事實とはなつてゐない。といふ場合が私等の間にもまた甚だ多い。さればこそ、此節に於ける保羅の主張がかやうに甚しく誤譯されてゐる。試みに對してあてがはれてゐる漢語は誘惑である。この二語の意味は讀んで字の如く、秀でた言葉

以て相手をまどはしつゝ、或は或はその心を二三にさせるといふ事とも解し得られるであらう。言ひかへれば、誘惑とは所謂悪魔が私等を陥れやうとする手段である。試みをかやうに誘惑と見たのは古來世間に流行の見解であるが、それは斷じて保羅式の見方ではない。私等銘々の試みといふ觀念より極力洗淨してしまふべきはこの魔的のまどはしといふ着色であらう。

漢語より英語の方に轉じて、試みを言ひかへるならば、その一は即ち try-trial である。語原的古義に於て try は thresh であるといふ。thresh の意味を今もし具體的に圖解するならば、あの連枷で麥を打ちつゝ、その粒をその莖より離すことである。丁度そのやうに物のよしあしをしわけ、またはえりわけるといふのが今日なほ用ひられてゐる try の意義であらう。故にこの英語の字義にまた毛頭含まれて居ないのが魔的のまどはしといふやうな悪意である。日本語の試み—心見と英語の try—thresh—しわけ—えりわけとは何等陰氣な影をもたぬ處に於て、好一對である。もし強いて此等二つの區別を立てるならば、前者の着眼點は試みられる心その物の内容實質に注いで居り、後者が重きをおいてゐるの

るのは寧ろ試みの手段にあるとも言へやう。

試みといふ言葉のかやうな用法の一例を舊約時代最大の試みの記録たるヨブ記中に求むるならば、その第三十四章第三十六節の一文 Would that Job was tried unto the end. がそれである。これをまたグループ式に譯するならば、現在邦譯の「ねがはくはヨブ終まで試みられんことを」とは違つて、「ねがはくはヨブの試みられる事最後にまで及ばん事を」となるであらう。この一文の意味はとりもなほさずヨブの心見・力だめし・性格試験に用ひられる手段に手落と手脱とが一切なくして、それが最後まで徹底的ならん事をねがふといふのである。このヨブ式忍苦の心にナザレの耶穌の靈のバプテスマを施し得た結果として、微塵の陰影のないばかりでなく、天來の光明に照らされて、その朗らかさに満ちみちてゐるのが即ち試みに對する保羅式の見方である。

試みといふ觀念の比較標準を更に私等に近い處に求めるならば「にくゝては打たぬものなり筐の雪」といふのがある。この發句は苦痛といふ人類の宿題をあつさりと片附けてゐる。但しその態度はやはり俳諧師的たるを免れない。漢文の名文に「天の將さに大任を

この人に降さんとするや、必ず先づ苦しめるのはその心志、勞せしむるのはその筋骨、饑へしむるのはその體膚、空乏ならしむるのはその身」といふのがある。その男性的な雄辯は流石に孟子流である。以上の二つと同じ流れの倫理的著想をたどりゆきながら、それをひきあげてかやうに氣高い宗教的の信仰としてくれたのが即ちわが保羅である。私等現代人が今も尙ほ陥りやすい逃避主義の悪魔を私等の胸のうすぐらい片隅より追ひ出して、私等をして魂の膨脹といふめぐみに踏込ませる葉として、極めて有力なのが保羅の主張である。彼の信仰の勇らしさを仰ぐと俱に、そら恐ろしさの禁じ難いのは私等従來の考へ方の貧弱さである。同時に衷心遺憾に堪へないのは私等の現在もつてゐる聖書に屢々見出される甚しい曖昧さと不得要領さである。

一一、グループメソッドによる聖書の読み方

(其二)

第二例

現在の日本語新約書に用ひられてゐる譯し方は上に述べた通りに、多くの場合にレイメに適しない。然るにグループメソッドによつてその原文を讀むと、その中味がハッキリして来る。その第二例として、茲にあげたいのは哥林多後書第六章 九―十の二節である。現在の改譯によれば、此等の二節は

「我らは人を惑はす者の如くなれども眞、人に知れぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども視よ、生ける者、懲さるゝ者の如くなれども殺されず、憂ふる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も

有たぬ者の如くなれども 凡ての物を有てり」
である。僭越ながら、茲に加へたい改正譯の一例は左の通りである。

「欺く者 また 誠實者として、

無名者 また 熟知されたる者として、

瀕死者 また 見よ 生ける者として、

懲らされる者 また 殺されぬ者として、

憂へしめられる者 但し 常に喜べる者として、

貧者 但し 衆を富ます者として、

無一物者 また 萬物の所有者として。」

此等二通りの譯し方に於て 第一に注意すべき大なる點は 前譯に通じて用ひられて居る「……
如くなれども」が後譯に於て 「……として」となつて居る處である。もし 苟も細心に讀むな
らば、誰でもすぐ氣づくべきは 以上七行の二々に於ける「……の如くなれども」の 不都合さ
であらう。例へば、第十節の「懲られる者の 如くなれども 殺されず」といふ上半は 全く事

實に反してゐる。事實上、保羅が 絶えずうけたのは 神の懲しめである。彼は 天の父の 愛の
鞭に 絶えず鞭打れた。そして其事を彼は 自覺して居た。かやうな鞭の痛さを 十分に感じた
にもかゝはらず、この自覺の故に、彼が 感謝したのは 神が之を 自分に加へ給ふ その大御心
に對してである。かやうにして、彼が自得したのは 苦痛を 肉體に與ふると同時に 喜悅を 心
靈に賜ふ 神の攝理である。このバラドックスの間に 鍛はれたのが 彼の人間味である。彼の自
叙傳的書翰によつて 明かに 察し得られる通りに、この頃彼が 經驗した懲しめは 彼の一代に
於て 前後にその類例のない程に 深刻痛切であつた。この懲しめの下に 殺されるのかと彼は
幾度か 自ら思ひ迫つた。然るに 結局 殺さずして 彼を懲らされたのが 天父の御手である。
かやうな體験を 重ねゆく間にかためられたのが 神の使徒としての 彼の自覺である。

之と同じくその「憂ふる者の 如くなれども 常に喜び」の上半が また大きな 誤りである。
彼の諸書翰に 明かに 示されて居るやうに、様々の 外來的壓迫の故に、彼は始終不斷に 憂
へしめられた。彼の性格は 内實の香氣者、外觀上のみ憂愁者と見えるものではなかつた。
その實 反つて 憂慮のたへぬ 苦勞人であつた。彼の氣質の何處を たゞいても 出て來ないの

があの Hap — hap — happy, honey-moon type の幸福第一主義的気分であつた。生れてより死するに至るまで彼は終始一貫先憂後樂即ち世に先きんじて憂ひ亦た人に後れて楽しむ流の性格であつた。かやうな性格に對して「憂ふる者のごとくなれども」といふのはその真相を証ゆるもまた甚しいと云はねばならぬ。また最後二行の「貧しき者の如くなれども」と「何も有たぬ者の如くなれども」とが俱に甚だしい見當違である。保羅の場合に於て事實は即ちその正反對であつた。彼は文字通りに、貧者また無一物者であつた。かやうに第十節の前譯に於て「如くなれども」とあるのは全然の誤譯である。これと同様に第九節の現在譯にある「如くなれども」も亦た悉く誤である。事實々際彼は瀕死者、また無名者であつた。たゞ此節最初の所謂「欺く者」といふ意義の解釋如何は紙面の制限上他日に譲つて、その「如くなれども」もまた誤譯であると私は茲に主張して置く。

かやうに此等二節を通じて「如くなれども」を悉く取り去つて、その代りに入るべきは「として」である。抑もこの手紙の第六章第三節以下第十節までの一段に於て、保羅が主張して居るのは耶蘇基督の使徒としての自分の資格である。この一段の言葉使ひに於てそこに

自然にあらはれてゐる段落が三つある。その第一段落は第三節後半より第七節前半までで、第二段落は第七節後半より第八節の終りまで、そして第三段落が即ち第九、十の二節である。この第三段落に於ける彼の言葉づかひの特徴として七回までも繰り返されてゐるのが希臘語の前置詞 — *ὡς* — 「ホース」である。これを七回ともに「如くなれども」としてゐるのが邦語現在の二譯で、これを悉く「として」と譯せよといふのが私の主張である。これを「として」と改譯するのが正當で、また精確であるといふ理由の中最も大きいのは保羅が茲に彼の資格の七ヶ條をあげてゐる事である。この試譯「として」と「ホース」とを比較して見ると、希臘原語の方がその位置に於て、一層まさつてゐる。この前置詞は原文に於て一ヶ條毎にその始めに置かれてゐる。元來前置詞のない日本語に於てはその譯が後置詞として、一ヶ條毎の終りに置かれるのはまたやむを得ない。随つて希臘原文に於て一つ書が七つまで重ねられてゐる簡條書の明確さを同じ程度に於て日本語にあらはす事は出来なからぬ。この一點のみは遺憾として置いて、私が茲に指摘したいのは前譯「如くなれども」の絶対的の誤りである。

保羅自身の一代の閱歴に照らしてみても、この誤譯が事實に反して居るばかりでなく、私等の信仰生活に及ぼして来るその弊風害毒はたやすく測り知れない程に重大である。

使徒として保羅の自任した處はとりもなほさずクリスチャンとして私等各々が自覺すべき處であらう。事業成績の大小輕重は全く別問題として、私等がまた自ら常に懐くべきはこの一段中に自白されてゐる保羅の精神即ち信仰であらう。然るに衷に自ら願て私等の信仰状態は保羅のそれ程に力強くなく・けなげでなく・また男らしくない。これにはそれ相當の理由があるであらう。其一つとして、私が茲にあげたいのは私等各々の間にこれまで行はれて来た考へ方の誤りである。言ひ換へれば、人生に對する私等の見方の不徹底さである。私等がライフの真相を見届けること保羅ほどに眞剣でないからである。之を一層具體的に云ふならば、基督教徒はその本質上神の懲らしめを受けるべき筈のものである。その周圍環境よりきたる種々の刺激と壓迫とを鋭敏痛切に覺えさせられるが故に、斷えず憂へさせられる筈のものである。現世の社會生活に於ても亦たその追求する處が常に世間並以上に高い賜物であるが故に、物質的には貧者であり、亦た無一物者であるべき筈

のものである。此等の筈を正視しまた直觀して、保羅が徹底的に自得したのは基督の使徒としての自覺である。茲にあらはれて来るのが彼と我等との間に存する距離である。一面に於ては在來式宗教の世俗的淺見をまだ脱し得ないが故に、他面に於ては外來式宗教の徹底的深みを探り求むる日數と經驗とが私等銘々になほ淺いが故に、結局私等の間にまだまだ充分に理解されて居ないのがかやうな保羅式信仰の中味である。

例へば、茲に私等の胸中に往來しやすい一種の假定説がある。あの勞働を最も少くして利益を最も多くする事、支拂を可及的少くして所得を可及的多くする事、他に與ふる處を最小限度にして自ら取る處を最大限度にする事それが即ち最上の指導原則であるといふ早合點がそれである。そして私等がたへず逃避しつゝあるのはその眞偽如何を詮索吟味する面倒である。この安逸第一主義を通して、私等の宗教生活までもが亦た現に經濟化されつゝある。「汝ら一切をすて、十字架を負ひつゝ我に隨ひ來れ」とか、「無價にてうけたれば無價にて與へよ」等の言葉は私等の間に大抵の場合に於て實際上、古代語となりつゝある。多くの時間に於て名義のみのクリスチャンである私等の假定によれば、信仰とは其實、私等

をしてこの苦しみの多い人生より逃避して、懲しめのない極樂の出張所に参詣せしむる氣分にすぎない。私等が屢々陥りやすいのは基督者とは疲勞除けのおまじなひ式の低級な讚美歌氣分に耽つて然るべき者であり、正義と純潔とを自己の衷心より身邊の社會へ擴充すべき十字架的の苦勞から免疫された者であるといふ獨り合點であらう。——その勤勉と、たしなみと、博愛慈善との故に、此世にあつて當然また直に生活上の便利と安易とを享樂し得べき者であるといふ早合點であらう。それとは全く段違ひなのが保羅の見方である。天の父が私等にたへず與へ給ふのは愛すればこそその懲しめである。永遠の生命を私等に授けるために、神が屢々私等を陥れ給ふのは殺されぬだけといふ危地と窮境とである。苟も不正不義と不純不潔とかこの世界に存する限り、此等を深刻にくませられつゝある私等が當然痛切になめさせられるのは此等より來る苦痛である。但し之と同時に私等は神よりの力とあはれみとを與へられるが故に、また基督のなやみと更生とを信ぜしめられるが故に、加ふるに自己と世界との救の望みより來る喜びを常に胸中に復活させられるが故に、結局私等の所有に歸するのが萬物である。また私等を通じて富されるの

が世間の大衆である。兩手に花をもつて、神とマンモンとに兼ね仕ふるのは絶対的の禁制である、神に仕へまた耶穌を愛するに私等が傾注せねばならぬのは全身・全力・全靈である。これが即ち人生の眞實相であるといふのが保羅の人生觀であつた。かやうな保羅式の見解と私等の平素の假定との間に存してゐる懸隔の事實上の甚だしさを思へば、直に判然と自覺し得られるのが私等相互の信仰程度の幼稚さであらう。

かやうに重大な意義をもつて居る希臘語の前置詞「ホース」が日本語譯に於て甚だしく間違へられてゐるのには亦た久しい由來がある。羅旬語「ヴォルゲート」譯を通してこの希臘語が近代歐羅巴語に寫されて行く間に起つたのが一種意味上の混同である。このホースは羅旬語聖書の此等二節半の間に現に四通り別々な言葉で譯されてゐる。然るに英語譯に於てはこの一語がAsとなつてゐる。かやうに統一させた處は確に英語譯にみとめ得べき一つの長處である。そのAsを私は「として」と解するが、聖書の邦語翻譯諸家は之を「如く」と譯してゐられる。資格のAsを誤解して、比較のAsと見做した處にあやまりがある。この誤解が先づ羅旬語ヴォルゲート譯にあらはれたのは所謂使徒等の超

人間的職權を重んじた羅馬教會派の見方として、たやすく合點し得られる。かやうな淺見が歐羅巴近代の聖書學者等にさへ偏見を與へてゐるらしい。あの博士ウエイマスの「近代語に於ける新約聖書」までもこの點に於ては筋違ひの布演をしてゐる。先進的基督敎國の學者達までもこの偏見に陥つて居るとすれば、日本語譯に於けるあやまりは別段怪しむに足らない。誤解の最初の責任は寧ろ羅句語譯者にあるであらう。但しさやうにあつざりと片附けて仕舞はれぬのが私等銘々の損失——この末流の濁水をくみとつて來た處より來る私等自身の信仰の溷濁さであらう。保羅の人間性情と並にそれが強められ、また固められた徑路との見落しもまたこの「ホース」一語の誤譯に由來する處が少くない。これは私等にとつて見逃す事の出來ぬ重大な損失である。

かやうな一一の例證によつて判斷しても、直に判斷して來るのは邦語現在の聖書がその譯し方に於ていかに不得要領であり、またその感化に於ていかに不徹底、隨つてまた有毒であるかと云ふ事實であらう。聖書を通じて、耶穌基督の並にその使徒等の信仰と性格とに咫尺相接することは私等の信仰生活にとつて最大の必要條件である。我邦一切のクリ

スチャンスをしてこの要件をたやすく手にし得せしむるために、私等がまづ懺悔すべき事の 一つは、邦語現在譯聖書のうはすべりといふ事實である。隨つて私等が祈り求むべき事の 一つはその再改正譯完成の日の速かに來る事であらう。

一一、老友のための祈り

老友某君肝臟病にて入院、病重しといふしらせを受けた翌日午後、彼を東京市下谷病院に訪ふた。病室の戸にベッタリはりつけられた面會謝絶の張紙にまづ胸を衝かれながら、まづ名刺を令夫人に通じた。薄暗い廊下の立話數分、其年一月以來の病苦に對して、慶應大學の西野博士もまたこの病院の諸先生も既に最後の宣告を下された事を聞つゝ、同君並に令夫人の御胸中を想ひては、御慰めの言葉が出なかつた。僅かに「お祈りします」など一二言をのこして、辭した。

其夜、同令夫人宛したゝめた左の手紙、讀みなほして見て、茲にこれを掲げて

置く、相似た経験の人々が、廣い世の中には、随分あるであらう、否かやうな人事の片影が、誰の身にも無いとは、斷言出来ないと思つて。

拜啓、先刻御わかれしなに、お祈り申上げましたので、歸りの電車中、私の感じを再吟味しました上、不取敢、左記敬具致します。

その原文の意味に随つて、あの哥林多前書第十章の十三節を、私は試みに改譯して左の通りに讀みます。

「汝等を捕へた試みは、皆人間的であるが、神は誠實で、彼が汝等に許し給ふ試みは、悉く汝等の力量以内である。しかも、彼がその試みと俱に作り給ふは、これに耐へ得べき出道である。」

この讀み方は、現在の日本譯と違ひます。その根據は、原文の解釋と最近數ヶ年間の私のいさゝかの経験——心身兩面に於ける生死の問題に關しての経験とにあります。只今の場合、あなた方への御見舞として、差上げ得べき最良品は、やはりこの尊い教に立脚しての祈りであると信じます。

「全智の大御神よ、我々の生と死とはあなたの附與し給ふ處、我々自身の意欲によつて寸毫も此等を伸縮する事が出来ません。我々の友——主にありてのこの良友の危機に際會して、我々は茲に再び心苦しき祈り——御意の儘に——を唱へます。

しかし全能の大御神よ、人智と人力とが耐へ能はざる試みに陥つた時、あなたの大能の御手は我々を導きて、それをも忍ぶために、我々に與へ給ふのが不思議な靈力であります。我々は之を感謝しつゝ、この御力をなほ多く與へ給はん事——特に目下の我友とその家族一人々々と、與へ給はん事を祈ります。

また全愛の天父よ、基督を通じて與へ給ふあなたの大なる愛は、我々の眼より鱗片を一つ一つ取り去ります。あなたが我々に許るし給ふ試みのかさは、我々銘々の負擔能力に準ずる事を、我々に信ぜしめ給へ。あなたが我々に加へ給ふ試みの重さは、我々一人一人の耐苦力量に、正比例する事を、信ぜしめ給へ。

耶蘇の父よ、我々銘々の弱きを、しるしめし給ふ天父よ、あなたの試みは、即ちあなたの我々に對する御信用の深さを、さし示すべき事實である事を、我々にもまた示し給へ。この御示

一三、「主よみもとに近づかん」

一四六

しに随つて、此世に於ける我々の歩みが時々刻々確められ、また強められるやうに導き給へ。この祈りを我々の友とその一族とのために、耶蘇基督の御名に於て捧げ奉る、アーメン。

一三、「主よみもとに近づかん」

すきな讚美歌 一二例

讚美歌をうたふのが下手な私は自分ひとりです。それを音楽として楽しむことができない。しかし聲がよくて、調子の上手な歌ひ手、ことに音楽素養のある外國人が歌はれるのをきいてゐると、私もまた屢々、覺へずそれに心をひきつけられる。現在日本語に譯されてゐる讚美歌のなかで、その意味に心をひきつけられるのが二つある。その一つは二百四十九番の

主よ みもとに ちかづかん、

のぼるみちは 十字架に

ありともなど かなしむべき、

主よみもとに ちかづかん

と5番一節で始まつてゐる歌。この歌の原文は

Nearer, my God, to Thee,

Nearer to Thee,

Even though it be a cross

That raiseth me;

Still all my song shall be

Nearer, my God to Thee,

Nearer to Thee!

今一つは二百十一番の

いさをな きわれを 血をもて あがなひ

ユス まねきたまふ われ みもとにゆく

一三、「主よみもとに近づかん」

で、この第一節の原語の方は

Just as I am, — without one plea,

But that Thy blood was shed for me,

And that Thou biddest me come to Thee,

O Lamb of God, I come.

さすがに進んだ基督教國の所産として、双方ともにたゞ一讀しただけでも、私等の宗教心の琴線に觸れるところが、ふかい。二百十一番の方は他日にゆづつて、こゝに少しく述べたいのは二百四十九番の歌に對する私の感じです。

先夜食事のとき、私の娘の一人がたまたま話したことです。その通學してゐる某女學校のおもな職員（ひとりの）、外國教師某氏がたいへんに愛して居られるのがこの讚美歌の原歌で、その中味の尊（たう）とさをおもんばかつて、彼はみだりにこれを口にせられないさうです。我邦における彼のこれまでの生涯（しやうがい）や今もなほ續けて居られるその仕事から推し測つてみれば、成程さうありそうな事と合點し得られるのがこの歌に對する彼の共鳴です。

只今もう一つの例證を思ひ出しますが、東京神學社神學校校長、故植村先生、追悼會の席上、まづ歌はれたのがこの二百四十九番で、その合唱にははつて居るうちに、また引續いての思出話を聞いて居るうちに、私の胸にうかんできたのは、同先生の精神がこの讚美歌によつてよく代表されてゐるといふ印象である。日本基督教會派の大立物として久しく敬愛せられ、また憚（はげ）かられた故人の信仰を解剖してみれば、その眞髓は彼の魂が一步一步向上ののぼり坂に進みゆく、否、引上げられてゆくといふ處、即ちこの原歌の第一行に一層美はしくあらはれてゐる處であらう。彼のかやうな信仰は宗教者らしい眞心として、今後幾久しく慕はれるであらう。彼自らが神のみもとに更に一段とちかづいて居られる今日、かへりみて自ら誇りとせられるのはこの世にのこされた彼の事業ではなくて、むしろかやうな信仰を五十余年のあひだ自らたもつて來られた事、しかもその信仰が今やかの世において着々實現させられゆく事であらう。

原歌愛誦の普遍性

Sarah Flower Adams 夫人がこの歌をつくられた當時の事情を上掲の外、國人宣教師某氏にお尋した處、早速書物を四冊送つていたといふ。そのおかげで、私は多くの奥床しいことがらを知つた。

そのうちの一冊は英國評論之評論の創刊このかた、その主筆であつた W. F. Stead 氏の編纂物 Hymns That Have Helped (助けとなつた讚美歌) です。元來讚美歌の大愛誦家であつた彼は英國當時の朝野知名の士女あまたに、おのおの大きな助けとなつた讚美歌はどれどれかと問合して、その答をあつめたのが一八九五年の事。各方面よりの答を丁寧整理して、それにもとづいて出版した編纂物がこれである。

ステッド氏のこの間に應じて、當時の英國皇太子、後の國王エドワード殿下が讚美歌のうちでもつとも深く人の心に觸れるものとせられたのはこの Nearer, my God, to Thee である。また女王ヴィクトリアがアダムス夫人に敬意を表されたのもこの美しい歌の作者と

してである。但しこの歌が愛吟されてゐるのはかみは王宮よりしもは賤が伏家にいたるまで、あらゆる階級に通じてのことである。後者の一例をあげるならば、北米合衆國にて南北戦争の最中に、ピシヨップマアザキンがアーカンサス州を流浪漂泊しつゝ、ほとんど失望落膽に陥いつた折柄、ふしぎにもその氣分を上げまされ、またたしなめられたのはこの讚美歌の妙なる節を聞きつけたからであつた。その聲をたどつてゆくと、あのあれ野原のまんなか、あれはてた掘立小屋のなかでこの歌をうたひながら年よりのやもめ女がわすれてゐたのはその貧苦のみぢめさであつた。

今ひとつの事實をあげんに、一九一三年の四月十日その處女航海として英國サマブトン港を出て、大西洋に乗りだしたのは當時最大の新造汽船タイタニック號。その船客の一人として、ダブリュ・テイ・ステッド氏は世界平和前進運動の大會に列席しまた講演せんがためにニューヨークに向ひつゝあつた。その十四日、日曜日の夜、巨大な冰山に衝突して、四萬六千トンの大船體が船首より船尾までまつぶたつに裂けてしまつた。同時に潮のうづにまきこまれた一千六百人のうちに當年六十四歳、但し氣力なほ壯んなステッド氏があつ

た。其時しあはせよくも救命艇にのりこみ得た船客のまなこより、その長さ八百八十二尺、その幅九十二尺といふこの巨船のかけが 徐ろに、但しとこしへに消へさつた時、彼等のきゝつけた最後のひびきは 本船の樂隊がけなげにも 自分等の最後まで奏したこの Nearer, my God, to Thee のしるべである。

かやうな 悲壯悽慘至極な背景に はめた時ばかりでなく、この讚美歌のうるはしさを 私等が味ははせられるのは もつと尋常な場合においても また同然であらう。否あるひは 一層痛切にこれを合點させられるのは 普通人の日常生活に於てであらう。即ち 他人に知れないばかりでなく、自分自身にも ほとんどたいした自覺なしに おくつてゐる 平凡人日々の奉仕生活に於てであらう。その持場として かためてゐるのが 家庭のうちであるにせよ、または 公けの位置であるにせよ、とにかく名利以上の着眼を以て、世界の平和と人間の幸福とにおのおの微力を靜かに さゝげつゝある あらゆる人之子等の 信仰生活に於てであらう。かやうな人々の胸に たえず響いて居り、またその口におのづから漏れてくるのが この讚美歌であらう。

原歌作家のひととなり

この原歌の作者 サラア・フラワア・アダムス夫人は ユニテリアンの一人として 世に知られてゐる。ステッド氏の記事によれば、英國ツリニテリアンスのなかには、ユニテリアン作の讚美歌から 靈的の利益をうけるのは その良心に對して疚いとして、これに筆を加へたことがあつた。一層目立つた仕方として、その一節(例へば、第五節)全體がきり去られたこともある。しかもその眞似をしてゐるのが 他の教派中にもあるといふ。私等が現在もちいて居る讚美歌本に 幸に つたへられてゐるのは この歌の全部である。そもそも原作者の所屬が 一位一體宗であらうと、三位一體派であらうと、または この歌に手加減を くはへたと云はれてゐる 教派の バプテスマに對する主張が どうであらうと、其等の區別は 私等が只今別に 問題とするところではない。もしその中味にふくまれて居るのが 教理と宗派とに超越した 人間味、即ち 神を慕ひまつりて 一步一步みもとへの上り坂に 進みゆくといふ人間性であるならば、その作者が ユニテリアンであつたとあとから聞かされたとして、この歌に對する私等の

共鳴は更に減じない。よしやこの歌の全篇五節を通じて呼びかけられて居るのが神のみで、神の子または聖靈といふ文字がそのいづこにも見出し得られないとしても、さればとて作者の信じて居なかつたのが基督並に聖靈であると主張するのは讚美歌と組織神學とを混同するものであらう。耶蘇の基督性と聖靈の借在性とを信じてゐる私等にとつて、益々ふかく味はれるのがこの歌に歌はれてゐる信仰そのものであらう。

傳記によるに、アダムス夫人の生れたのは一八〇五年二月二十二日の事で、その父ベンジヤミン・フラワアは彼女の二十四歳の時に死んだ。二歳うへのその姉エリザとふたりはそれ以來迎へられてかねて知りあひのロンドン市フィンスベリ區サウスブレースユニテリアン教會評判の牧師ダブリュ・ジェイ・フォックス氏の家に客寓した。その後五年目即ち二十九歳の時にダブリュ・ビー・アダムス氏と結婚したが、彼女が肺病のために死んだのは一八四八年の八月、即ちその四十三歳の時であつた。その三十六歳の時に公にされたのが彼女の作のうちの大物、Vivia Perpetua と題する劇詩であつた。しかし彼女の名を英語世界にひろがらせたのは寧ろその作の讚美歌である。そのうちとりわけ名高くなつたのが

この Nearer, my God, to Thee で、この歌の公にされたのもまた彼女が三十六歳の時である。或は彼女の讚美歌として一層まさつてゐるのが「ま一つ別の He sendeth sun, he sendeth shower だ」と評もあるが、その愛吟されてゐることが世界的にひろく、また社會の上下一般にわたつて居るのはこの方であらう。

この歌にかやうな引力がこもつてゐる理由が二つある。その一つはこれに附けられたふしの妙味で、其二が即ちそこに歌はれてゐる精神のうつくしさである。この歌に最初のふしつけをしたのは作者の姉エリザであるが、このおとどひは獨逸作曲の名家メンデルゾーナーバールトールデーにも知られてゐて、ロバート・ブラウニングもまたエリザの音樂的才能を讚嘆してゐる。このふたりが自らその聲樂班の仲間にはいつてゐたフィンスベリ教會の堂内で久しくうたはれたのち、世間にひろがつたのがこの歌である。

ブラウニングがつねに親密に往來したフラワア家において、エリザは彼よりも九つ、サラアは七つ年うへであつた。彼の少年時代に彼はこれのおとどひと屢々宗教問題を語り合つた。そのころ妹サラアの通過しつゝあつたのが密雲漠々たる疑惑と無信仰との心境で、彼女の

自白中に「私が失つたのはつかまへどころだ」といふ言葉もあつた。世間或ひはこの男性的大詩人をしてその處女作 Pauline を思ひ立たせた其人は即ち彼女であつたといふものもある。それはにはかに信じられないが、彼女がかやうな精神上の試みと苦心とをはいやくより感じた事は疑はれないらしい。しかもけなげにもかやうな鍛錬に耐へ得たればこそ、彼女が信仰上のさすらい人として、歌ひ得たのは日は全く暮れはて、やみに襲はれながら、石を枕として、しばし結んだ假寝の夢に、またはさめたる思のうちに、嘆きとうめきとを貫きて、天かける翼に、身をよせつゝ、飛翔向上いやましちかく、みかみのもとに、すゝみゆくといふ心境の消息であらう。彼女はもとより傳説的のお座なり信者ではなかつた。さりとてまた已惚的の理智崇拜者でもなかつた。彼女の魂の要求は「この世の物」ではなくて、「わが神」の靈であつた。その追求した安住境は刹那的享樂の夢幻的假宅ではなくて、寧ろ永遠愛、即ち金剛不壞の生命殿であつた。かやうな向上心とそこよりおし出されてくる努力との間に生れて出たのがこの讚美歌である。

中味のねうち ありがたき

宗教的の詩や歌の縁起しらべにおいて、屢々見出されるのはそのうち多くが生活上の逆境に喚び出されてゐる事であらう。アダムス夫人の場合において、また同じ見方をくだしてゐる著者もある。このたぐひの書物によれば、彼女がその體質のつねにかよはかつたにも係はらず、否あるひは幾分かそれが爲でもあつたらうか、自ら樂みとしたのは他人の手助けをする事であつた。また極端な慰安缺乏を忍びて迄も、彼女は常につとめて他人の悲哀を緩和した。おとどひ相互の愛情はいたつて親密であつて、エリザが肺病にふした頃、サラアは日々その病床に看護した。姉が危篤に瀕した一夜、妹がその胸に往來した感じをそのまま鉛筆にしてみたゝめたのが今は世に名だかきこの歌の一部分である。四十三歳を一期として、エリザが死んだのは一八四六年のことで、この打撃の下にいたいたしくも惱んで、この妹がまた姉の看病中にうけた肺病毒におかされて、其あとを追ふて没したのはそれより二ヶ年後の事である。この重い病中に、アダムス夫人の筆よりながれて出たのがこの

讚美歌ののこりの數節であるといふ言ひ傳へもある。

宗教的詩歌の緣起談として、世人が大抵、信じやすいのはかやうな物語である。茲にもまた見出されるのは陰鬱な氣分が世間流行の宗教的感想にまじりがちな事である。宗教をばその本質以上に消極的にしてゐるのは私等人間のしぐさで、決して神わざではない。言ひかへれば、それは宗教そのものの本性的要求ではない。よしや基督教讚美歌の日本語譯に或は哀れつばいひゞきがあるにせよ、その原歌の氣分はかなりに多くの場合に於てそれに比して遙かに明るい、また健氣なものである。その著しい一例がこの *Nearer, my God, to Thee* である。この歌が事實上公にせられたのは上に述べたとほりに一八四一年のこと、この事實にはたしかな證據がある。上に云つたユニテリアン牧師、フォックス氏が禮拜堂用の讚美歌集として、此年ロンドンで出版したものゝなかにアダムス夫人作の歌が合計十三のつてゐるが、その一つが即ちこれである。この一八四一年とは云ふまでもなく、彼女自身の三十六歳の時、即ちその死より七年前の事である。随つて明かになつて來るのはこの歌の作られたのがエリザの病死以前であつたといふ事實である。以上の材料整理の結果、もは

や疑ひ得られないのは、ジイ・エイ・リースクが傳へてゐる上掲の陰氣千萬な緣起ばなしに何等の根據もない事である。私がこの事實を喜ぶのは他人の著書のあらさがしとしてではない。むしろ私等の胸中に今なほ潜みちな偏見——宗教の本性に對する淺見のあらが明かに現はれて來るからです。

今ひとつ世に傳へられてゐる處によれば、この作者はかなりにすぐれた美貌と愛嬌とをもつてゐて、其等の奥にたゞへられて居たのがまことに奥ゆかしい女らしさであつた、しかもその健康を維持した頃に、彼女は快活、飄輕で、また勝氣が強かつたといふ。もしも此等を事實とすれば、この女流作家の魂を壓してあのとほりに微妙な讚美歌をつくらせた壓力の出處は勿論彼女の生活の外面的の不仕合ではなかつた。否、その大部分はむしろ彼女の内面生活自然の要求から發したものであらう。彼女にとつてその晩年の病ひは畢竟一つの打固めであつた。この外壓力の下に、いよいよ固められたのが彼女の幼な時のかたその魂のうちに成熟しつゝあつたサムシングである。あの四十代の病症をまたないで、その人生經驗が三十年代に熟して來ると俱に、あたかも「水到りて渠成る」やうに、自然に歌ひ出

されたのが彼女の魂に、かねて久しくたゞへられてゐた心の音楽その物であらう。沙翁劇の組立てられた事情の細目を彼の傳記中にさぐり求めるのが徒勞であるやうに、この歌が作られた際の境遇を、かれこれ想像するのは、また無用であらう。春たちかへれば、梅も櫻もさきいづるのが、天地自然の順序である。沙翁にあたへられた自然性がその作者生活の第三期においてあの四大悲劇の爛漫たる八重櫻となつてゐると同様に、サラア・フラワア・アダムス夫人、天稟の性情が彼女の女ざかりにおいて早くも綻びさせたのがこの純潔清淨な梅花一輪であらう。さてこそこの讚美歌を吟詠して、何人もおほへるのは、その氣分がさらに病的でなく、かへつて彼女のおさな名「Flower」のやうに一方においては、花の美しさをたたへつゝ、他方においてはその氣分のサラツとしてゐる處であらう。

玉にもをしききび一ツ

この讚美歌に於てたゞ一ツ遺憾と思はせるふしがある。その第一節、第三、四行の

Even though it be a cross

That raiseth me;
が我々の讚美歌に於て

のほるみちは十字架に

ありともなど悲しむべき

と譯してある。私等の見方によれば、このライフに於いて私等を raiseth おしあげてくれるのはとりもなほさず十字架である。これは一の事實である、斷じて假定ではない。これは當然斷言せらるべき事實である。決して或ひは然らんとか、假に然りとしてもなどといふなまはんじやくの事ではない。現在私等の間に今もなほ多く行はれてゐるのがアダムス夫人同様に、これを一の假定と見做す見方であらう。私等がまづ明らかに決めてかゝらねばならぬのはライフとは十字架であるのか、または時としてさやうな事もあり、また時としてさやうでない事もあるのか、事實は果してどちらであるかと云ふ問題である。これを決着してかからねば、私等の人生觀にたへず響いて來るのが一種の動搖で、またその思想の動搖がただちに實現させて來るのが行爲の動搖である。随つて一種の矛盾と不徹底とが私等の實

實際生活に纏ひつきやすい。それは畢竟私等の人生觀そのものゝ矛盾と不徹底との直接的産物でありませう。

現在行はれてゐる日本語譯の讚美歌をその原作に比較するならば、原作に及ばないところが澤山ある。この二四九番もまた一例である。その翻譯の仕方にて、訂正したい處が少なくない。しかし茲にとりたてゝ吟味してみたいのはむしろその内容である。即ち「のぼるみちは十字架にありとも」といふ假定が私等の思想並びに信仰にどんな影響を及ぼしてゐるかといふ一の實際問題である。茲に用ひられてゐる言葉の上から云へば、此等二行の日本語譯は幸にも大體上その原文に近い。即ち原歌の内容はこの翻譯が云ひあらはしてゐる處に比して大差がない。この觀察の下にその必要を益々覺えさせられるのはこの假定の根柢を明にする事である。この「のぼるみちは十字架にありともなど悲むべき」といふ文句は果して私等の平素の信仰を代表してゐるであらうか。勿論人生様々の境遇に處する時、私等がそこに嘗めさせられる苦痛は種々雑多である。かやうな時に、私等自身は屢々「のぼるみちは十字架にありともなど悲むべき」と歌ひつゝ、精進してゆく。ライフの上り坂

に恐れをなして後退りするよりは遙かに勝つてゐるのはこの十字架に面して不退轉の心を把持する事である。しかし茲に尋ねたいのはこの「十字架にありとも」といふ假定が果して私等にとつて正しきライフの見方であるか、否かといふ事である。

私等にとつての上り道は當然十字架である。人生に於ける唯一つの路、所謂のつびきならぬ進路として、私等の前に開けてゐるのはこの一筋路である。この外の一切の傍道に入る事は私等に許されてゐない。苟も基督の弟子たらんと志ざす以上、否でも應でも、進まねばならぬのは十字架の道である。これが即ちあの福音書が私等に指さしてくれる所であり、また基督御自身が私等に先驅してゆかれた道である。かやうに一方に於て人生の上り坂は十字架のそれであるといふ徹底的の覺悟に比して相去る事の遠い考へ方は即ち人生には時々十字架のある場合もある、またそうでない場合もある、自分は今丁度その十字架に當つてゐる、これは自分の不仕合せである、不仕合せは不仕合せとあきらめて、行くの外はなからうといふ考へ方である。私等の胸中に平常たえず隠見出没しやすいのはこの第二の方であらう。人生の苦みと試みとに對する私等の考へ方はかやうに不徹底である。その當然の

結果として私等の自制克己が消極的になりやすい。あの舊約以來この世界に雲のごとく現はれて私等をとりかこんでゐるあかし人の群とまた新約以來星のやうに輝いて私等を導いてゐる信仰の諸先達とが事實上示してくる通りに、苦みの中に感謝しまた悲しみの中に讚美するといふやうなけなげな、張りのある信仰が、私等にまだ乏しいのはとりもなほさず私等が自らこの假定より脱出する事がなほ少いからであらう。

「のぼるみちは十字架にありとも」といふ假定が必然的によび起すのは意志力の不自然な働かせ方である。苟も徹底した考へ方におのづから伴つてくるのが感情の調節で、そして徹底した智力と調節された感情との間にはらまれて自動的に發動してくるのが健全な意志力であらう。これら三力のかやうな共鳴合奏のうちより具體化して來るのが私等毎日の救である。かやうな觀察點よりこの讚美架を見れば、「昇る道は十字架にありとも」ではなくて、「十字架こそ我をおしあげるのだから」とまづ思想を整理し、同時に感情を調節しそして結局意志力を整調するのが人生第一の要件となつて來る。然るにこの要件を曖昧に附して居る處がとりもなほさずこの歌の玉には惜しききづ一つである。

一八四〇年代の英國思潮

この讚美歌が出來たのは實際いつであつたか、それは私等にわからない。たゞしこの歌が公にされた年號は上に述べた通り一八四一年である。この年號がこの歌のなかみのねうちを判断するに、私等にとつてよい材料である。但し一八四〇年代の作が私等現代人に對して物足らなさを覺へさせると批評されるのは必ずしもその作品にとつて、大恥辱でもなからう。

一八四一年頃の英國の思潮を推し測り得べき手近な方法の一つはその頃出版された文學書類にひととほり眼をとほす事であらう。まづデイッケンズのをあげるならば、一八四一年はかのアクリスマスカロール出版の僅か二年前である。次にテニスンの方を見るならば、彼の「ロックスレホール」の出たのはこの年の一年後で、同じ年より後九年目に、公にされたのはかのインメモリアムである。カアライルの著述においては、前年講演された英雄崇拜論が單行本となつたのはこの年の事で、そして九年後に彼の筆になつたの

があつたラッタアデイバムフレツツ（末日冊子集）である。轉じてブラウニングの詩をみるならば、この年に出たのがあのビツバアバツセスで、それから九年目に公にされたのがクリスマスイーブエンドイースタアデイである。テニソンのインメモリアム、カアライルのラッタアデイバムフレツツ、ブラウニングのクリスマスイーブエンドイースタアデイ等屈指の代表作がつづいて出た一八五〇年は英文學史に所謂 ヴキクトーリア女王朝時代の第一年で、これより溯つて九年目の一八四一年は即ちロマンティック時代の末期であつた。このロマンチズムの末期即ちその生命力がとくに衰へてその弊害がすでにあらはになつて来た時勢の一産兒として、この讚美歌にもまた多少は宿つて居るのがロマンチズムの弱點と缺點とであらう。

これを一層具體的にいふならば、かのデイッケンズの「クリスマス祝歌」によつて代表されて居る人間の完全化可能即ち周圍環境の改善によつて期し得られるのが人間の完成即ち Human Perfectibility であるといふ理想主義的の思潮はすでにその満潮期を通り越して、はやくもその引潮どきに入らんとして居た。この潮合に生ずる一種の渦巻とし

て、その形の美しさとその勢の強さにかゝはらず、その流に一定の方角を缺いてゐるのかかの「ロックスレホール」である。世界の終極と人類の前途とを支へんとしたこの「館」の二柱即ち科學と貿易とがもろくも引き崩されて、ヰキクトーリア中期の人心が陥つた信念不徹底と疑惑満腔との混亂状態を歌つてゐるのがかのインメモリアムである。一方政治の舞臺に於ては、民衆多數の勢力がその頭をもたげて来て衆愚の跋扈を見るのであらうかといふ悲觀をいだきながら、少數の偉人が天よりつかはされて、社會の趨勢はその巨腕に指導されるであらうといふ英雄史觀に己が思想の兩脚をふみ締めようとりきんでゐるのがカアライルであつた。彼のかやうな大聲疾呼を今につたへてゐるのがかの「英雄崇拜論」である。しかるに一八五〇年七月二日に於けるサアロバアト・ピール（當時の保守黨内閣總理大臣）の急死が彼の英雄崇拜主義にとつての最後の一撃となつて、かの「末日冊子集」の八月號を絶筆として、カアライルはその政治論を中絶してしまつた。思想界の潮勢かやうな一轉化をなしたあつた時代の産物として當然まぬがれないのは多少の濁りと亂れとである。この混亂状態の一反映と見なして、一層よく合點し得られるのが惜むべ

しこの玉のやうな讚美歌にも宿つて居る一のきづ——「のぼるみちは十字架にありとも」といふ假定説である。

黙示録最後の不徹底

この傷はたゞに一八四〇年代の英國思潮ばかりでなく、また遙かに遡つて新約聖書最後の巻の黙示録にかゝけられてゐる。新しき天と新しき地との描寫中に早くも孕まれてゐると見做し得られよう。その第二十一章第一節より五節までに曰く、

我また新しき天と新しき地とを見たり。前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。我また聖なる都・新しきエルサレムがその夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、そこより降るを見たり。また大なる聲の御座より出づるを聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も、號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり。斯て御座に座し給ふもの云ひたまふ「視よ、われ一切のものを新にするなり」また言ひたまふ「書き記せ、これらの言は信すべきなり、眞なり。」

茲に新天地の中心として描き出されてゐる神の幕屋は神が人と偕にゐます處、また人が神と偕に住まふ處である。然るにその神人偕在の所産として茲にまたあげてゐるのは神自ら人の涙を一々その眼より拭ひ去り給ふて、そこには死もなく、悲しみもなく、叫びもなく、苦しきもない状態である。この涙なく、死なく、悲みなく、苦みなき状態をもし福音書の慣用語にひるがへすならば、それが即ち十字架なき生活であらう。そもそも我々の前途に掲げられてゐる生命充實の状態とははたして涙なく、苦みなく、否十字架なしのそれであらうか。今かりにさやうの境涯があるとしても、我々の精神は果してそこにはいつて自ら安んじ得るであらうか。私自身はむしろ否と答へたい。勿論黙示録當時の小亞細亞に於ける基督教徒は一種の迫害を羅馬政府の當局者よりうけつゝあつた、またはまさにうけるであらうと懸念しつゝあつた。随つて彼等がこひねがつたのは迫害なき状態である。またかやうな無迫害状態が未來に於て彼等の自らは入るべき理想的生活であると考へたのは當時の人情として無理ならぬ事であらう。この記録の最初の讀者等が殊勝にも耐へ忍びつゝあつた窮狀と苦痛とを察すれば、私等がまた當然表すべきは彼等に對する同

情と尊敬とである。が、しかし基督教徒未來生活の理想記録として、これを讀む時に、私等の魂をひきつける力に乏しいのはかの涙も、死も、歎きも、叫びも、苦みも、また十字架もなしといふ六無式の生活状態であらう。

豫想し得られる未來生活の中味

私等が進んで一段高い生活に入らうとし、更に氣高い向上心を實現しようとする時に、必至的に懷かせられるのが苦痛感である。この苦痛に對する穩健な見方はこれを目して進歩に伴ふ當然の代價であるとするであらう。かやうに考ふれば、進む事の高さをまずに随つて私等のライフが益々必要とするのは更に深い苦痛であらう。發達の廣がるに伴つて、私等の感受性の逆ばしりとして必ず出てくるのは一層大粒の熱涙であらう。私等の魂の奥底のこひ願ひは周周の炎熱に避易して蓮の臺に晝寢の夢をむさぼる事ではない。むしろ一層濃ゆい油汗をたらしても、之に對抗して生の充實を實現してゆく事であらう。若き頃にこぼれやすかつた涙の滴が中年時代に入つて容易に出て來ないのは必ずしも

自制克己の力がまして來たのみとはいはれない。或ひはその人自身の精神力が一種の痲痺状態に陥いつた感動力衰弱といふ精神的症狀にすぎない事も屢々あるであらう。世間に云ひならはされて居る「年寄の涙もろさ」といふ言葉も味ひ方次第では、必ずしもその人の精神力のだるみのみを意味するのではなからう。かへつて公事に處するに私心なきがゆゑに、年來の舊知たるにも係らず、馬稷を斬つて、敗軍の責任を明にしつゝ、しかもその遺族をあはれんでたすけた時に、諸葛亮が揮つたやうな涙も此の世には少くないであらう。人生の経験に鍛はれつゝ、浮世の辛酸にもまれゆくうちに、益々圓熟してくる私等の人間味の結晶として尊く輝く涙の露もまた多くあるであらう。

將來の豫想において私等のこひ願ふのはいはゆる涙なく、苦痛なき状態ではない。むしろより大いなる苦痛を耐へ、より熱き涙を迸ばしらせ得べき人間味の一層發達した状態である。現在の生活に於ては所謂常識の強壓力におされて、曖昧なきらめに陥りやすいのが私等多數の實状であらう。所謂悟りとは多くの場合に於て其實あきらめである。しかも其あきらめとは大概の場合に於いて知覺神經の痲痺、または向上的努力の鈍化作用

にすぎない。云ひかへれば、あきらめとは一種の退化作用である。永遠界における生命進化の途上に於て私等が断じて排すべき退化作用である。退化をしりぞけて進化を追求するならば、その生活に必然的に伴つて来るのはより大なる苦痛・より深き悲み・より熱き涙であらう。それを福音書の用語に翻譯すれば、即ち一層重き十字架であらう。十字架の缺けてゐる處に文字通りに缺けてゐるのが生命の進化である。一面より見て、生命の進化とは即ち十字架の連続である。無限生命の進化とか、無量壽の實現とかいふのは空想的太平洋の波にゆられながら、ふはりふはりと浮きくらすくらげ生活の眞似事ではない。むしろ險しい山坂に一步一步汗ばみながら重荷の車をひきあぐる苦勞人の生活であらう。

黙示録時代のクリスチャンに見届けられなかつたのはこのライフ、即ち十字架の連続といふ考へ方である。またあの一八四〇年代の英國思潮がかやうなライフの眞相を徹底的に明らかにし得なかつたのも無理のない事であらう。したがつてサラア・アダムス夫人のこの讚美歌がその劈頭第三行において十字架を假定化してゐる不徹底さ——否これを断定してゐない不徹底さも微塵あやしむに足りないであらう。

「よしや——假にのぼるみちは十字架にありとすると、むしろ「事實實際のぼるみちは十字架にあるのだから」と初めから、覺悟してかゝる事がライフに對する私等の第一要件である。悲みや苦みは一時的のものと逃避的に考へさへしなければ、——また涙は不覺の弱味の露出ではなくて、むしろよりよく鍛錬された人間味の迸ばしりである。みきはめさへすれば、此等はライフの十字架に最もふさはしい私等の捧げ物であり、また天父の御眼に最もよるこばしい犠牲であらう。勿論、かやうな考へと信仰とを日常の實行生活に翻譯し出すのは決してなまやさしい事ではない。されど私等が日夜自らねらひゆくべき標的は無苦痛即ち朽木のやうな状態ではない、無熱涙即ち枯葉のやうな生活ではない。

黙示録最後のかやうな不徹底さは私等をしてその所謂新天新地より更に一步前にふみ出させて、他日この二百四十九番にまさつて勇ましい讚美歌をうたはしめる時がくるであらう。その時の早からん事がこの世界を通じて人類共通の切願宿望である。

Then, with my waking thoughts
Bright with Thy praise,
Out of my stony griefs
Altars I'll raise;
So by my woes to be
Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee!

Or, if on joyful wing,
Cleaving the sky,
Sun, moon, and stars forgot,
Upward I fly,
Still all my song shall be
Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee!

Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee,
E'en though it be a cross
That raiseth me;
Still all my song shall be,
Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee!

Though, like the wanderer,
The sun gone down,
Darkness comes over me,
My rest a stone;
Yet in my dreams I'd be
Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee!

There let my way appear
Steps unto heav'n,
All that Thou sendest me
In mercy given;
Angels to beckon me
Nearer, my God, to Thee,
Nearer to Thee!

一三、「主よみもとに近づかん」

一、主よみもとに ちかづかん

のぼるみちは 十字架に

ありともなど かなしむべき

主よみもとに ちかづかん

二、さすらふまに 日はくれ

石のうへの かりねの

ゆめにもなほ 天をのぞみ

主よみもとに ちかづかん

三、主のつかひは みそらに

かよふはしの うへより

まねきぬれば いざのぼりて

主よみもとに ちかづかん

四、めさめてのち まくらの

石をたてゝ めぐみを

いよよ切に 稱へつつぞ

主よみもとに ちかづかん

五、うつしよをば はなれて

天かける 日きたらば

いよよちかく みもとにゆき

主のみかほを あふぎみん

一三、「主よみもとに近づかん」

本書第一章に對する早速の反響——本稿所載の福音新報並に大森組合教會

月報を見てくれられた諸賢より到着順その儘に轉載

十一、大森組合基督教會牧師 小北峻次郎先生より

或る祈禱會の夕、浦口兄は、ヨハネ傳第九章四節「我を遣はし給ひし者の業を我ら畫の間になさざるべからず。夜きたらん、その時は誰も働くこと能はず。われ世に在る間は世の光なり」との聖句について感話を述べられた。それは實に着想卓越、内容豊富、而して學理と實際問題とが混然として融合した大説教であつた。當夜集つた二十名内外の人々が聞いただけでは、勿體ないと思ふた。ところが其後間もなく、私は東北地方の講演旅行に出かける事になつたので、留守中の教壇に立つて、あのお話をもう一度して頂きたいと頼んだが、一度話したものだからと云ふので固辭された。けれども遂に私の希望を容れられたので、安心して出發する事が出来た。そふして講演旅行から歸るとすぐ、會員の方々から非常に有益な御話であつたと聞かされたので、私は自分の先見の明があつたような誇りをさへ感じた位であつた。

八月の大森教會月報に掲載して、一人でも多くの方々に讀んで頂く事にしたが、更らに不日上梓

せられる小冊子に「日光の續くかぎり」と題してその巻頭を飾る運びに至つたと聞いて、私は欣快に堪えない。

この一篇ばかりではない。概して云ふと、浦口兄の感話と説教とに通じて、一二の特徴がある。聖書を取扱ふのに、その一言一句をおろそかにせず、その意味を徹底的にしらべてかゝるといふ努力振りがその一で、隨つて浦口兄のはなしや文章には屢々一種の新し味があつて、そこに世間の所謂お座なり風が少くない。そこが其二である。此等の特徴の故に、今度の出版物がかなりに廣く讀まれるであらうと私は信じてゐる。

十二、明治學院、高等學部長、笹尾条太郎博士より

浦口學兄、いつぞや學院の講堂で、朝の禮拜の司會者として、ヨハネ傳第九章の數節をお讀になり「この人の罪にも親の罪にもあらず、たゞ彼の上に神の業の顯れんためなり。我を遣はし給ひし者の業を我等畫の間になさざる可らず。夜來らん、その時は誰も働くこと能はず。我世に在る間は世の光なり」との耶穌のお言葉についてお述べになつた御感想は頗る暗示に富み、私達の靈性修養の上に裨益するところが多くありました。私はその事を深く感謝してゐましたが、八月四日發行の福音新報にあの立派な御話が更に充分に敷衍されて御寄稿になつたのを、繰返し繰返し拜讀しました。同新報の

本稿に對する早速の反響

愛讀者諸君の間にも、多大の感興が起つたこと、信じます。

私の娘が九州に行つて、長らく病臥して居りますが、それを先日妻と俱に見舞つてやりました。その際、私達は愚痴をこぼしたくなつて、もし數年前一寸この病氣の徴候があつた時に、醫者がよく注意してくれたなら、こんな事にならなくて済んだかも知れなかつたのになどと思ひました。然るに娘の方ではそんな氣配が少しも見えませんが、寧ろ日々神の恩寵に浴して居る事を感謝しつつ、歡喜と希望とに満ちて、重い病氣と戦つてゐてくれる様子が見うけられました。この有様に面して、私達の方がかへつて勵まされ、かつ慰められました。誰でも病ひの原因や、その經過などをよくよ思はずに、耶穌の御言葉通りに「神の榮光のあらはれん」ことをひたすら希ふことを得るのは、信仰生活者の大なる特權であると、今更ながら思ひ當りました。大兄の御話の筋と思ひ合せて、今もなほ感謝してゐます。

また「信仰の大と實行の小」といふ一節も、今日の世界に於て、基督教的事業に従事して居る多くの人々にとつて、多大の力となり、また慰めとなる事と思ひます。「御國の來らんこと」を常に祈りつつ神國建設のために日夜奮闘して居ります者の理想は大であります。しかし我々の日々の仕事は、その實、人の目には見へない程に、小さい事が多いのです。亡びんとする一人の魂のために、人知れず己が心を碎いて居る時に、その事を痛切に感じさせられます。あの「我はこの世にある限り、この世の

光だ」と云はれた耶穌の想は、高く、その言葉は大であるのに、彼の行ひは、途行く時に見當つた目しひを一人、いやしたに過ぎない程に、小さかつた事を思へば、私等の毎日の仕事の意義をもつと深く考へねばならぬとの御はなしの趣旨は、私達にとつて、誠に適切、また重大であると思ひます。大兄の云はれた通りに、父子一體、大小無差別といふ、耶穌の神秘的信仰に生きてこそ、人生の意義が明らかになつて來ると存じます。

承れば、この御話や、其他の等しく有益なるを、一卷に集めて、近々御出版になるさうですが、その書物を通じて、世間多くの、既知未知の御友人をお喜ばせになる事と信じます。

十三、東京市芝區 普連土女學校長 富山時子様より

先生のおはなしの筆記を拜見して、私は甚だ面白いと感じました。御説教に對して、面白いと評するのは失禮ですが、正直に申して、私はほんとに面白いと感じました。處々の教會で、色々の御説教を承りますが、宗教家として定まつた位置にある方々の御はなしには、一定の型があるやうで、最初の數分のお言葉から推測して、大抵はそのおはなしの落ち處の見當がつかます。それほど型にはまつてゐるやうです。しかもその御趣意のある處や、御ネライの點がおうよそ私共にも推察出來ます。それだけ、おはなしの奥行が、浅いやうに感じられます。